

プ
ラ
イ
ベ
ー
ト
・
残
夢

無
坂
枝
杖

む
さ
か
え
つ
え

ヌードモデル

「紗里ちゃんが専属モデルになってくれてから、もう二年が過ぎるのか。時が経つスピードを、誰か、わたしが子供のときくらいの速さに戻してくれないかしらね」

若い裸婦像を専門とする画家の鈴森小百合が、パレットを取り付けられるアームなどの特殊加工を施した車椅子を自在に操りながら、自虐的に微笑んだ。

F八十号という大きなキャンバスを立て掛けた、まるで戦車のようないーゼルが鎮座するアトリエは、初夏の穏やかな日差しに包まれていた。

「先生、時間って、そんなに過ぎていくスピードが変わるものなんですか」

当惑するモデルに、
「あなたも、いまにわかるわよ。思い知ることになるわ」

自分の吐いた言葉に興味を持ち、反応してくれた相手なのに、そっけなく応じてしまう。

「ごめんなさい。つっけんどんだったわね。でも、あなただって、小学生だったときの六年間って長かったと思うでしょ。もしかしたらあの六年間が、人間の人生の中で最も時の流れが緩やかなときなのかもしれないわね」

やさしく語りかけるようにいい直して、

「少し休憩しましょう。疲れちゃった。いつものように珈琲を淹れてくださる？」

事故で下半身不随となり車椅子での生活を余儀なくされているとはいえ、そのたたずまいは凜としていて、少しも暗さは感じさせない。

事実婚を選択し一緒に暮らしている夫の龍門正和は、東京の有名国立大学医学部長を務めている。

医学部長というポジションは、副学長を置かない大学ではナンバーツー。事実上の、次期学長候補とも目される立場なのだ。

いま、目の前でモデルを務めている立花紗里は、その医学部に在籍する学生である。

「先生、珈琲が入りました」

休憩中は、裸の上にタオル地のバスローブを羽織っている。いつものように、サイドテーブルにカップをふたつ並べて置くと、寄り添うように自分も腰をおろした。

「ありがとう」

淹れたての珈琲にそっと口をつけながら、

「モデルをやってくれてた子が、急に、結婚するからと辞めちゃったときはどうしようかと思ったけど、すぐにあなたと出会えたのよね。あれはまさに、運命だったと思うわ」

言葉に、感謝の気持ちにじみ出ている。

「龍門教授の部屋にレポートを提出しにいったら、教授ったら、ポスターを持ってゴソゴソされてたんです」

沙里も思い出すように応じて、白い歯を見せた。

それが、ヌードモデル募集のポスターだった。ヌードモデルを急に失って、後任を探し求めていた妻のためにポスターを自作したもの、内容が内容だけに学生部の掲示板に張り出すことを躊躇していたところだった。

たまたま時間給の高いアルバイトを探していた紗里が、それに飛びついた。かくして、そのポスターが学生部の掲示板に張り出されることはなかったのである。

「あの日がレポート提出期限で、もうぎりぎりだったんです。わたし、あのころ経済的にピンチで、いくつか家庭教師を掛け持ちしてたけど、それだけじゃ生活できなくて。だから、教授のポスターを見て、コレダッと思ったんですよね」

だがいま、紗里は、実はヌードモデルを辞する必要に迫られていた。

彼女は苦学生だった。在籍しているのは国立大学医学部であり、授業料は私学ほど高額ではないが、その一方で、中学・高校生時代にアルバイトで貯めた蓄えも底をついてきていた。家庭教師などのアルバイトを複数掛け持ちしていても、少しずつ目減りしてしまっていたのだ。

このままでは、経済的に破綻することは目に見えていた。一年間休学し、まとまった資金を蓄え直したうえで復学するという、綱渡りのような道を選択するほかにないと覚悟を決めていた。

問題は、その話を持ち出すタイミングだった。

自分から辞めたいと言い出すのは、申し訳ないという気持ちが大きかったのだ。

当面、いまモデルを務めている裸婦像が完成するまでは、言えな

いと思っていた。完成したときが、言い出すタイミングかなと。

「今日はもう終わりにするわ」
「めずらしく、車椅子のアームからパレットを外し、さっさと画材箱を閉じた。」

気分が乗らない顔だ。

「先生、お元気がなさそう。大丈夫ですか」

「ありがとう。考えても仕方がないことを、どうしても考えちゃうのよね」

弱々しく微笑んで、小さくため息をついた。

「人生って、ふと気がつくとき、いつも堂々めぐり」

ぽつりと、つぶやく。

「考えたって、仕方ない。どうしようもないことなのにね」

重ねていって、自嘲的な笑みを浮かべた。

その翌日、紗里は大学の食堂にいた。

生活費を切り詰めるため、大学には弁当を持参している。セルフのお茶を入れ席に戻ってみると、

「久しぶり。おまえ、最近は部活に來なくなつたな」

趣味で所属している文芸部の仲間、大饗恭介が向かいの席に座って待っていて、話しかけてきた。

彼は法学部の学生で、将来は総務省のキャリア官僚をめざしていると聞いた。

「経済的にピンチで、部活どころじゃないの」

休学も考えているんだと打ち明けると、

「そうかぁ。実家からの仕送りなしで頑張っているんだもんなあ、えらいよ。ிட்டだったか、単価のいいバイトが見つかったと喜んでいたら心配はしていなかったんだ。贅沢は出来ないにしても、そこまで逼迫してるとは思わなかったよ」

「氣にかけてくれて、ありがとう。でも大丈夫。自分で何とかして絶対に医者になるから」

アルバイトで鈴森小百合のヌードモデルをしていることも打ち明け、いまの裸婦像が完成し、休学が許可された時点で、モデルについても辞めたいと打ち明けるつもりだというと、

「ちよっと待て。そういう話はすぐにでも、早めに伝えておくべきじゃないかな」

恭介が顔を曇らせた。

「困ったときに助けてもらった恩があり、いい出しにくいという気持ちにはわかるが、ギリギリまで黙っていて直前になって突然打ち明けるというのは最悪だと思う。事前に、早めに事情を丁寧に話しておくことが、お世話になった相手に対する礼儀だと思うぞ」

法学部だからということでもないのだろうが、論理的に諭されると、同年なのに、自分より遥かに大人だなと感じた。

「そうか。いい出しにくい話だから、ずるずると、隠したまままでいたけど、相手の気持ちになれば、確かにそうだね。大饗くん、ありがとう」

数日後、紗里は小百合のアトリエでポーズを取りながら、意を決し、話しはじめた。

「先生、実はわたし：」

経済的に立て直すために一年間休学するつもりでいること、つい

ては、窮地を救ってもらったこのモデルの仕事も、もう続けられなくなる旨、訥々と打ち明けた。

小百合は手にしていた絵筆を置いて、黙り込んだ。

気まずく長い沈黙が流れた。

やはり、ギリギリまで黙っていた方がよかったかなとも思いながら、うつむいて、重苦しい時間に耐えていた。

小百合は、ふうーッと細いため息をついて、

「事情は分かっただけどさあ、紗里ちゃん。あなた、一年休学しただけで、どれほどの資金が蓄えられると思っっているの。世の中、そんなに甘くはないわよ」

氷のように冷静な瞳を向けて、ドラスティックに問い詰めた。

「わかってるつもりです。最初は、キャバクラ嬢になろうと考えていました。ただキャバクラだと大勢のお客様と接することになるから、どうしても顔を覚えられるだろうし、それだと将来お医者さんになったときの信用とか、そういうことを思うと、避けたいかなと。なので、いまは、デリバリーヘルス嬢になるつもりでいます」

自分なりの計画を明かした。

お客がいるホテルや自宅を訪問し、性的なサービスを行う派遣型の業態で、基本的に一対一の仕事だ。キャバクラのように多くの男性との交流は避けられる。

「そうなんだ。そこまで考えていたのね。ただ、そうになると、大金を得ようとなったら、違法を承知で性行為まで求められるんじゃないの？」

客からの要求だけではない。同種の業者間競争もある。登録している会社からも、多くの顧客を抱える有名店ほど、ヘルス嬢に本番行為を求める傾向があるという話はよく聞く。

「覚悟は出来ています。わたし、もし本番を求められたら、積極的に応じるつもりなんです」

まっすぐに、小百合の目を見据えた。

休学する一年という貴重な時間を売って、少しでも多くの資金を蓄えるためなら、何だっけるつもりだと激白した。

「なるほどね。そこまでの覚悟があるのか」

あきらめたように、何度もうなずいた。

再び短い沈黙があつて、

「でもね」

医学部長でもある夫の龍門正和から聞いた話として、医師法第四条を持ち出した。

「罰金刑以上に処せられた者には、医師の免許を与えないことがある、と定められているのよ。だから医学部で龍門は、運転免許証を持っている学生たちには、くれぐれも運転には気を付けるようにと

注意喚起しているといってたわ。最悪、死亡事故だけは起こすなよと」

条文では、免許を与えないことがある、なので、逆にいえば免許を与える場合だってあるわけで、ちよつとした違反による罰金刑程度では問題にもならないのだろう。だが、深刻な刑事事件となるとそうはいかない。笑い話では済まされない可能性だってあるというのだ。

「捕まるとしたら、売春防止法違反よね。資金は作れても、医師免許がもらえなくなったら本末転倒。人生のすべてを棒に振るようになるかもしれないわよ」

鋭い指摘に、今度は紗里が沈黙した。

「あなたが人生をかけて考え抜いた、一大決心だということはよく理解できる。でもね」

女は、とどめを刺すように続ける。

「イヤなことばかりいうようだけど、デリヘルの仕事を具体的にイメージしてみたことはあるのかしら？ ホテルに呼び出されることが多いと思うのよね。呼ぶのは客。仕事場となるホテルは選べないわ。あなたは、呼ばれたホテルにいくしかないの。そうすると、フロントは、どう思ふかしらね。あ、あの女性、また来たってなるのよ。ごめんなさいね、脅かすわけじゃないの。でもね、警察は、同じ女性を頻繁に見かけるようだったら通報するようにと、ホテルに依頼しているって知ってた？」

紗里は、黙り込んだまま動かない。

悲壮な決意で考え抜き、決断し、死ぬ気で思い描いていた人生設計が、もろくも瓦解しようとしている瞬間だった。

紗里は脱力し、深く首を垂れたままだ。

重い沈黙だった。

空気が凍りついていた。

そんな長い沈黙を破って、

「だったら」

ここから、鈴森小百合が驚くべき提案を口にする。

「紗里ちゃんがそこまで考えているのなら、夫の性処理をお願いできないかしら」

自分たち夫婦は、お互いの愛情には揺るぎない自信があったからこそ、それぞれが社会的に確立しているポジションのことを考え、あえて事実婚を選択している。

だがいま、自分が下半身不随となって、状況が一変したのだという。

車椅子生活になっても、夫婦の愛情には寸分の陰りもないと思いたかったし、そう信じて暮らしてきたけれど、セックスの相手だけ

は務められない。夫の夜の生活を、結果的に奪ってしまっていることだけは疑いようのない事実であり、それが彼女の精神的な重荷となって、毎日が苦しいのだと打ち明けた。

考えても仕方がないことを、つい考えてしまおうといったため息をついていたのは、このことだった。

「龍門先生のお妾さんになれってことですか」

「そう思ってくれてもいいけど、わたしの気持ちは少し違うの。お妾さんって、第二夫人よね。それなりに精神的な結びつきも生まれるじゃないの。わたし、そういうのは絶対に困るの。龍門に抱かれることは仕方ないけれど、彼とべつたりの、ドロドロとした深い関係にはなって欲しくないの」

ときには、龍門の目の前で別の男性にも抱かれてみせることによつて、雇い主の龍門とは距離感のある、ドライな関係を保って欲しいのだと、繊細でマニアックな注文を付けるのだった。

「抱かれる対象は、夫と、あとは誰か限定した複数の男性になると思うけど、そういう意味では、お妾さんというよりは娼婦に近いと思ってもらった方がいいかな」

「純粹にビジネスだけの関係ですね。性欲処理のための、単なる肉奴隷に徹してくれと」

紗里がずばりと、あけすけに明快な言葉に置き換えてみせた。

肉奴隷という表現が生々しすぎて、小百合は断られると思ったようだった。

「と、いうより、むしろ、紗里ちゃんがなろうとしたデリバリーヘルス嬢に近いんじゃないかな。お客様の相手をお相手を命じることもあるけど、基本的には龍門専用のデリヘル嬢だわ」

いつも凜としたたたずまいを崩さない小百合が、すぎるような眼をしていった。

「ねえ、そうしてくれないかな」

小百合は、畳みかけるように言葉を重ねる。

「そのかわり、あなたは休学する必要はなくなるわ。若い時代の濃密な一年間を、休学なんかで無駄にする必要もなくなる。最悪、売春婦になる覚悟だったのでしょ。大丈夫。この方法だと逮捕される心配もなく、まちがいなくドクターにもなれる。将来に傷はつかないわ。わたしが保証する」

必死の、真剣な口ぶりが続く。

「龍門以外の男性を相手にするときは、紗里ちゃんだと気付かれないうちに、必ず顔を隠すことにするわ。あなたの未来に禍根を残したり、迷惑をかけたりすることのないように、最大限の配慮を約束する」

思い付く限りの条件提示を終えると、獲物を追い詰めたライオン

のまなざしで、まっすぐに紗里を見つめた。

「お願いよ、決心して」

これで、彼女の夫に対する申しわけなさが半減することになる。絶対に逃がしてたまるか。そういう猛々しい目だ。

紗里の表情から、なんとか話がまとまりそうだと感じたのか、
「あとで、嘘をつかれたとか騙されたとか思われると困るから丁寧に話しておくよ、彼のセックスは、ほんの少しアブノーマルなところがあるのよね」

そう打ち明けて、顔を曇らせた。

「傷が残るような痛々しい鞭打ちなどはしないから心配しなくていいけど、ときには縛ったりすると思うわ。フェラチオをさせられるのは、日常茶飯事だと思っていて。自分自身も好きだけど、他の誰かにフェラチオをさせて、それをそばで眺めているのも嫌いじゃないわ。あと、他には、気が向いたら、たまにお尻を使われたりするかもしれない。その覚悟はしといてね」

そこまで説明すると、彼にはもううんざりだという表情で、
「血圧が高くて困っているくせに、女性を辱めるような猟奇的な変態セックスが好きなの。ごめんなさいね」

興奮しすぎて暴走することもあるが、基本的には大人としての分別をわきまえているから安心していい。アダルトな性奴隷ゲームのヒロイン役を務めるつもりで考えてくれないかと、申し訳なさそうに頭を下げた。

話しぶりが、途中から、もう決まったことのようなトーンに変わっていた。

紗里としても、他に有力な選択肢があるわけではなかった。

デリバリーヘルスで本番にも応じながら、逮捕されるリスクにおびえながら働くことに比べれば、抜群に好条件のアルバイトだといえた。

なにより、もう休学を考えなくてよくなるのだ。

「わかりました。わたしなんかでよかったら、そのお仕事、お受けしますわ」

こっくりとうなずいた。

ドール

龍門教授から、呼び出し専用のスマホを渡された。

基本的にはいままでどおりに自分のアパートで暮らし、リクエス

トがあると指示された場所に紗里が赴くという、まさにデリバリーヘルス同様のシステムで、働きやすかった。

「はじめに伝えておきたいことがある。妻は、紗里くんを人形のようには扱って欲しいようだが、俺は、そんなつもりはないからな。俺には俺のやり方がある。そのつもりでいてくれ」

ビジネスライクな性処理用のドールとしてではなく、もう少し人間的でアダルトな女性として、濃密な肉体関係になりたいという意図がにじみ出ていた。

「わたし、お金で時間と身体を売った立場ですから。先生専属の娼婦だと思ってくださって結構です。どうぞ、ご自由に」

命令には出来る限り服従するとしか答えようがなかった。

「可愛いことをいう。よろしく頼むよ」

「それと奥様から、性病対策として、契約期間中のプライベートセックスは避けるようにと念を押されています。わたし、付き合っているような男性はいませんから、心配なさらないでください」

思い出したように付け加えると、

「紗里くんには、性病を持ち込まれると困るというくせに、一方では、定期的に俺以外の男性にも紗里を抱かせるようにしてくれと、支離滅裂な注文を出す女だ」

いつてることが矛盾していると、豪快に笑った。

紗里の生活が元に戻り、授業にも出るようになる、時には文芸部の勉強会にも顔を出すようになった。

「やあ、どうしてた？ 詩は書いてるんだろうな」

「うん、ときどき。でも、無理には書かないよ。発想が沸いたときだけ」

いつものように、恭介が声をかけてくれることがうれしかった。

彼には、休学しないで何とかやっていくことに決めたとしきいかなかった。

「そうか、よかったな」

彼も、さらりと、そう応じただけだった。

根掘り葉掘り聞き出すようなことは、自分からはしない。

心の底まで見透かしたような、鋭い洞察力を感じさせる目をしていたが、あえて、距離を置く接し方に徹していた。

「そういえば先日、街で本郷先輩を見かけたよ」

思い出したように、恭介が話題を変えた。

「本郷さんって？」

「たまに文芸部に顔を出す程度だった医学部の先輩で、本郷誠一郎というんだ。そうか、知らないのか。立花も医学部だからわかると思うが、医学部は、教養課程が二年と専門課程が四年の六年制じゃないか。二年生から三年生になるときに関所がある」

「そうよ。教養課程は、二年の倍の四年までに抜けないと放校、強制的に退学させられるわ」

「本郷先輩は、それになったんだよ。最後の最後、龍門教授の単位を落として。心配した友人たちが、教授の研究室に押しかけ事情を話し、追加のレポート提出なり再試験なりで救済し、本郷に単位を出してやってくれないかと頭を下げたらしいけど、彼は最後まで首を縦に振らなかった。龍門は鬼だ、鬼の龍門だと、友人たちは悔しがったらしい」

本郷という先輩とは、紗里は、会った記憶がなかった。たまにか部室に顔を見せなかったというから、たくさんのアルバイトを掛け持ちしていた自分とは、遭遇する機会がなかったのだろうと推測した。

それより、思いがけない形で、これからドロドロの肉体関係に染まっていくことになる龍門教授の冷酷な一面を知ることになり、ドキドキが止まらなかった。

鈴森小百合の個展が開催されていた。

紗里がモデルを務めて完成した新作八十号の裸婦像は、奇しくも「ドル」 というタイトルが付けられていた。

紗里の面影を色濃く残した幼顔の女が、シースルーのドレスをまとい、セクシーでアクロバティックなポーズを決めている。斜め下から見上げた瞳に、哀しそうな色を宿して。

その印象的な構図が独創的だと、新聞やテレビがセンセーションに取り上げ、大きな話題になっていた。

元々は何も身に着けない裸婦像だったが、仕上げの段階で、急遽薄物をまとうように求められた。その結果、無機質なトルソーのようだった裸婦に人間臭さが吹き込まれ、セクシーな作品に一変したのだった。

「妻の個展会場では、堂々たる主役じゃないか」

キングズ・ホテルのスイートルームで、バスローブに身を包んだ龍門正明は、立花紗里と向き合って座っていた。

テーブルには、豪華なディナーが並べられ、グラスにはワインが満たされている。

「モデルになっただけ。あれは奥様の作品で、わたし自身ではありませんから」

淡々と応じた紗里の首には、大型犬用のいかつい首輪が冷たく光っている。

ミニ丈の青いイブニングドレス姿だが、ライトが当たると肌が透けるセクシーなシースルーの生地だ。

ルームサービスの食事を運んできたボーイが、チラチラと、露骨に紗里の姿に視線を走らせていた。

「いや、あの絵はおまえそのものを表現している。小百合はそういう女だ」

断定するようにいって、冷ややかに微笑んだ。

「待たせたかな」

契約は結んだが、いままでは龍門からの呼び出しはなかった。今日が初めて、性奴隷としてお仕えする日なのだった。

「記念にスイートを取った。まずは服従のごあいさつだ。ご主人様のものをくわえて、しゃぶってみてもらうか」

聞いていたとおりのことが、いま、始まるうとしていた。

首輪を装着されたとき、男の性的嗜好はイヤでも思い出され、再確認していた。

第二夫人ではなく、まさに、卑しい性奴隷として、かしづくようにということだ。

あらかじめ窓際に設置されていたカメラの肩にあるボタンが、赤く点灯していた。

紗里が従順な性奴隷となる時間帯の様子は、すべて録画する約束なのだ。妻である小百合が、リモートで自由にチェックできるようにということ追加された条件だった。

愛の感情とジェラシーとは、表裏一体のものなのかと、つい思ってしまう。

「さあ、ぐずぐずするな」

龍門に叱責され、

「はい、ご主人様」

そそくさと立ちあがろうとすると、

「違う。床に這うんだ」

低い声で一喝した。

「ご、ごめんなさい」

反射的にしゃがみ込み、床に両手をついた。

自分の椅子を横にずらすと、四つん這いでテーブルの真下を進み、男の両膝の前で正座した。

「そうだ、それでいい。さあ、続けなさい」

「あ、はい。失礼します」

恐る恐るバスローブの裾を広げた、

男は下着を着けていなかった。

充実した質量の肉塊が、隆として仰立している。

皮がめくれ、先端の亀裂からわずかに粘液がにじみ出ているようだ。生まれて初めてまじまじと目にする、不気味な生の、男性器の姿だった。

これを口に含み、舐めるのかと思うと、心が震えた。知識としてはあったが、もちろん、経験などない。

ためらっているうちに魂が凍りつき、身体がすくんだ。

ヌメヌメと誘うように揺れる先端に、意を決し唇を近づけたが、触れる直前で全身が硬直し、そこから先に進めない。

そのときだった。

頭髪が驚ぶかみにされ、後頭部から、男の股間に顔全体を強烈に押し付けられたのだ。

「ううつ、む、むぐっ」

ためらい嫌がっていた異形の肉塊が、唇を強引に割り、押し入ってきた。頭が乱暴に揺さぶられ、反動で、肉塊がグイグイと激しくのど奥を突く。

「うぐっ、む、む」

強烈に、何度も繰り返し突かれた。

「むっ、むぐっ」

たまらず嗚咽しそうになる。

「耐えろ、吐くんじやないぞ」

すぐさま叱咤が飛んだ。

「むぐっ、ぶふっ、はい、んぐっ」

のど元まで込み上げてきていたものを、ギリギリのところで耐え、なんとか飲み込んだ。

「いいか、性奴隷にとって、フェラチオは基本だ。フェラチオは、いってしまえばあいさつだ。握手のようなものだと思えばいい。今日は初めてだと思って、事前にシャワーを使っておいてやったが、握手の前にわざわざ手を洗う習慣は、残念ながら誰にもない。いつてる意味はわかるな」

男の肉柱で口腔内があふれていた。

限界まで頬張った状態で、次からは、洗われてない臭うようなモノをくわえさせることになるぞと宣告されているのだ。

「聞こえただろう。わかったら返事をするんだ」

「む、むぐっ」

口の中に押し込まれている太い肉胴に、唾液を絡ませた舌をピタリと添えたまま、小さくうなずいた。

「俺の友人を客として招いた際にも、はじめましての握手は、当然これになる。忘れるんじゃないぞ」

これが、これからの自分の仕事になるのだと、自らに言い聞かせる紗里であった。

「あ、ふあい」

苦しそうに、クイツと頭を上下させた女の瞳に、うつすらと涙がにじんでいた。

場所をベッドに移して本番の行為に及んでからも、龍門の性癖はサディスティックな色が濃いものであった。短い縄で手首を縛ったり、豆絞りの手拭いで猿ぐつわを噛ませたりしながら、様々な体位を取らせ、ねちねちと執拗に責め立てた。

紗里が、龍門との最初の営みのすべてを終え、泥のように疲れてベッドに身体を投げ出していると、

「悪いが、小百合からいくつか注文が付いているんだよ。中でも特に、出来るだけ多くの友人を呼んで紗里を抱かせるようにと釘を刺されている。俺の性処理が目的ではあるが、独占的に楽しんで、おまえに夢中になつてしまつても困ると心配してのことだろう」

「大丈夫です。その点については、わたしも奥様から念を押され、重々承知して契約しましたから」

覚悟は出来ているから、心遣いは無用だと強がつてみせた。

「そうか、頼むぞ。それと、これは俺からの注文だが、おしやぶりが下手すぎる。あれではお客にも失礼だ」

あけすけに、未熟さを糾弾した。

「ご、ごめんなさい。初めてだったものですから」

覚悟はしていたが、まさか、舐めさせられる直前に、身体が金縛りのようになるとは夢にも思っていなかった。

男がフェラチオ好きだとは聞いていた。

心の準備も出来ているつもりだった。

それが、いざ、リアルな性奴隷としての時間がスタートすると、心の中で思い描いていたイメージと、リアルに目の前で展開される状況とは雲泥の差があった。

生々しく、異形の肉塊。

現実を前にして、まったく自分は未熟だった。

覚悟の足りなさを思い知らされた。

「仕事として受けると思ったわけで、その時点でおまえも一応はプロだ。プロならプロらしくしてもらわないとな。ネットには動画もあふれている。ソープに出て、現場でお客を相手に技術を磨けとまではいわないが、もっと勉強して上達するように努力すること。どうせそんなレベルだろうとは思っていたから、こういうものを用意しておいた。ほら、渡しておくから、ネットで学びながら、これを使って、実際の舌使いなども学習しておいてくれ。要は努力、積極的にレッスンを積むことだ」

そういつてポンとベッドに投げたのは、男性器を精巧に模した電動バイブレーターだ。

「次に呼び出したときには、少しは上手になっていてくれよ。楽しみにしているからな」

「は、はい。努力しますから」

放られた奇怪な筒具を手にとると、つい、みじめな気持ちになつてしまう。

そんな性奴隷デビューからほどなく、車椅子の画家鈴森小百合の個展最終日に、話題作“ドール”が何者かによつて持ち去られた。

通常は、最終日に作品の搬出が行われるもののだが、たまたま今回は、搬出と、次の展示のための搬入を、どちらも最終日の翌日に行うことになっていた。次が陶器展であり、壁面をまったく使用しないという事情で、そういうイレギュラーな作業予定が組まれていたのだ。

つまり、普段だと、全く作品が何もないはずの日の夜に盗みに入られたことになる。

「盗まれたのは大作の“ドール”だけなのよね。もっと盗みやすい小品も、同じ壁面に何点も並べていたのに、そっちは見向きもしないで」

小百合が憤慨していた。

「まるで、ごっそり盗んで欲しかったような言い草だな」

龍門が軽口をたたくと、

「そうじゃないけど、価値のある作品はあの一枚だけだと宣言されているようで、悔しいじゃないの。腹の虫がおさまらないのよ」

「せっかく奥様が心血を注がれた大作の八十号が盗まれたというのに、そんな、ひどい。奥様がお気の毒です」

紗里も、つい小百合に加勢した。

その日は来客があるということで、紗里も同席するようにと呼ばれていたのだ。

「紗里ちゃんありがとう。彼はあれで、わたしを慰めてくれてるつもりなのよ。無神経でしょ」

ますます小百合の怒りが増長し、込み上げてきたようで、紗里は軽率に口を挟んでしまったことを後悔していた。

気まずい雰囲気になったところで、インターホンが鳴った。

「おっ、来たな」

龍門が立ち上がって、玄関まで迎えに出た。

小百合はポケットから、深紅のリボンのような布を取り出した。

「紗里ちゃんは、これを着けて顔を隠すのよ」

横に広げるとちょうど中央の、鼻の部分だけ少し欠けていて、目を隠すように巻いて後頭部で結ぶ仕様になっている。

相手から見ると、鼻から上の顔がすべて隠れるが、薄いシルク製なので、紗里からはぼんやりとだが、視界は保てている。

「それとあと、これもね」

当然のようにいって、大型犬用の首輪も装着させた。

「わざわざご足労願って申しわけなかったですなあ」

龍門が紗里たちのいる居間に案内してきたのは、目つきが鋭く、全身に危険な匂いを漂わせている男だった。

「これが妻です」

まず、当然のように車椅子の小百合を紹介した。

「はじめまして、猿渡竜司です」

丁寧に関を下げ、目にリボンを巻いた紗里に視線を移した。

「そう、彼女が、調教をお願いした女ですよ」

玄関で男を迎えたのは龍門だったが、どうやら、男を呼んだのは小百合のようであった。

猿渡は、女性たちの調教を請け負う、どちらかというと裏社会に近い人物だが、サディスティックな調教の注文となると、アダルトビデオの世界では珍しくもないが、現実にはそう頻繁にはない。多いのは、ソープランドでの新人教育なのだという。

「わたしがこんなだから、この子に頼んで、主人相手にフェラチオの真似事をさせているんですけど、おしゃぶりの経験がないというものだから」

「承知しました。どうぞ、おまかせください」

紗里は聞いてなかった。

フェラチオのレッスンのために招いたプロの調教師だと、この時点で初めて知ることになった。

「じゃ、わたしはこれで失礼するけど、がんばって、しっかりレッスンを受けるのよ」

淡々と告げると、クルリと車椅子をまわし、居間から退室していった。

「それでは、ご主人はこちらに」

龍門を自分の横に座らせると、

「まず、いつものように、どうくわえ、どう舐めているか見せてもらおう」

紗里を自分の正面にひざまずかせた。

「未熟者ですが、どうぞ、ご指導ください」

丁寧に一礼して、男のズボンと下着を膝まで下ろす。

「失礼します」

いざ、口に含もうとしたとき、さっきまで隆々と屹立していたモノが、急に萎え、いまは垂れさがっている。

驚いて、もじもじしている紗里に、

「驚いたかな、お嬢さん。相手が常に勃起していると思ったら、大間違いだぞ」

諭すように声をかけた。

「ソープ嬢の指導で最初に話すのは、客の中には初めてソープに来

る若者もいるということ。そういう連中は、実はうぶで、心の中では異常に緊張しているんだ。とても勃起できるような精神状態ではないことが多い。そういう場合は、まずやさしく手に取り、包むようにしてくわえたら、飴玉をしゃぶるようにペロペロと亀頭を舌で転がし、舐めまわす」

さあ、やってみると、うながした。

「あ、はい」

おずおずと、もどかしそうに試みた。

「いきなりだから、今日はうまく出来なくても仕方がない。あとで、自分で何回も練習しておくことだ」

ポンポンと、軽く肩を叩いて、

「ときには、それでも勃起できないケースだってある。リラックスすることが重要なんだが、緊張してナーバスになると、精神的なコントロールが出来ないんだ。原因は男の方にあるわけだが、そういう場合は、下手でごめんなさいと、必ず自分の方から謝ること。男性側のプライドを傷つけないように、細心の注意を払うんだ」

そういうことかと思った。指示に従って、そっと、再び口に含みなおす。

いままでは龍門が相手だったが、妻である小百合の意向で様々な男性たちとも交わるころになる。そうなれば、時には女性慣れしていない男性をも、フェラチオでもてなす必要が生じることだってあるだろうと納得した。

この男は、ある程度自分を自在にコントロールできていうようで、紗里の口の中で、たちまち、ムクムクと質量を増大させていった。

「さあ、いつもやっているように舐めてみる」

「ふあ、ふあい」

練習用に渡されているバイブで、ビデオを観ながら学習し覚えた技術を織り交ぜて、必死で舐めまわした。

ひとしきり務めさせられて、あごが疲れ、少し痛くなってきたところで、

「大体いまので実力のほどはわかった。ビデオで練習しているというだけに、努力の跡は認めるが、細かな、くすぐるような舌の使い方全然なっていないな」

残念そうに首を振ったが、

「大丈夫。向上心と意欲があれば、まだまだ上達できる。大丈夫だからな」

強面に似合わず、やさしく励ました。

「それでは、これをくわえなさい」

男が持ち出したのは、全体がスケルトン素材の、男性器を模した筒具であった。

龍門から練習用に渡されているバイブより、ひと回り太くて長さもある。

「中にカメラが内蔵されているんだ。舌の動きが内側からリアルタイムでモニターに映し出される」

そう説明しながら、龍門の前にタブレットを置いた。

「さあ、チェックスタートだ。器具をくわえて、さっきのように自分の流儀で舌を這わせてみる」

そこからは、猿渡による厳しく細かなチェックが入った。ネット動画では大まかな動きは理解できても、口の中の、まして舌の這わせ方まではイメージを膨らませるしかない部分だって多かった。経験者でなければ、知りようもないマニアックな世界だ。

場面、場面で、唾液の絡ませ方から、要所への微妙な舌先の震わせ方など、猿渡は細やかに教えてくれた。

ひととおり技術面での指導を終えると、ベテランソープ嬢による舌の使い方のお手本ビデオをタブレット画面で見せてもくれた。

「完全にマスター出来るまで、繰り返し、これを見ながら勉強するといい」

「ありがとうございます。目からうるこのことばかりでした。勉強になりました」

深々と頭を下げると、

「安心するんじゃない。俺が教えられるのは基本的な技術だけ。だがな、現実の相手は血の通った人間だ。当然、同じように刺激しても、人により反応は異なる。感じ方には個人差があるんだ。そのことを常に頭に置いておくこと。可能な場合は、そつと上目遣いに相手の様子を盗み見ながら舌を這わせる。視覚を奪われているケースでは、口の中にある相手の微妙な反応に全神経を集中して、ちよつとした動きや変化に細心の注意をしながら、どこが敏感なポイントか瞬時に把握することが重要になる」

人間の性的反応は、心理状態によっても変わり、パターンどおりにはならない。臨機応変の対応が必要だと、最後に付け加えた。

猿渡がレクチャーを終えたタイミングで、

「もしよかったら、その女、抱いてやってくださっても構いませんよ」

龍門が誘うと、

「せっかくだが、こういう生真面目すぎるタイプは趣味じゃないんでね」

ニヤリと凄んでみせて、

「人間ちうのは、俺もそうだが、みんな弱みを見せまいとして、無理して強がり、虚勢を張って生きている面があると思うんだが、この女は、首輪を着けられているくせに、妙に、まっすぐな目をして

いる。何かにすがって生きているというマゾ女によくある依存性も感じない」

「そこまでいったあとで、
仕事としてなら、抱いてもいいが」
そう付け足した。

変に生真面目な女は趣味じゃないんだと、独特のいいまわしで、それにこの後も予定の仕事が入っているからと固辞し、飄々と帰っていった。

「振られたな」

龍門が残念そうに微笑む。

「はい。凄腕の性の専門家だから、抱かれたらどうなっちゃうんだろうとドキドキしていましたけど、何だか肩透かし。本当に振られた気分です」

ホッとした半面、複雑な表情を隠さない。

翌日、大学で授業を受けていると、スマホに着信があつた。

龍門から持たされているスマホ。

見ると、昼休みに研究室に来るようにとの指示だ。

「お呼びですか」

「ああ、待っていたぞ。下着を取って、すぐこれに着がえておきなさい」

龍門が投げたのは、一見すると紐の塊のようだった。手に取って紐をほぐしながらよく見ると、ブラジャーとパンティだった。

ブラジャーは胸を包む部分がくり抜かれてあるカップレスで、だから一見すると紐のように見えたのだ。パンティもデルタ部分が極小の紐パンだ。

「着がえたら、これもだ」

渡されたのは、目を覆う、性奴隷となるしるしのリボンだった。

そういうことかと察し、リボンを顔に巻いてうつむくと、手を引いて窓際まで連れていかれた。

ここで、室内に背を向けて立って待つようにとの指示だ。

しばらくすると研究室のドアがノックされ、スリムで青白い顔の男が入ってきた。

「お世話になります、青木です」

「ああ、やつときたか。待ってたよ」

入ってきたのは、龍門が医学部長になってから取引が急増した文久製薬の、今年から龍門に張り付くことになった新人社員だった。

「さあ、こっちに来てくれ」

奥まで招き入れ、

「忙しいのに呼び立ててすまん。これからは何かと君に世話になるわけだ。細かい点は先輩に学んでもらって、いままでどおりの条

件で、これからもよろしく頼むよ」

まるで来賓でももてなすかのように、若造社員を、窓際に置かれた応接セットまで案内するのだった。

研究室が狭いこともあり、来客用に、ベンチシートタイプのソファがデンと置かれ、かたわらに小さなサイドテーブルがある変則的な配置だ。

すぐそばには、背を向けて紗里が立っていた。

「まずは、まあ座ってくれ」

「恐れ入ります」

龍門の意図がわからず、恐縮しながら腰をおろすと、

「さあ仕事だぞ。大切なお客様の、青木隼人君だ。さっさとおもてなしをしないさい」

淡々と命じた。

紗里は、そういうことかと思った。

「はい、ご主人様」

ゆつくりとブラウスのボタンを外し、スカートを脱いだ。

カップレスブラと紐パン姿になって、おずおずと、ためらいがちに振り返った。

「えっ？」

予期せぬ妖しくも艶めかしい姿に、男は驚きを隠さない。

紗里は男の正面にまわり、正座すると、

「いらっしやいませ、青木様」

リボンで鼻から上を隠した顔で、深々とお辞儀して迎えたのであった。

正座したまま床を膝でにじり寄り、

「失礼しますね」

ベルトをゆるめ、ズボンを下着ごと膝まで下ろした。

「あ、おおっ」

突然のことに動揺しながらも、そっと腰を浮かすなどして、ちゃっかり女に協力している。

準備が出来て、露出された肉塊に紗里の白いしなやかな指が触れたとき、垂れてお辞儀していたモノが、ムクムクと頭をもたげてきた。変化は続き、メリツと皮がめくれた。太く長く形状を変化させながら、急角度に屹立してくる。

「それでは失礼します。無作法ですが」

そっと唇を近づけ、舌をのばして、チロチロと舐めた。

頭頂部から直後のくびれた首回り、充分な膨らみを保った長大な胴部へと、時間をかけながら丁寧な舌を這わせたあと、

「くわえますね」

亀頭からパツクリとしやぶりついていった。

「おおっ、す、凄い。気持ちいいです」

少しは緊張がほぐれてきたようで、青木が、うれしそうにうめいた。

「気に入ってくれたかね」

龍門が、満足そうに声をかけたとき、

「あ、あ、あ、ダメだ」

紗里の口の中で、若い、暴れん坊が勢い良く跳ねた。

「ああっ、ごめん、出ちゃった」

「いいんだ、構わない。すっきりするまで口の中に全部出してやってくれ」

紗里は、男が放出した後も、しばらくは動かなかった。しつかりとくわえ続けたまま、ゆっくりと先端部分に舌を這わせている。

硬さは徐々に緩む気配があったが、萎えてしまうほどでもなく、ほぼ質量に変化もなかった。

「ふむ。青木君は若いから、すぐに復活しそうだな」

そんな龍門の言葉を聞き流しながら、紗里もまた、同じ感覚を持っていた。

「気に入ってくれたのなら、抱いてもいいぞ。好きにしてくれたらいい」

「ありがとうございます。ぜひ」

それを聞いて、紗里は男を口から解放した。

「本当にいいんですか。そうかあ、せっかくだから、よろしく願いますね」

男は紗里を床から抱き起し、うしろ向きにして自分の膝の上に乗せた。

揃えた膝をまたがせると、背後から腰を密着させ、乳房に両腕をまわして、ムニユムニユと揉み立てる。

夢中になって熟れた肉球にググツと指を沈めると、

「あ、あああ」

たまらず、うめいてしまう。

「あ、ごめん。大丈夫ですか。痛かったらおっしゃってください」

「だ、大丈夫です。平気。つ、続けて」

「よかったです。じゃ、これは？」

ツンと上を向いて膨らんだ乳首を、ちょんちょんとつまんだと思ったら、急激にねじり、押しつぶすように力をくわえた。

「あうっ、ああっ。く、くう」

双眸を細め、快感を味わうような愉悅のあえぎを漏らした。

ふと気がつくとき、さっき爆発したばかりの男のモノがもう勢いを増し、紗里の股間を突いていた。

その変化に呼応するように、男の指が、乳房から太ももの内側へ

と降りてきた。

「触ってもいいですか」

「ああ、は、はい」

うるんだ瞳で、恥ずかしそうに応じた。

「ああ、凄い。クリトリスが、もうこんなに膨らんでいる。どうですか。こうされると。気持ちいいですか。よかったら、いいといってくださいね」

秘唇からにじみ出た花蜜を指にからめて、赤く充血した豆粒をクルクルと撫でまわした。

「あああっ」

小さく咆哮し、大胆に反り返ったかと思うと、ダイナミックに首をひねって後ろを向き、背後の男に唇をねだった。

「お、おう」

青木がすぐさま応じ、猛然と唇を重ねると、発情した二匹の野獣と化して、むしゃぶりつくように舌を吸い合うのだった。

唾液を絡ませ、むしゃぶりつきながら、男の腕は、カップレスブラと紐パンしか身に着けてない女体を貪欲にまさぐっていた。

「も、もう我慢できない」

青木は、紗里の身体を膝で浮かすと、紐パンの腰にある結び目を解いた。紐パンだから、そのままでも挿入は可能なのだが、あえて脱がせることで、明確な意思表示をしたかったようだ。

女も、無防備になった尻をクネクネと振り、探るように肌を密着させて待機している。

「じゃ、いいね。入れるよ」

「ああ、は、はい」

ついに、男がズズツと腰を進めた。

根元まで深々と挿入し、周辺のまとわりつく肉壁の状態を確認すると、グツ、グツと、下から突き上げる。

「あ、はあ、あ、はあ」

男のリズムに合わせて、つらそうに声が漏れる。

「どうしました？ 大丈夫？ もっとゆっくりがいいですか」

ささやくように問いかけると、

「いいえ、こ、このまま、つ、続けて」

けなげに、男の動きに身体を寄り添わせながら、明らかに耐えようとしている。

「ああ、あ、あ、あああ」

のどをふり絞り、オオカミの遠吠えのように狂おしくあえいでしまふのだった。

そこからしばらくは、リズムカルだが、単調な動きが続いた。遠くで、大学授業塔のチャイムが鳴った。

それがきつかけになったのか、青木は、猛然と、激しいピストン運動に入った。

「く、く、く、く」

時間を意識し、そろそろ仕上げようと、クライマックスを迎える準備の動きを続けていた。

「ううっ、ど、どうだ」

「う、うん。ああ、はあ」

呼応するように、紗里も狂おしく悶えはじめた。

「あ、ああ。あ、ああ」

うめきが泣き声に代わって、

「あ、ああ、いいっ、い、いく。いっちゃう」

何回か、狂おしくうめき、すすり泣くような声に代わって、ギリギリのところで耐えていたようだったが、

「あああっ、も、もう」

全身が小刻みな痙攣を始めた。

「ああっ、ダ、ダメエ」

断末魔の声を発して、大きくのけ反った。

そこから、一瞬で、水を打ったような静寂。

すべてが終わったあとも、若いふたりは抱き合ったまま動こうとはしなかった。

それぞれが、それぞれの余韻を味わい、噛み締めているのだ。

「お疲れ様だったな」

龍門が、麦茶のコップを二個、サイドテーブルに置いてやった。

それを見た青木が、名残惜しように腰を引くと、紗里の花唇から白濁した粘液が、ぷくつと、わずかに覗いた。

青木は、そこに指を差し込み、クイッ、クイッと掻き出すようにした。

その指を、これでもう他人ではなくなったとでも言いたげに、まるで恋人同士のように、わざと紗里の目の前に伸ばし見せつけようとすると、

「イヤだ。悪趣味」

首をすくめて、恥ずかしそうに笑った。

数日後、警察から鈴森小百合のもとに、「ドール」を盗んだ犯人が逮捕されたとの連絡が入った。

だが、逮捕された男の認否については、今後の捜査に支障があるとして公表されていない。ということは、男は犯行を否認している可能性が高いということだ。

作品についても、すでに転売されていて、痕跡を追求したが、捜

査の糸は途中で途絶えてしまったという。

「犯人が捕まったって、それがどうしたというのよ。わたしに喜べなくてもいいの？　でも、出てこないものは、いくら待っても仕方ないわ。『ドールⅡ』を描けばいいんでしょ。紗里ちゃん、またモデル、お願いね」

小百合は意外にもさばさばしていた。

盗まれたといっても、絵がこの世から消滅したわけではない。誰かの手元で、ひそかに愛でられているのなら、それもまた良しと割り切ったようだ。

考えてみれば、売れても盗まれても、手元からは離れていく。画家にとって違うのは、売価が手元に残るかどうかだけ。いつてしまえば、些細なことのようにも思えた。鈴森小百合にとって、作品の価格は評価でありプライドでもあるが、だからといって、現ナマというものには、さほどの執着はないのだ。

絵のモデルは、アトリエで、昼間の自然光の中で務めることが多いため、土日や祭日の仕事になることが多かった。

アトリエにこもってポーズをとっていれば、龍門から呼び出されることもない。

「今日は徹夜覚悟で、とことん付き合ってもらおうぞ」

金曜日の夕方、大学図書館にいた紗里は、久しぶりに龍門から研究室に呼び出された。

いつものように、下着をカップレスブラと紐パンに着がえていると、

「それが終わったら、上にこれを羽織るんだ。ぐずぐずするな、すぐに掛けるぞ」

渡されたのは、龍門のハーフコートだった。

「はい」

紗里が肩に羽織ると、やっと膝小僧が半分ほど隠れる長さになった。

自分に代わって夫の性処理を頼みたいが、夫が紗里に夢中になり暴走しても困るから、友人や来客相手にも抱かれて欲しいというのが小百合の意図だったが、現実の龍門との関係は、契約の趣旨からどんな逸脱しているように思えていた。

彼はサディスティックな趣味に覚醒し、深みにはまっていつてしまっている。

違和感を抱き、控えめに抵抗しようとしたこともあるが、ご主人様に逆らうのかと、一蹴されてしまった。

大学を卒業するまでは、彼ら夫婦との雇用関係を壊すわけにはいかないのだ。

「ここだ。入ろう」

雑然とした路地裏の一隅に、会員制とだけ書かれた小さなドアがあった。

肩で押して入る龍門の後に、紗里も続いた。

カウンターだけの小さなバーだった。

一番奥のスペースに、「ウサギ小屋」と書かれたネオンサインが放置されているのが目に入った。

「まだ修理してないのか」

「いらっしゃい。マーちゃんが来てくれないから、お店が潰れそうなの。看板の修理なんかにお金をかけてもらえないのよ」

ママ真利亜のブラックジョークが炸裂した。

龍門のファーストネームが正和だから、この店ではマーちゃんなのだろう。

真利亜は、日本とブラジルのハーフ。グラマラスなボディラインがくっきりと体感できるタイトでボディコンシヤスなドレス姿だ。

「ウイスキーでいいわよね」

一方的に飲み物を決めつけて、ロックにしたウイスキーグラスを無造作に二個並べた。

「コート、脱いだら？」

ママに指摘され、ドキッとした。

隣の龍門をうかがうと、顎をしゃくって、壁のハンガーにかけるという仕草だ。

従うほかはない。

おずおずと立ち上がって脱ぎ、ハンガーにかけると席に戻った。

その様子を見て、

「表のドアはロックした方がよさそうね」

ママが気を利かす。

「ああ、悪いな」

紗里は、カップレスブラの胸を腕で隠し、紐パンのお尻で椅子に座り直した。

「スパークボーイを見せてくれ」

「あら、まいど。この子に使うの？」

「そうだ。新型が出ていると聞いたぞ」

「新型が前のものより優れていると決まったわけじゃないけどね。オールドタイプが好きだというお客様だつて多いのよ」

「御託はいいから、さっさと新型を出してくれ」

「ほんとんと、せわしく指でカウンターを叩く。」

「わかったわよ、相変わらずせっかちね」

ママが、すぐ後ろの壁の「スタッフ」と書かれたドアの奥に消えると、ほどなくして、スーパーマーケットの買い物かごのようなも

のに山盛りにした商品を抱えて出てきた。

「あのドアの向こうは、アダルトショップになっているんだ。さらに奥には、個室もある」

龍門が紗里に説明した。

「新型スパークボイは、この数種類」

それは、卵型のバイブレーターだった。

「このお嬢様なら、大きさはこのノーマルサイズがお勧めよ。そうになると、模様は三種類。この中から好きな柄を選んで」

いずれも、可愛いマール模様の色違いだ。

「紗里、おまえが選びなさい」

龍門にいわれ、濃紺のものに指を伸ばした。

「そうか、ママ、これにするそうだ」

紗里から取り上げると、パッケージを乱暴に破って、小ぶりの鶏卵ほどの器具を取り出した。

それを指でつまんで、冷えたウイスキーグラスにちゃぽちゃぽと漬けた。

紗里の手を開かせ、その上にポンと置く。

「どうするか、わかるな。自分で入れるんだ」

耳元でささやくように命令して、ニヤリと笑った。

従うしかないことは理解している。

せつなげにマール模様の卵を握り締めたとき、

「ちよっと待って。ゴムを使った方がいいわ。あいにくこのスパークボイは日本製じゃないから、表面の塗料にも色々と問題が指摘されているの。乳首とか太もとか、肌の表面に触れるくらいなら神経質になる必要もないけど、デリケートな部分に入れて使用する場合には、用心するに越したことはないのよ」

襟元から、コンドームを一個取り出して、そっとカウンターに置いた。

「これに入れてから、そのまま奥まで挿入したらいいわ。ゴムの口を外に出しておいて、用が終わったらそこをつかんで引っ張れば簡単に取り出せるし」

「なるほど。さすが、餅は餅屋だな」

龍門もうなづく。

「いわれるままにスパークボイをコンドームに入れると、腰を浮かして紐パンをずらし、スルツと中に押し込んだ。」

「このカードが操作盤よ」

卵と同じ色のカードを、龍門に渡す。

「こいつの仕様は、基本的に従来型も新型も同じなんだろうな」
さっそく、撫でるように指を滑らせている。
ピッ、ビビッ。

小さな電子音が鳴って、

「あ、あっ」

紗里が腰を浮かし、小さくうめいた。

大きく肩を上下させながら、歯を食いしばり、必死に耐えようとしている。

「こっちに来い」

そんな紗里を抱き寄せ、膝の上に乗せた。

「ううっ、む、むぐ」

唇を吸い、乳房を揉んだ。

紗里も役割を自覚し、白い腕を、男の背中に絡みつかせていく。

長いベーズが終わると、

「ママ、奥の部屋を使わせてもらうぞ」

強引に、罪人を引き立てるように紗里の手を引き、スタッフと書かれたドアを抜け、さらにその奥の小部屋に連れていったのであった。

小さなベッドが置かれていて、誰が使ったのか、シーツが乱れたままになっている。

枕のそばに、ローターや電動バイブも散乱していた。

無意識に緊張して、わずかに後ずさった。

「怖いのか」

鼻で笑われたような気がして、

「いえ。へ、平気です」

反射的に強がってしまう。

「この部屋には、アブノーマルなセックスを堪能するための様々なツールが用意してある。鞭や、浣腸用の薬液だって常備されているんだ。どうだ、興奮するだろう。残念ながら、鞭はともかく、浣腸は俺の趣味ではないがな」

浣腸と聞いて身がすくんだ。

彼の趣味ではないというのが、命令で抱かれることになる相手までそうだという保証はないのだ。

「ど、どうぞ、ご主人様のお気に召すままに」

すなおに応じて、自分は性奴隷なんだと、わが身にいい聞かせベツドに身体を横たえたのであった。

奇妙な小部屋で、淫蕩で濃密な肉の交わりが、延々と続いた。

すべてが終わると、龍門は紗里を残して帰っていった。

「あなた、紗里ちゃんというのね。がんばってたわね」

事故があると困るから、カウンセラー裏のモニターでチェックさせてもらってたのだと明かした。

「少し飲んだら？ 慰めにもならないけど」

真利亜が優しく声をかけてきた。

「ありがとうございます。いただきます」

グラスに手をかけ、半分ほどを一気にのどに流し込んだ。

「ううっ」

直後に、苦しそうに乳房を手で押さえた。

乳房の周辺が、赤紫色に変色している。

「あ、催淫クリームを塗られたのね」

一目で見破った。

「いつも使われているの？」

「いえ、今日、初めて」

「そうなの。驚いたでしょう？」

「あ、はい。ちよっと」

「感じた？」

こっくりとうなずき、ポツと頬を赤らめた。

「それにしても、あなた、本当に変わってるわね」

「そうでしょうか」

「だって、実家からの仕送りもなしで医学部を卒業しようなんて、

普通じゃあり得ないものね」

「どうしてそんなことまで」

「変わった女の子がいる。生真面目で、変に頑固な。あそこまで徹

底したら変人だよと、以前からマーちゃんが面白がっていたのよ」

自分では気づかなかったが、どうやら医学部では、貧しいという

意味で有名人だったようだと思い知った。

話題に上っていたから、会う前から、ママも紗里には興味を持っ

ていたのだと打ち明けた。

「でも、あなた、どうして苦学してまで大学医学部に？」

よかったら話してくれないかと、水を向けた。

「でも」

紗里は沈黙した。

「あなたの人生に土足で立ち入るようだけど、わたしね、あなたに

わたしと同じ匂いを感じるの」

「どういうことですか」

「わたし、実家を飛び出した過去があるのよ。たまたま、このお店

を経営していた前のオーナーに拾われたの。わたしの場合は医者にな

りたいなんて、そんな大それた目的も何もなかったけど、ただ、

家にいるのがたまらなくイヤで」

路頭に迷っていたところを拾われ、オーナーのもとで働いていた

ら、結果的に店を譲り受けることになったのだといった。

「奥のアドルトショップや隠し部屋まで見たわけだから、オーナー

がどういう趣味の人だったかわかるでしょう。違法な薬だって扱っ

てたわ。そんな男に拾われ、仕込まれたの」

ふーっと何度目か、長い吐息を吐いて、
「なぜこのお店、ウサギ小屋というと思う？」
意味ありげに問いかけた。

「プレイボーイ誌のマスコットがウサギということと関係があるんですか」

「やっぱ、あんた、頭がいいわ」

感心したように、両ひじを脇につけて広げ降参のポーズをした。

「動物には発情期というものがあるけど、ウサギって、一年中が発情なの。わたし、この店のウサギ。つまり、奥のベッドの担当だったのよ」

彼女もまた、凄絶な少女時代を送っていたのだった。

「どうして、家を？」

紗里が問うと、

「わたしが、バカだったの。まだ子供だったのよね」

実母が病で亡くなり、父親は、娘を育てるためにも、新しい妻を迎えた。ところが、その新しい母親との折り合いが難しかったのだという。

そこまで聞いて、紗里も、

「わたしは、そんなじゃないけど」

ポツリと口を開いた。

「わたしは普通の、幸せな家庭だった」

ゆっくりと、思い出すように語りはじめる。

「だけど、高校三年生の途中で、父親が飲酒運転の暴走車にはねられて亡くなったの。相手の若者は無免許で、車も無保険車だった。結局、自賠責基準のわずかな賠償金しかもらえず。弟も二人いたから、母親は長女のわたしには、高校を卒業したらどうしても働いて欲しかった」

グッと、目の前のグラスを握り締めて、残りを一気にのどに流し込んだ。

「絶対に医者になると決めていた私は、仕送りは要らないから大学に行かせて欲しいと、泣いて母に頼んで」

逃げるように家を出たのだと明かした。

幸い、父親には厳しく躾けられていたから、中学生時代から新聞配達のアルバイトもやり、毎年のお年玉も無駄遣いすることなく将来のために貯金していたから、それを大切に懐に入れて大学に入っただのと。

「そうなんだ。凄いな。あんた、立派だよ」

真利亜がうなずき、ため息をついた。

「そうだったのね」

再びいつて、ふーと長い息を吐いた。

ただ、真利亜は、紗里はまだすべてを打ち明けていないと感じていた。

「でも、多分、それだけじゃないのよね」

「ちらりと、紗里に視線を流して、

「そうまでして医学部に入って、医者になりたいと思った理由があるのよね」

自分でいって、自分でうなずいた。

「あなた、マーちゃんの性奴隷になることを選んだということなんだろうけど、お金を稼ぐだけなら、他にだって方法はありそうなのだよ。医学部なんだから、事情を話して誰かに借りるという方法だってあったかもしれない。わたしの目には、それだけじゃない、何か特殊な事情があつて、まるで自分を罰しているように見えてしまうの。自分を罰するために、つらくて恥ずかしい、過酷な選択肢の方をあえて選んでいるような気がする。ごめん。いたくなければ無理にとはいわないけど、全部自分で抱え込もうとしたら、あなた、いつか心が壊れちゃうわよ」

優しく語りかけて、紗里の手の上にそっと自分の手を重ねるのだった。

「ありがとうございます」

うつすらと目に涙をためて、真利亜の手の上に、さらに自分の手を重ねた。

「実は……」

「ごくんと唾液を飲み込んで、

「高校に入ったばかりのころ、わたしたちは女子高だったんだけど、すぐ近くに特別支援学校があつて、お友達とグループでお昼休みに訪問して、子供たちと一緒に遊ぶという活動をしていた時期があつたんです」

「まあ、凄いやないの。素敵な社会奉仕。優しいお姉さんたちだこと」

紗里は、それには反応しないで続ける。

「一緒に遊んでいる子の中に、ある男の子が、わたしの家の近所だとわかつて。日曜日にも、家の近くの公園で遊んであげるようになったんです」

「素敵じゃないの」

「全然素敵じゃないんです。暑い日差しの日、木陰のベンチで、ふたりだけで向かい合つて話してたら、男の子が突然立ち上がって、ズボンを下ろしたの」

真利亜が、えっ？ という顔をした。

「そうなんです。元氣よく勃起したものをわたしに見せて、ニコニコと、とつてもうれしそうに笑つてるんです」

恥ずかしくて、激しく狼狽し、どうしていいかわからず、全力で走って家に駆け込んだのだと。

「そういうことが何回か続き、わたし、混乱してしまつて」

もう会わないようにしようと思い、彼を避けるようにしていると、近所だから、ついに家まで探し当て、訪ねてくるようになってしまったのだという。

「もちろん居留守を使つて、家族に追いつてもらいました」

まだ高校生であり、どうしたらいいか、わからなかった。

その数日後、彼が電車にはねられて亡くなったというニュースが流れたのだつた。

警察は事故として処理したが、紗里は、彼は自殺したと強く確信していた。

「私が彼を殺したんです」

ずばりといつて、沈黙した。

「そんなことがあつたの」

真利亜がつらそうにうなずいた。

「突き放すんじゃないかと凄く後悔したけど、だからといって、当時のわたしにはどうしていいかわからず」

そういう男の子とどう接したらいいか、適切な知識も何もなかったのだつた。

それ以来、漠然と文系の大学に進むつもりだった進路を百八十度変更して、絶対に医者になつて、彼のような知的障害のある子供たちの力になろうと思つた。それが、自分に出来るせめてもの償いだと思つたのだつた。

「わたし、純真だつた彼を、殺した」

涙が頬を伝つていた。

「だから、罰を受けて当然。様々な男性たちから辱めを受けるくらいでは、犯した罪の深さを考えると、少しの償いにもなつていないと思つています。わたし、罰せられるのが当たり前、最低の女なんです」

必死でそこまで言葉を絞り出し、ワツとカウンターに泣き伏したのだつた。

龍門正和の死体が発見されたのは、大学の彼の研究室だつた。死因はシアン系の毒物。

ニュースによると、司法解剖の結果、胃に、龍門が普段常用していないカプセルの欠片が未消化で残つていたことが判明。そのことから、死因となつた毒物は、カプセルに入れた状態で体内に入つた可能性が高いとされた。警察は事件性を視野に入れながら、自

殺も含めて調査していると報じていた。

訃報を受け、しばらく紗里は、自分から申し出て小百合のアトリエで寝泊まりしていた。

彼女が車椅子生活になってからは、家事を担当するお手伝いさんもいるのだが、モデルの仕事もあるからと、強引に押しかけていたのだ。小百合のことが心配で、放っておけなかった。しばらくは目が離せないと思ったからであつた。

小百合は、目に見えて憔悴していた。

事実婚状態だったとはいえ、愛する夫を急に失つたのだ。

「先生、珈琲が入りましたよ」

紗里は、務めて明るくふるまった。

「ありがとうございます。紗里ちゃんがいてくれてよかった」

「ドールⅡ」の制作も、小百合は気丈に再開していた。

「龍門が亡くなって、紗里ちゃんは彼の相手が出来なくなったわけだけど、それはあなたが原因じゃない。だから、あなたが大学を卒業するまでは、これまでもおり経済的な保証はするつもりよ。心配しないで、優秀なお医者様になってね」

小百合は心強い言葉を贈ってくれていた。

「ありがとうございます。助かります。勉強、がんばります」

それから四週間ほどは、小百合のアトリエから直接、大学に通っていた。

お手伝いさんが、紗里の存在にピリピリしているような感じも見えてきて、時間の経過とともに小百合も多少は落ち着いてきたようなので、久しぶりに自分のアパートに戻ることにした。

龍門に代わる新しい医学部長には、溝曾路一樹という野心家が抜擢されていた。

異例の出世だっただけに、早くも次期学長候補とささやく者さえ出始めた。

元々、医学部長というポジション自体が、そういうポストなのだった。

溝曾路は性格的にはくだけた人柄で、ウィットの効いたジョークを連発するというのがもっぱらの評判。酒の席を好み、酒豪としても名の通った人物であつた。

紗里は、医学部で、以前にも増して頻繁に青木の姿を見かけるようになったと感じていた。龍門のところには電車かタクシーで来ていたようだったが、業績が好調で会社での評価が上がったのか、いまは高級外車を転がしている。

紗里は、学内で青木とすれ違う際、つい、無意識に会釈してしま

いそうになった。

だが、彼とは身体の関係こそ結んだが、それは立花紗里としてで

はない。

彼とは赤の他人だと言い聞かせながら、努めて素通りするよう心がけているのだった。

そのころ、警察は任意で本郷誠一郎を呼び事情聴取したとのニュースが流れた。

「やっぱり、本郷先輩は疑われているんだ」

大饗恭介が心配そうに口を開いた。

「先輩の退学放校案件以来、鬼の龍門」という言葉が医学部に定着したんだもんなあ」

警察としても、その件については関心を少なからず持っているようであった。

「そうね。人生の青写真を一変させるような、深刻で大きな分岐点ですものね」

紗里は、誘われて恭介のアパートに来ていた。

「これが、本郷先輩の作品なんだ」

そういつて、クラシックな丸いちゃぶ台に置いたのは、小さな手作りの詩集だった。

「僕が好きなのはこれ」

彼が広げて見せたのは、『言葉』という詩だった。

(ここから)

言葉

大学医学部裏手の安アパートで

蟬の鳴き声を聞きながら抱き合っていた男女の周りには
いつのまにか

ふわふわとした幸せが立ちこめていた

あたたかな言葉を吐くと

自分が狡い気がして

寡黙でいると安らぐように感じた

だから彼らの言葉は

「明日も暑くなりそうね」とか

「お風呂の帰りに角のお寿司屋さんに寄ろうか」とか

未熟な愛撫のもたらすものが幻想だとも

底抜けの笑顔があとで

無邪気な当惑を引きずってくるとも知らずに

いや

本当は薄々感づいていたのだ
ゲームが終わって

もう誰も残っていないことを

ここにいるのは帰りそびれた二人

このまま

ずっとこの部屋にいたいなら

ふたりがまだ見たこともないものを育てねばならない

いいことを教えよう

純粹で身勝手な愛を飼い慣らすために必要なものは

恥ずかしいほどの言葉だ

鉢植えのシクラメンに水をやるように

誠実な言葉を注がねばならない

いくら思いを込めても

ただ見つめているだけでは枯れるのだ

それは新しいゲームだ

(ここまで)

「どう？」

一旦読み終わっても、さらにまた、いつまでも繰り返し黙読している紗里に、恭介がじれったそうに問いかける。

「うん」

つぶやくようにいって、作者の思いを丁寧に反芻している。

「揺れ動く気持ち、わかる気がする」

「恭介くんが本郷先輩のことを心配する気持ちも、わかるような気がする」

それは本心からの言葉だった。

紗里も詩を書くが、自分の場合、それは順境のときではない。人生の曲がり角で迷ったり、追い詰められたときにこそ、苦しみ、沼からボコボコと言葉が発酵し、泡のように浮かび上がってくるのだ。

『言葉』という詩からも、本郷先輩の、真夏の陽炎のように不確かに揺らぐ医学生の淡い恋にも似た心情が、痛いほど鮮明に伝わってきたのだった。

と、同時に、間接的に、恭介から告白されたような感覚にもなったが、あえて、そこは気付かないふりをしていた。

「わたし、医学部だから、本郷さんって先輩のこと、少し調べてみようかな」

恭介の言葉をあらためて思い起こしながら、かつて誠一郎のため

に龍門教授と掛け合ったという友人たちを探して、話を聞いてみるつもりになっていた。

「さっきの詩に出てくる、お風呂の帰りに角のお寿司屋さんに寄ろうか」というフレーズのお寿司屋さん、このアパートのすぐ近くでね。そこ、ぬく寿司がおいしいと評判なんだ」

一緒にどうかと、そつと紗里の反応をうかがっている。

これが、恭介にすれば精一杯の誘い方なのだろうと思った。

「おごってくれるの？」

「もちろんだよ」

「うれしい。ありがとう」

なんとなく、これでやっと普通の大学生になったかなと思った。性奴隷としての歪んだ生活に身を置いていた紗里にしては、久しぶりの穏やかな時間の流れだった。

その日、紗里は恭介の部屋に泊まった。

「ぬく寿司、どうだった？」

話題に窮している様子を感じながら、

「うん、おいしかったよ。温かいちらし寿司って、わたし、初めてだったわ」

笑顔で答えると、

「そうか、よかった」

恭介も、ホッとしたように白い歯を見せた。

一緒にお酒も飲んで、本郷先輩の詩集をあらためて広げたりしながら、文学談義で夜遅くまで言葉を交わしたが、彼は紗里の手を触ろうとする気配すら見せなかった。

青くさい緊張感に包まれた、初々しい、新鮮な夜ではあった。

「紗里ちゃん、恋人は作っちゃダメっていったけど、もうその必要もなくなったわ。気になる人くらいいるんでしょ」

いつものように裸婦のポーズをとっていると、探るような笑顔で小百合が話しかけてきた。

「そんな、いませんわ」

恥ずかしそうに微笑む。

「じゃ、誰かハンサムを紹介してあげようか」

「あ、いえ、それは」

あわてて話をさえぎる紗里に、

「ほら、やっぱり」

「ちがいます。そんなんじゃないです」

必死で否定した。

つい、モデルをしているのに、ポーズが崩れた。

「紗里ちゃん、あなたねえ」

「ごめんなさい。動いちゃいました」

「ううん、そうじゃないの。うまく言えないけど、あなたをモデルに描いていて思うのよ。前作のときには、暗さの中にも鉄筋のような強靱さを感じながら描いていたの。それが、いまこの作品に取り組んでいると、暗さが吹っ切れていて、竹のように柔軟なしなやかさに変化したように感じるのよ」

紗里を取り巻く環境が一変し、精神状態が変わると、内面からにじみ出るものがこうまで変化するものかと思った。

「人物画を仕事にしている絵描きでないと、気付かない変化かもしれないけど」

龍門とは、そういう会話が成り立っていたのだといって、言葉を詰まらせ、涙ぐんだ。

彼は医者であり、趣味でも絵を描いた経験などなかったが、それだけ、小百合のよき理解者であつたようだ。

「そうだったんですね」

小さくうなずいて、つい、もらい泣きするのだった。

邂逅

医師国家試験も終わり、立花紗里は迷っていた。

元々は、知的障害や発達障害を研究するために大学に残りたいと思っていた。

いまは、診療の現場に出てみたい気持ちも強くなってきた。

研究職になった場合、全く成果が得られない結果になるリスクがあるのだ。現場に出た場合は、微力でも、誰かの力になっているという実感が得られると思った。

一方で、それは逃げじゃないのかと自問する気持ちもある。

深く迷い、悶々とする日々が続いた。

そんなとき、医学部長の溝曾路が、文久製薬の青木隼人とともに贈収賄容疑で逮捕されたとのニュースがもたらされた。

先代医学部長の龍門教授がアイデアを出し、製薬会社に要求しひそかに構築したシステムを、溝曾路教授も漫然と引き継ぐ形になっていたとのことだ。

青木は、龍門教授からの高圧的な要求を断り切れなかったと抗弁しているらしい。悪いのは龍門であり、自分は立場上、泣く泣く要求に応じるしかなかったのだと。

紗里は、龍門と青木との本当の関係は、そういう従属的なものではなかったと思ったが、青木にすれば、死人に口なし。違法な要求とわかっていたが、自分が担当になって取引量が減少したと困るので、やむを得ず応じるほかなかったと、一貫して言い張っているようだ。

大饗恭介は、二年前に大学を卒業し、希望どおりに総務省に入省していた。

立花紗里とは、文芸部では、単なる部員同士といってしまふよりは深い、微妙に接近した関係だったが、卒業すると自然に交流もなくなっていた。

その大饗から、突然、紗里のもとに結婚式への招待状が舞い込んだ。

進路に迷っていることもあり、返信用はがきを放置したままだったが、ふと見ると、締め切りが近づいている。

なぜ自分にまで招待状が届いたのか解せなかったが、迷った末に、曲がりなりにも招待されているわけだし、断るのも変かなと思い直し、出席することにした。

すなおにお祝いしたいと思う気持ちがあったし、欠席で返すと、いろいろ変に勘ぐられそうな気もして、それも不愉快だった。

大きなホテルの、華やかな式場だった。

受付で参加者名簿を見せてもらったが、大学文芸部関係で呼ばれていたのは紗里だけだった。

新郎側の友人席に着いて、話し相手もなく手持ち無沙汰にしていると、同年配に見える官僚ふうの参加者の会話が、聞くともなく漏れ聞こえてくる。

どうやら花嫁は、媒酌人を務める上司の紹介で、有力政治家の三女だという。

「強力ライバルというか、これで頭一つ抜け出された感じだな」

ひそひそとささやく声からは、やっかみともとれるような侮蔑の響きさえ感じ取れるのだった。

ホテル内に式場があり、式が終わると、いよいよ披露宴会場に新郎新婦が登場する。

スタッフが、せわしなく動き回るようになった。

ひとりぼっちで時間を持て余していた紗里は、やっと少しだけ救われた気分になっていた。

早く始まって、早く終わってくれと思ってしまふ。

「みなさま、お待たせいたしました。ただいま、滞りなく式を終えました新郎新婦が、これから入場いたします。どうぞ、盛大な拍手を持ってお迎えください」

スタッフによってドアが開けられ、待ちかねた主演のふたりが拍

手の中を入場し席に着いた。

「それではただいまから！」

と、披露宴の開会が宣せられ、

「僭越ですが……」

と、媒酌人の祝辞が始まった。

新郎と新婦の両方をよく知る立場として、ふたりそれぞれの紹介を含め、ウィットの効いたあいさつが手短にまとめられていて、和やかな拍手に包まれた。

乾杯の音頭をお願いしますということ、先ほどまで、やっかみともとれる会話をしていた恭介の同僚が立ち上がった。

マイクの前に進むと、クルクルと巻いていた画用紙を広げ、
「女房運転免許証。大饗恭介殿、ここに女房運転免許証を交付いたします。今後は無事故・無違反を心がけ、安全運転に勤めてください」

受けを狙って、ここで言葉を切ったが、参列者はみんな手にグラスを持って立ち上がっているので、お義理の拍手をしようにも出来ず会場は静かなままだ。

受けを狙っていた男は当てが外れ、

「それでは皆様、時代は平成から令和へと移りましたが、どうぞ、ご昭和ください」

ダメ押しでスベツて、会場に失笑が漏れた。

「それでは、乾杯！」

「かんぱい」

「乾杯」

冷笑に包まれる中で、なんとか乾杯まで進んだ。

ケーキ入刀となり、司会者に促され、カメラを持った人々が新郎新婦の初めての共同作業に群がった。

紗里はカメラも持ってきておらず、席に着いたままだったが、ほとんどの人たちは主役のまわりに集まっていたから、席に残っていると目立つことになり、気まずい思いをしていた。

思い思いに写真を撮り終えると、やっとみんなが席に戻り、会食が始まり歓談になった。

緊張がほぐれ、フロアのあちこちでざわつきはじめる。

フロア全体がくだけた雰囲気になってきたところで、新郎新婦が、それぞれの招待客をまわり始めた。

恭介も、ビールと日本酒の徳利とを持ってまわっている。

ほどなく紗里の席まで来て、

「今日はありがとう」

「どういたしまして。綺麗なお嫁さんで、よかったわね」

「うん。上司が勧めてくれて」

仕事の都合で、休みはこの披露宴まで。翌日からさっそく仕事で、ハネムーンの予定はないのだという。

「立花もここで卒業だよな。君のことだから、国家試験の方は大丈夫なんだろうけど」

「うん。発表はまだだけど、出来たから。しっかり書けたから、大丈夫だと思ってる。いまは、そこから先のことで少し悩んでいるんだけど」

知的障害の分野に貢献したいと思っていること。その場合、研究職になって原因の究明や治療法・症状改善の研究の道に進むか、現場に出て直接患者と触れ合う診療の道に進むかで、迷っているのだと打ち明けた。

「立花は学生時代から、科学者らしく、異なる知見を貪欲に収集し、冷静に分析できる人だと思って一目置いていたんだ。僕なんか打ち明けてくれて、うれしいよ」

言葉の端々に、考えに迷いのない感じがある。

「そうなんだ。でも、そんなことはいいいからさ。恭介くんの意見を聞かせて」

自分のところで、長く引き留めておくのもまずいという思いがあった。

「ああ、ごめん。患者を抜本的に救うとなると、まちがいなくそれは、研究者としての仕事だ、ど真ん中になるよね。うまくいけば、ノーベル賞級の成果にだって繋がる。だけど、君が迷ってるように、簡単じゃないだろう。嫌なことをいうようだけど、一生かけて没頭しても、空振りに終わる可能性だってある」

大饗は宝くじになぞらえて、

「国は、いまでこそ宝くじの宣伝を大々的にやっているけど、売り上げの配分にあずかっている自治体の中には、宝くじを宣伝した実績を報告するように国から求められて、消極的だったところも多かったんだ。そもそも宝くじというものについては、以前は、庶民のなけなしの金を巻き上げるものという意識があったからか、誰も見ていない深夜の時間帯に人知れずひそかにテレビやラジオのコマーシャルを打っていたんだよ」

買わないと当たらないという言葉には、買ったら当たる、という錯覚を誘導する魔力があると、そういう後ろめたさがあったんじゃないかなといった。

独特の婉曲的な言い回しだったが、

「ありがとう。もし宝くじを買うときは、どうせ当たらないだろうけどと、外れる前提で、国や地方自治体に寄付するつもりで買うことにするわ。あなたに相談してみてもよかった。参考にさせてもらわ」

懐かしそうな視線を返して、

「あ、それと、本郷先輩のことだけど、龍門教授は、レポート提出や追試を頭ごなしに拒否したわけじゃなかったのよ。話は分かったとしたうえで、だが、なぜ本人が来ないんだ、直接本人が来なさいと、そういつてくれたんだって。でもね、肝心の本郷先輩が、そういうのを潔しとしない人だったの」

つまり本郷誠一郎は、自分から潔く大学を去る道を選んだのだ。龍門は、鬼ではなかったのだ。

だから、本郷に、龍門教授に対する恨みなど、あるはずがなかった、と思うと報告した。

「そうだったのか。本郷先輩らしいといえば、らしい話だな」

恭介は、何度もうなずきながら、

「じゃ、ゆつくりしていつてくれよ」

つい話し込んでしまったと気付いて、そそくさと、次の席へとまわっていった。

結局、立花紗里は、希望して地方都市の総合病院に就職した。

一生かけて研究しても、成果が得られるかどうか確約のない研究職も、将来的には、いつかは覗いてみたい世界ではあったが、宝くじのような夢を追うのは後にして、まずは実戦的に、現場に出て汗を流してみることにしたのであった。

知的障害の専門医として、月曜日と火曜日は精神神経科に、水曜日と木曜日は小児科に出て子供の知的障害を診ていた。

金曜日は、少し離れた温泉地の診療所に看護師とともに訪れ、ここでは内科も診るし場合によっては往診もする。

診療所のある地域は、辺境の温泉場のため、温泉を中心としたささやかな観光業以外には、これといって産業がない。

この日も、再診患者を診終わったところで、電話が鳴った。

「先生、柳葉さんのところの秋子ちゃんが、また暴れているんですって」

看護師の小森郁子が、往診カバンを抱えて診察室に飛び込んできた。

「わかった。すぐに出かけましょう」

柳葉秋子というのは、発達障害のある少女だった。

事情があつて、叔母の柳葉静江のもとで暮らしている。

静江は、生きるために温泉地のストリップ劇場に出演している女だった。

いま、姪の秋子も、将来は舞台に立たせようと踊りを教えているのだという。

「わたしの目が黒いうちはいいけど、いつまでもは一緒にいてやれん。なんとか、秋子がひとりで生きていけるように、段取りだけはいまのうちに整えておいてやらねばと思ってるのさ」

不憫な姪を抱えて、静江なりの苦渋の決断だった。

「失礼します。お邪魔しますよ」

古民家で、入り口には特にカギもかかっていない。勝手に入っていくと、奥で少女が静かに横たわっていた。

「ご足労をおかけしました。おかげさまで、何とか落ち着いてくれましたです」

暴れ出した前後の状況を聞いて、そういう場合の対応についてのアドバイスをした。

「薬を出すほどじゃないと思うので、いま説明したようなことに気を付けながら、これから様子を見てみましょう」

静江はこれからステージだという。
叔母に同行し楽屋で終わるまで待っているという秋子のことが心配で、もう少し観察する必要があるからと、紗里も一緒に行くことにした。

「今日はダンスの先生が来て、レッスンを受ける日なんですけど」

紗里の顔をうかがうように、小さな声でいった。

「ご自分で教えてらつしやるのかと思っていきましたわ」

「わたしの踊りなんて、もう時代遅れの骨董品ですから。若い子には向かないんです。最近はずっとアップテンポで、キレッキレのダンスじゃないと」

いわれてみれば、もつともな話だった。

昔懐かしい歌謡曲を流して、それに合わせて日本舞踊のように舞ってみせる時代ではなくなってるのだろう。

「今日はお休みした方がいいかもしれませんね。いつもやってる程度のレッスンだったら、多分大丈夫でしょうけど、でも、念のため」
「そうですか」

劇場について楽屋に入ると、紗里に衝撃が走った。

楽屋に、見た顔があるのだ。

数人のストリッパーが並んだ奥に座っていたのは、鈴森邸で紗里にフェラチオをレクチャーした、あの調教師の男だった。

「あら、先生、猿渡さんをご存じ？」

静江に問われ、

「い、いえっ。知らないわ」

激しく狼狽した。

落ち着け、と自分にいい聞かせる。

確かあの時は、鼻から上をリボンで隠していた。
顔を見られたわけではない。

大丈夫だ、気付かれるはずはない。
そう思った。

「猿渡さんは、わたしが若いころにお世話になった人なの。悪い男に騙されて、東京でいかかわしい仕事をさせられていたとき、危険を冒してまで、監獄のような世界から助け出してくださった」

そのときの縁で、秋子にも、ストリッパーになるべくダンスをコーチしてもらってるのだという。

自分は、いつまで秋子のそばにいてやれるかわからない。彼女が自立し、ひとりで生きていけるようにと猿渡に懇願し、ダンスを教えてもらっているのだといった。

「さあ、秋子、猿渡先生が待ってくださいってわよ」

静江に背中を押され、

「せんせー」

とことこと走り寄った。

「おう、元気がいいな。さあ、今日もがんばって練習するぞ」

そういわれ、秋子が叔母を振り返った。

「ごめんなさい、それがね、先生」

今日は秋子が体調を乱し、昼間、大変だったことを告げ、

「もうほとんど回復し、よくなったんだけど、今日のところはお休みして、もう少し様子を見ようかと、こちらのお医者様にいわれるのよ」

「初めまして。立花と申します」

さりげなく頭を下げた。

「あ、これはどうも。猿渡です」

お互いに型どおりのあいさつを交わした。

すると静江は、さっさと、

「じゃ、わたしはステージの準備がありますから」

これで失礼しますと、奥の部屋に引っ込んでいった。

秋子は、どこから持ち出したのか、作りかけの竹細工を前に、颯爽たる手さばきで作業を始めた。

「わあ、秋子ちゃん、凄いわね」

紗里が驚くと、

「うん、こういうの、大好き」

うれしそうに微笑んだ。

その様子を、魅入られたように見つめていると、

「なあ、あんたも惜しいと思うだろう？」

猿渡が話しかけてきた。

「腐れ縁の女から連絡があり、姪っ子のために、ストリップで使える現代風なダンスを教えてやって欲しいと頼まれたんだが」

男は気が乗らないふうで、

「リズム感も悪くないし、ダンスのセンスも抜群で、叔母に似て生まれつきのセンスもある」

そういつて、ふうーっと長い息を吐いた。

「静江からは、いま流行りのアイドルたちが踊っているようなダンスをと頼まれているんだが、当面はそれでよくても、一生の仕事となると必ず通用しなくなるときが来る。だから、一方で、本格的なフラメンコも並行して教えてやっているんだ。フラメンコをアレンジしたダンスなら、歳がいつてからでも使えるからな」

男の話を聞きながら、紗里は不思議な気持ちになっていた。

この男は、女性を調教し性奴隷として躡けるのが本職だといっていたはずだった。本職は依頼案件が少ないから、ソープの新人教育が職業のようになっているとも。

いまはこうしてストリッパー予備軍ともいえる少女にダンスを教えながら、まるでプロデューサーのように、将来のことまで心配してやっている。

「おっしゃることは、よくわかりますわ」

紗里がうなずくと、

「だが、それでいいのか、という思いもある」

自問自答するようにつぶやくと、ゆらりと立ち上がった。

静江が消えた部屋の横にある棚まで進み、そこから、何点か完成した竹細工を持ち出して来て、ずらりと並べてみせた。

竹籠や大ぶりの竹ざる、カマキリの人形もある。

いずれも、民芸品としても充分に完成度が高いと思われた。

「誰が教えたというのでもない。自分のセンス、見よう見まねで作ったらしい」

「これ、全部、秋子ちゃんか？」

大人たちが驚いている様子を見て、秋子は、自慢げにこっくりとうなずいた。

「こんなもんじゃない。奥の小部屋には、もつと凄いものがある」

あごをしゃくって、覗いてみると促した。

その部屋まで行くと、片隅に、画用紙が山積みされていた。

「そうか、水彩画ね」

手に取って、一枚、一枚見てみると、猿渡の言葉が重く胸に突き刺さった。

描かれていたのは、すぐそばの溪流沿いに住む様々な生き物たちだった。

溪流では、水底のオオサンショウウオに、岩の上に鎮座するカジカガエル。草むらでは、キリギリスやカマキリなどの昆虫。木の枝には鳥たちも。

それらは、いずれも独自の視点で生き生きと、ダイナミックに表

現されていた。誰にも似ていない独自の画風だ。

予想外の出来栄えに、言葉を失って立ち尽くしていた。

「ストリップパーでも当然立派にやっていけるだろうが、人気があつてチャホヤされるのは若いうちだけだ。確かにこの子はダンスのセンスがあるし、華もある。だが華はいつか散る。あんた、どう思う？」

紗里の気持ちを見透かしたように、凄味のある表情のまま、静かに問いかけた。

「この子は、いろんな才能を持っている。出来ることなら、ダンス以外の道で生活させてやりたいと思わないか」

重ねて問われ、

「この絵、素晴らしい出来栄えだと思いますけど、でもわたし、専門家じゃないですから」

とっさに、そう答えた。

心の片隅には、たとえば鈴森小百合に見いだされた形で展覧会でもプロデュースしてもらったら、一気に売り出せるような気もしていた。

「俺も専門家じゃないが、きっかけさえあれば大化けする可能性はあるよな」

紗里にそう言い残して、

「それじゃ、秋子ちゃん、また来週来るからな」

「先生、ありがとう」

可愛い声に送られながら、さっそうとヌード小屋を後にしていったのだった。

「小森さん、遅くまで突き合わせてごめんなさいね」

「大丈夫です、先生。それより、さっきの男性ですけど、先生のことを知ってるような話しぶりでしたね」

「えっ」

ドキッとした。

「どうして？ 今日、初めて会った人だけど」

「わたしも、そのはずとは思ってたのですが、あの男性の話しぶりが、なんだか、途中から急に親し気に、トーンが変わっていったような気がしたんです」

古い知り合いに相談しているような感じになっていった印象だったという。

「そう？ 元々がそういうくだけた話し方の人で、途中から地が出た感じになったのかもね」

あくまで初対面だと言い張ったが、大きな不安が胸を包んだ。

「目つきが鋭いし、わたし、怖い人じゃないかなと内心ビクビクしてたんですけど、話を聞いてたら、全然違って、秋子ちゃんのこと、

親身になって心配し、考えてくれてましたよね」

「それは、わたしも感じたわ。人は見かけで判断しちゃうダメという、お手本のような人だったわね」

そう応じた後で、秋子本人の気持ちはどうなんだろうと思った。

「ねえ、秋子ちゃんは、本当はどうなの。ダンスと、工作や絵と、どっちが好き？」

急にそう問われて、

「うーん」

しばらく考えていたが、

「どっちも好き。全部」

そう答えて、屈託なく笑った。

「職業に貴賤はないわけで、別にストリップがダメと思っちゃいけないんでしょうけど、猿渡さんもおっしゃってたけど、ダンサーって、若いうちが華。ダンスが好きなのもわかるけど、秋子ちゃんに、もし絵で生活できるだけの才能があるなら、そうさせてあげられたら最高、なによりですよね」

「そうね」

看護師の熱弁に、淡々と応じた。

その翌日は、病院が休みの土曜日。立花紗里の姿は、鈴森小百合のアトリエにあった。

「よく来てくれたわね、会えてうれしいわ」

「先生、お元気そうで」

「元気なんかないわよ。紗里ちゃんがわたしを置いてドクターになつて。しかも遠くの田舎都市にいつちやつたんだもの」

「ごめんなさい。大学に残ることも考えて、最後の最後まで迷ったんですけど」

困った顔で言い訳をすると、

「うそ。冗談よ。それで今日はなに？ 何か大事な用事、目的があったから来たのでしょ」

すべてお見通しだった。

「そうなんです、実は……」

持参した丸まった画用紙五枚を、小百合の前に広げて見せた。

預かってきた柳葉秋子の作品だ。

「発達障害の子の絵なんです」

叔母が母親代わりになって育てていること。叔母は温泉地でストリップをしていて、この子も、ダンサーのレッスンを受けていることなどを説明した。

「放っておいたら、彼女も叔母のもとで、生きるためにヌードダンサーになります」

ダンサーとしてもセンスがあるようだが、天涯孤独となったとき

のことを考えると、高齢になったときに心配だといった。

「絵で生活出来ないか、見ていただきたいと思って」

長々と紗里が説明しているとき、小百合は、終始無言で、じっと水彩画に見入っていた。

「作品、もつとあるんでしょ」

「あ、はい」

「それ、出来たら全部送って。絵はね、売れるかどうかなの。その時代のマーケットが、リアルタイムで受け入れるかどうか。五十年後、百年後に世界的な評価を受けるというケースだってあるけど、たちまち間に合わないでしょ」

たまたま近年、秋子と同じような発達障害の子供の、緻密で独特の感性の作品が世界的に注目されるようになっていく傾向があるという。

「可能性があるかどうか、欧米でも仕事をしている信頼できる画商に見せて、相談してみてあげるわ」

小百合の中には、どうやら具体的なイメージ戦略が出来ているようだ。

「ありがとうございます」

涙をにじませて、深々と頭を下げると、

「泣くのはまだ早いわ。結果はどうなるか、全くの未知数。気安く保証は出来ないんだから」

その子が、運を持っているかどうか。すべてはそこにかかっていることだと、冷ややかに微笑んだ。

「今日は土曜日だし、泊っていきなさい。久しぶりに話し相手になつてよ」

車椅子をギシギシ鳴らしながら、うれしそうな顔をした。

「あのね、うちのお手伝いさん、紗里ちゃんが知ってる人とは代わって、また違う人なの」

いたずらっ子のようにいつて、首をすくめた。

「ドル」を盗んだとして逮捕されていた男は、なんと、当時のお手伝いさんの夫だったというのだ。

「まあ、そうだったんですか」

「話せば長くなっちゃうんだけど」

盗んだ犯人と目され逮捕されていた男は、当初から一貫して犯行を否定していた。検察に身柄を送検された後、最終的には嫌疑不十分で不起訴になっていた。

「捜査の段階で、警察の中には、盗難はわたしの自作自演じゃないかと疑う声まであったというのよ。失礼しちゃうわよね」

それほど、闇が深い事件だったようだ。

「最終的に不起訴になったんだけど、でも、何となくバツが悪いと

「うか、どうしたって、気まづくなるじゃないの」

「誰が悪いとか、お手伝いさんのどこが気に入らないということはないんだけど、お互いにね、どうしても気持ちがぎくしゃくするようになってちやつたのよね」

「わかりますわ」

「だって、嫌疑不十分なのよ。間違っていました、無罪でした。ごめんなさい、じゃないんだもの」

胸の内を率直にさらけ出され、

「そうですよねえ」

紗里としても、複雑な気持ちのままうなずいた。

その夜は、ふたりでワインを飲みながら昔話に花を咲かせたが、紗里にとっては恥ずかしい裏歴史の意味もあり、もっぱら、小百合の思い出話に耳を傾けることになった。

「先生、面倒な話を持ち込んで申しわけありません」
頭を下げようとする紗里を制して、

「お安い御用とはいわないわ。引き受けたけど、結果がどうなるかの保証はないからね。わかるでしょ」

申し訳ないがと、同じ言葉を繰り返す。

「もちろんです。よろしくお願いします」

「うん。じゃ、作品が届くのを楽しみに待ってるわ」

明るく笑って、快く、希望を受け止めてくれたのだった。

とりあえず道が開けたことで、ホッとして、勤務する病院に戻っていた。

柳葉静江に、確約は出来ないものの、秋子のために努力していることを話した。

「そんなことが叶うなら、それに越したことはないです。わたしだって、本心をいえば、秋子をストリップパーにしたいと思ってるわけじゃないですから。だって、あんな子だから、仕方なく」

最後は鼻声になって、まぶたを抑えた。

紗里は、責任を持って努力するからと秋子の作品を預かり、小百合宛に送ったのであった。

そこからは、待つことが仕事になった。

基本的には、午前中が外来で、午後が入院患者対応の日常が戻ってきた。

「秋子ちゃんのこと、うまくいくといいですね」

相棒の看護師、小森郁子が興奮していた。

「やめてよ。そんな、簡単な話じゃないんだから」

不安な気持ちから、つい、そんな返事になってしまう。

「あ、ごめん。そうね」

鈴森小百合という画家に、窓口になってもらってるんだと打ち明

けると、

「わたし、いっだったか、その名前をネットのニュースで見かけたような気がします」

ぼつりと、いった。

「でも、まあ、記憶が確かじゃないから、もしかしたら違っているかも」

あわてて保留して、

「自信はないんですけど。ネットニュースのログを調べて、もしわかったら、またお知らせしますね」

「そう？　ありがとうございます」

特に期待するでもなく、気にとめることもなく、会話は終わっていた。

その数日後、郁子が自前のタブレットを示して、

「写真はないんですけど、ほらここに、パリで『ドール』に似た絵画がオークションに掛けられたと」

出品者も落札者も伏せられているが、日本の画家、鈴森小百合の作品として取引されたと報じている。

「でも、ネットを探して見たんですけど、これに関する情報はほかには見当たらず」

閲覧数が少なければ、出しつぱなしになつて消えていく。

「そうなんだ。でも、ありがとう」

個展でお披露目された直後に盗難にあっただけに、作品のことを知っている人は限られているはず。この話題が、その後バズることなく人々の関心からこぼれ落ちていったとしても、それは仕方ないことと思つた。

真偽のほどが気になったが、フェイクニュースも多いネット情報なので、それ以上詮索しようとも思わなかったのだ。

「それより小森さん、恒例の花火大会があるらしいけど、賑わうんでしょうね」

「はい。打ち上げる花火の数もそんなに多くないし、都会のような豪華絢爛な凄まじい連発花火もないんですけど、地域みんなが楽しみにしているんですよ。地元の商工会が中心になって、温泉旅館や土産物屋さんをまわって寄付をお願いし、花火師さんと呼ぶ資金を集めるんです。真夏の大イベントですね」

近隣の町や村からも大勢の人が訪れるという。

「でも、どうして花火大会のことを？」

「実はね、さっき院長先生から呼ばれて、頼まれたばかりなの。本部席で待機しておいてくれて」

看護師さんとセットでの依頼だった。

「なにも仕事がなかったら、特等席らしいわ。予定があったら無理

にとはいわないけど、もしよかったら、あなた地元だし」

「ごめんなさい。夏祭りの日は家族と一緒に過ごしたいんです」
申し訳なさそうにいった。

「あ、全然。いいのよ、こっちこそごめんなさいね。頼みやすいから、つい甘えちゃったわ」

誰か若い、単身赴任の新人に頼もうと思い直した。

ドドドドドーン。

ドドーン。

夕方になると、景気づけの信号用煙火が上がった。

温泉の源泉がある溪流の土手沿いに、お祭り屋台も並んでいた。

花火の打ち上げ開始までには、まだ一時間以上あった。

「ふーん、何だか懐かしい気もするわね」

土手の店を眺めながら、ぶらぶら歩いた。

「立花せんせい」

頼んでいた若手看護師が紗里の姿を見つけて声をかけてきた。

「わたし、本部席に座っていてもいいですかあ。ああいう、堅苦しい場所は苦手なんです。もし何かあったら、すぐわかるように近くには待機していますから」

そういわれると、無理を頼んだ手前、

「オーケーよ。いままでは、毎年、何もなかったそうだし」

もしなにかあったら、そのときはよろしく頼むわよということにした。

「医師の立花です。よろしく願います」

本部席であいさつすると、

「やあ、これは。お世話になります」

商工会の責任者が、チョコンと頭を下げた。

「じゃ、先生はそちらの来賓席で、どうぞよろしく」

「はい、わかりました」

パイプ椅子の前に長机があり、氷の浮いた麦茶の入った大きなヤカンが置かれていた。

手持ち無沙汰で、何となく待っていると、

「遅くなりました。県の大饗です」

耳を疑うような声でした。

まさか、と思ってそつとうかがうと、まちがいない。

「やあ、よろしくお願いします」

商工会関係者が、そろってぺこぺこしている。

話を聞いていると、少しずつ事情が分かってきた。

花火を打ち上げる際には、事前には、都道府県の火薬類の使用を取り締まる担当課に『火薬類消費許可申請書』を提出し、事前に許可を受けておく必要があるのだ。

大饗も紗里の存在に気付いたようで、来賓席の、すぐ隣に腰をおろした。

「どうしてここに？」

小声で尋ねると、いまは総務省ではなく、県職員なんだという。

「僕は、火薬類消費を取り締まる課の、担当主事なんだ。ほら、向こうの河原で打ち上げ用の筒をチェックしているおじさんが、一緒に来た担当係長。僕は彼のカバン持ちさ」

「え、天下りなの？」

「違うよ。主事って、平社員。若いうちに地方行政の現場を見て勉強しておきなさいと、受け入れ希望がある県に、国から派遣される仕組みが出来ているんだ」

二年前後いたら、また総務省に戻るのだという。

「奥様と一緒にいたら、引越しも大変でしょうに」

「いや、僕だけなんだ。単身赴任している」

「そうなんだ」

そういうものなのかなとも思ったが、なんだか、聞いてはいけないことを聞いてしまったようで、気まずい思いがした。

「そうそう、わたしもぎりぎりまで迷っていたけど、大饗くんの宝くじの話で目が覚め、病院現場で働くことに決めただけけど、いまは生きがいを感じているの。披露宴で背中を押してもらって、よかったわ」

「そんな感じだね。生き生きして見えるよ」

「ありがとう。感謝してる。これからも、頼りにしているからね」

久しぶりに、笑顔がはじけた。

「そういえば、龍門教授の事件だけど」

「うん、何かわかったの？」

「警察庁の友人から聞いた情報なんだが、教授の胃に残っていたカプセルって、特殊なタイプらしい」

国内では、一般には販売されていない種類だという。

フランスで、ミミズが原材料の、血栓溶解作用のあるルンブロキナーゼという酵素がカプセル型で販売されているんだが、これに使われているものと同一視されているらしい」

ルンブロキナーゼ製品は、国内の製薬会社からも販売されているが、このカプセルを使ったタイプはフランスだけでしか販売されていないのだという。

「ただまあ、いまや世はネット時代だからね。日本から通販で手に入れることはさほど難しいことではないらしい。なかなか、ターゲットを絞り込めていないらしいんだ」

捜査を担当する人間も、現在は人員が減らされていて、大きな声ではいえないが、長期戦になりそうだと声を潜めた。

ドーン、ドーン。

大玉だが、単発の花火が上がり始めた。

打ち上げられるたびに、ワーツと歓声があがる。

ドーン、ドーン、ドーン。

順調に打ち上げは進み、

ドドドドドーン！

ドドドドドーン！

ドドドドーン！

クライマックスの、ささやかな連発花火が終わると、大きな拍手が沸き上がった。

ひとしきり拍手が盛り上がり、そのあと、波が引くように観客たちが去ると、土手に静寂が戻った。

「お世話になりました。ありがとうございます」

例年どおり、花火大会会場では熱中症などで倒れる人も出ず、何事もなく終了した。

商工会の責任者から無罪放免になった紗里は、

「大饗くん、今日はゆっくりしていいの？」

「そうもいかないよ。見物じゃなく、仕事で来てるんだからね」

予定していたすべての段取りが終了すると、大会責任者に、「明日早朝、係員を動員して、不発玉を徹底的に探し、事故のないようによろしくお願いします」

不発玉を放置すると、子供たちが拾ってケガをするというケースもあるのだ。

打ち上げた音と、開いた花火の数とが一致していればいいが、花火の方が少ないことはあるのだった。打ち上げたが、開かずに落下した玉は危険で、放置できない。

そこまで嚴重に後始末をやったうえで、花火大会は終わりとなるのだ。

くれぐれも最後まで手を抜かないようにと、大饗たちは、重ねて念を押して帰っていった。

その二年後、鈴森小百合から紗里のもとに朗報が届いた。

知り合いの画商に話し作品を見せたところ、おもしろいと思うと興味を示してくれたうえで、自分はおもしろいと思うが、肝心の時代が受け入れるかどうかまでは確信が持てない。絵を描いた少女の人生の問題でもあり、少し時間が欲しいということだった。

その人物から、まず、特徴的な一枚をフランスの展覧会に出してみようということになったという。

それは、秋子と同じようにハンディキャップがある人の作品を対象にした美術コンクールで、フランスに限らず全世界に公表され、注目されている公募展であった。

提案してくれた画商というのは、フランス人のブリジット・モルガン。通称、マダム・モルガンと呼ばれる実力派だ。

小百合に断る理由もなく、それならと、彼女にすべてをまかせていたところ、なんと秋子の作品が、最高賞にあたるクリスタル・プライスを受賞したというのだ。

そこからは小百合が積極的に動いた。

自分の画集を出している出版社に交渉し、秋子の作品がまだ日本で知られる前にもかかわらず、彼女の画集出版の話をまとめあげたというのだ。

紗里は、すぐに柳葉静江に報告した。

作品集を出版する話を伝え、保護者である彼女の了承を得た。だが、そこから先、それで収入が確保できるかどうかまでは不明だとも付け加えた。

世の中から受け入れられ、まずは本が売れなければ、秋子の画家としての人生は見通せない。

日本で、画家と称する人たちは無数にいるが、絵だけで食べていけるといふ人たちは数えるほどしかないのが現実なのだ。

「わたしも散々失望を味わい、苦労したから、よくわかります。秋子には、もう少しはつきりしてから話をすることにして、これまでどおりダンスのレッスンを続けさせます」

自分の人生を重ね合わせて、変に浮かれることなく、慎重な答えを返してくれた。

「大饗くん、大臣室からすぐに来るように呼ばれている。君も同行してくれたまえ」

「わかりました。資料は、これとこれですね。念のためタブレットも一緒に」

総務省に戻って、大饗恭介の仕事は、夕方の九時から本格的にスタートする感じになっていた。

一日の仕事が終わり、足早に約束の店に入ったときは、もう日付が変わるころだった。

「悪い。急に大臣から呼ばれて」

「構わないさ。その代わり、ここは、おまえのおごりだ」

待ちくたびれていたが、まあお互い様だと、前田健作は白い歯を見せた。

「すまない。話していたのはこれなんだ」

カバンから取り出したのは、秋子の真新しい画集だった。

肩に、フランス・ハンディキャップ作家美術コンクール『クリスタル・プライス受賞記念』とある。

「おまえ、暇じゃないのに、こんなことにまで首を突っ込んでるんだ」

「まあな。頼まれた以上は、出来ることなら力になりたいと思ってるな」

「ふーん」

前田は、パラパラとめくって、

「いいのかわからないが、緻密さが独創的で、インパクトがある絵だな。最高賞を取ったということで、会議に提案してみてやるよ。決めるのは俺じゃないから、そこから先どうなるかは、その柳葉秋子ちゃんの運しだいだけどな」

「すまん。よろしく頼むよ」

友人の前田と別れ自宅の公務員官舎に戻ったとき、ドアの前で、恭介は暗い顔になった。

静かに、足音を忍ばせて洗面所に向かうと、鏡の前の自分と、いつまでも長い時間向き合っていた。

だらりと垂らした両腕は、拳が強く握られ、震えていた。

翌朝、前田健作は走り回っていた。

「すまないが、これと同じ画集を大至急、可能なだけ買い集めてくれないか」

今年も、文科省推奨の模範図書を決定する会議の日程が迫っていたのだ。

会議の資料として提出するためには、恭介から預かった一冊だけではインパクトも説得力も不十分だと考えていた。

画像データにしてプロジェクトで見せるという方法もない訳ではないが、委員たちにすれば、手元に画集というお土産が残る方が喜ばれるだろうというのが、したたかな前田の魂胆でもあった。

出版元に依頼すれば簡単に手に入るだろうが、その場合は借りを作ってしまう意味がある。

採否の判断に、余計な制約は受けたくないというのが、彼の流儀なのだ。

「傾向的には、画集というのは異色だな」

委員は、児童文学者や現場をリタイアした学識経験者が中心で、今回の場合、美術関係者は含まれていなかった。

「毎年似たような本ばかりでは、それもつまらないわ。おもしろいんじゃないかしらね」

「いままでに、こういう画集を取り上げて全国に紹介した例はありませんか」

様々な意見が飛び交った。

会議の終盤になって、会議で出た委員各氏の意見を、メンツをつぶさないようバランスを考えて取り入れ、最終的に事務局案として

示し、了承を得たのであった。

柳葉秋子の画集は、爆発的に売れ始めていた。

前田健作が、会議でそれとなくプッシュして、文部科学省推奨の模範図書としてリストに加えてくれたことが大きく影響した結果と思われた。しかも、全国に配布する案内パンフレット作成を監修する立場にもあり、レイアウトの段階で、目立つ好位置に押し込んでくれていたのだ。

すべては、順調に進んでいた。

小百合からうれしい報告を受け、金曜日の診療所勤務を終えた紗里は静江の家に向かった。

仕事での訪問ではないので、看護師の小森は同行していない。

古民家まで行くと、時間的に遅かったこともあり留守。様子がわかっているので、その足で温泉場のヌード劇場にまわった。

事情を説明し楽屋にまわると、静江は秋子と一緒に、ダンスの練習をしていた。

当然そこには、猿渡もいた。

これまでの状況を、手短かに報告すると、

「ありがとうございます。ありがとうございます」

静江は、鼻をすすりながら何度も頭を下げた。

今後は、画集の売り上げが一段落した段階で、全国巡回展も計画しているという話を付け加えた。

そうになると秋子の将来も、ある程度見通せるのではないかと喜び合った。

「先生、本当にお世話になりました」

静江は、ホッと胸をなでおろすのだった。

「秋子の絵、あんたに見せてよかったよ」

猿渡が、低い声でつぶやいて、口元をゆがめた。

「えっ」

絶句して、紗里が凍りつく。

小森看護師の言葉が、鮮明によみがえった。

明らかに、自分の過去を知り抜いている口ぶりだ。

ど、どうして。

あのときは、顔を隠していた。

絶対に素顔は見られていないはずだ。

忙しく考えを巡らせ、動揺し、唇が震えた。

「ど、どうして」

言葉を絞り出した。

「あの日、鈴森邸でも繰り返し教えたはずだ。相手の様子を詳細に観察することが重要だとな。夢中でくわえ、舐めまわしているときでも、冷静に相手を観察しろと教えた。ちよっとした反応の変化も

見逃すことなく、情報として取り入れ、どこをどう舐め、どうくすぐればいいのか考えろと」

男は鼻で笑って、

「それは、フェラチオをするときだけに限った注意事項じゃない意味がある」

それくらい、わざわざいなくてもわかりそうなものだといわんばかりに、

「確かにリボンで顔を隠していたが、髪型も声もあのときと同じ。うつむいたあとで髪をかき上げるしぐさも、考えるときに指を曲げてあごに触れる癖も、何もかもが、あのときに俺が調教した女と同じだった」

懐かしそうな眼差しで、

「困ったときに小さく唇を噛む仕草も、イライラして耳たぶをつかむ癖も」

紗里の特長的な動きを淡々と並べた。

「いまさらこういうあいさつも妙だが、久しぶりだったな」

ふーっと息を吐いて、

「生真面目なあんたなら、あの女流画家に話を繋いでくれそうだと、そう読んだのよ」

わずかに歯を見せて笑ったが、イリーガルで凶暴な香りを放つ無頼の男に似合わず、やさしいまなざしをしていた。

「利用させてもらったのは事実だが、余計な心配は無用だ。あんたの過去をバラスつもりはない」

その言葉を聞いて、紗里の緊張がわずかに緩んだ。

「行きがかり上、秋子の力になってやりたいと思っているだけよ」
「穏やかな目をしていた。」

「世話になったな」

そういうと、紗里に向かって、丁寧に腰を折ったのだった。

その日を最後に、猿渡は紗里の前から姿を消した。

温泉地のバーで、地元ヤクザ数人に絡まれて、腕を折られたという噂もあった。

気になった紗里は、病院の外科のカルテをチェックしてみたが、そこには猿渡の名前はなかった。

秋子の画集の印税が、少しずつ入るようになったが、静江は、これは自分のお金ではないと、決して手を付けようとはしなかった。

秋子が、猿渡からコーチしてもらっていたフラメンコを、いまでも気まぐれに踊っているのを見て、静江も、自分のストリップに取り入れようとしていた。日本舞踊も彼女の譲れぬ売りだったが、出し物が単調では飽きられてしまう。

田舎の温泉地ならではの、銀行や電力関係の企業、あるいは国

や県などの地方事務所の、単身赴任者用社員寮もいくつかある。

そこに住んでいる若手社員とか、古くからの地元のコアなファンもいるのだ。ステージ転換のアクセントとして取り入れようと、自分なりにアレンジして練習していた。

その様子を横で秋子が眺めながら、うれしそうに笑っているのだった。

紗里の適切なアドバイスもあり、秋子の日常は順調だった。

「最近、よく蛍の絵を描いています」

静江は、毎月一回の定期検診で、うれしそうに報告した。

「よかった。秋子ちゃんのためにも、これから、まだまだ静江さんが力になってあげてくださいね」

やさしいまなざしで答える。

「そんな。先生に、いろいろ助けてもらって。ここでわたしが踏ん張らないと、罰が当たると思っていますから」

顔をほころばせて、何度もお辞儀を繰り返すのだった。

世捨て人

本郷誠一郎は、中国山地の山小屋で、管理人をしながら小説を書いていた。

山小屋とはいっても、冬場になるとスキーやスケートボード客が宿泊する、高原の民宿のようなものだ。

世を憂い、行く先々でアルバイトをしながら全国を放浪していた本郷は、避暑の意味もあり、高原での仕事がいかなと向かっていたときに、たまたまたどり着いた。

そこはその昔、山を愛し、山とともに暮らしたかった男が苦勞して実現させた夢の宿だった。時の流れは残酷で、その男も老いて数年前に他界し、残された妻が夫の夢の名残りを引き継いでいたものの、哀しいかな、彼女もまた充分に老いていた。

女手ひとつではもう維持が困難になっていたところに飛び込んだのが縁で、もしよかったらと、請われて、小屋の管理代行を引き受けることになったのだった。

「先輩、お久しぶりです」

まとまった夏季休暇を取って訪ねたのは、大饗恭介だった。

「やあ、前途洋々の高級官僚くん。懐かしいなあ」

文芸部時代と変わらぬ毒舌を添えて、若々しい人懐っこさで迎えてくれた。

「わいは、あんな形で大学を離れたけど、文芸部のみんなはどうしてる？」

まぶしそうに恭介を見ながら、部員の消息を尋ねる。

「僕も文芸部全員のことを把握しているわけではありませんが」

まずは、本郷と同学年のメンバーについて何人かの持っている情報を伝えた後で、

「それとあと、先輩がおられたころの僕らの学年だと、たとえば、医学部の立花は、元々発達障害の研究治療に貢献したくて医学部に入ったんだといって、卒業時には研究職に就くことも考え迷ったようですが、最終的には直接患者と向き合う仕事を選択し、いまは地方都市の総合病院に勤務しています」

「立花か。彼女とは話す機会はなかったけど、髪が長くて美人だったことだけは覚えてるよ。目立つことのない、物静かで、哀しい詩を書く人だった印象が残ってるなあ」

思い出すように、遠い目をした。

「そうですか。微妙な距離感だったんですね」

恭介も、何回もうなずき、

「彼女は、仕送りなしで大学に来ていたから、アルバイトばかりで忙しかつたんですよね」

「え、そうだったのか」

本郷が驚いた。

まさに、常識では考えられないことだった。

「仕送りなしで医学部を卒業しようなんて、わいからいわせたら信じられないほどの暴挙だよ。それを実現したなんて、痛快な女性だなあ」

「鈴森小百合という画家のヌードモデルをしたり、あとは家庭教師をいくつも掛け持ちしたりと多忙で、アルバイト優先。滅多に部室には来なかつたですから」

そういうと、

「鈴森小百合か。あの龍門教授の奥様だったよな」

本郷の顔がこわばった。

その変化には気付かず、

「事実婚を選択していた夫婦だったけど、教授が亡くなったときには、ひどく憔悴されていたらしいです。それだけ愛が深かったということなんでしょうね」

そう続けた恭介に、

「きみは、そう思っているのか」

トゲのある意外な言葉が返ってきた。

「わいは、龍門は唾棄すべき最低の男だと思っている。奥様の鈴森小百合という女性についても、才能のある魅力的な女性との評判だ

が、わいからいわせたら、自己中心主義の、謎めいた女帝という印象だな」

驚いた恭介は、言葉を失って沈黙した。

「わいと、同棲していた女性がいたんだ。あれが愛だったのかどうかはわからない。一緒に暮らしていたわけで、少なくとも、惹かれ合っていたことはまちがいないと思う」

話しはじめた本郷の目は、心なしか、うるんでいるようでもあった。

「そのころ、わいは、大学そばの彼女の下宿に何日も泊まり込んでいた。朝起きて、カーテンの隙間から日差しが降り注いでいても、わいらは抱き合ったまま、起きる気にもならなかった。そんなとき、彼女の下宿のドアがノックされたんだ。わいらは、動きをとめ、息を凝らし、じつとしていた」

本郷は、遠い目になった。

「抱き合って、戯れで乳房を触ったり、声を殺して笑ったりと、ゴソゴソしていたから、おそらくドアの外の人物は、そんな気配は察していたと思う。だから訪問者は、何回か繰り返しドアをノックした。でも、急に室内が静かになって、まったく応答がなくなったから、あきらめて帰っていったんだ」

あとで、あれは誰なんだと問いたかった。

当然のこと、彼女は知らないという。

だが、そんなはずはないと思った。

納得できなくて重ねて問うと、ついに、憶測だが龍門教授だと思うと白状したのだという。

「彼女は、龍門教授とも肉体関係があつたんだ」

医学部に全員必須のゼミはないが、希望すれば受けられるゼミはいくつかあった。彼女は、単位数を稼ぐために龍門ゼミに入っていたという。

「形式ばらない、くだけたゼミという評判で、よくコンパも計画されていたらしい。彼女はそういう飲み会も嫌いじゃなかった」

そんなコンパの後、教授から送っていったやるといわれ、一緒にタクシーに乗った。だが、車が停まったのは彼女の下宿ではなく、ラブホテルの前だった。

「ふたりを下ろしたタクシーが走り去った後、教授に静かに背中を押され、彼女は酔いもあり、夢の中にいるような気分で、一緒に部屋まで入ってしまいました」

本郷はまぶたを閉じて、

「あれを強姦というのか和姦というのか、そんなことはどうでもいいんだ。翌日、彼女は教授の研究室に呼ばれた。どう対応していいかわからなかったが、まずは、単位のことが頭をよぎる。やむなく

重い足取りで研究室に入ると、すぐにドアをロックされ、両手首を背中縛られ、窓際に立たされたんだ」

そこから時間をかけて、じつくり、いたぶるようにブラウスを脱がされ、ブラジャーを外された。

フェラチオを求められ、初めてのことで激しく動揺し、ためらったが、最後は頭髪を驚ぶかみにされ、強引に、のど奥までくわえ込まされてしまった。

「そんなことがあって以来、彼女は教授を避けるようになり、ゼミもずっと欠席していたんだ」

ドアがノックされたのは、そんなタイミングだったという。

「当時のわいは、なーんもわかっておらんんだ」

それからもしばらくは彼女の下宿に入り浸っていたが、授業もあるし、本郷は自分のアパートに戻っていた。

それから、ふと気がつけば、少しずつ、彼女は本郷を避けるようになっていったのだという。

何回か、理由にならない理由で断られ、がまんが出来なくなり、問い詰めたのだという。

「いつのまにか、何回となく龍門教授の研究室に呼ばれるようになっていて、鬼畜龍門の性癖に翻弄されながら、どんどんアブノーマルな性交を仕込まれていったんだ」

ある日ついに、わたし、教授の性奴隷なの、と打ち明けられてしまったのだという。

「奥様が車椅子生活になられたことも関係してるのかなあ」

恭介が、そつとつぶやくと、

「そうじゃない。当時はまだ、奥様は車椅子生活じゃなかった」怒ったように否定した。

「奥様の誕生日に、親しい友人たちが集まったちょっとしたパーティーがあったんだ。そこに彼女も呼ばれていた。鼻から上を隠す幅広いリボンを巻いて顔を隠し、性奴隷として、来客たちを順番にフェラチオでもてなすように命じられていたんだ」

「あ、でも、目隠しされてたらお客が見えないし、フェラチオだってうまく出来ないんじゃないですか」

「アイマスクという訳じゃなくて、奥様お手製の薄い布製だから、どうにか透けて見える。視界は確保されていたんだ」

そこまで話を聞いて、恭介はため息をついた。

「まさか、です」

信じられない思いだった。

「うん。彼女から涙ながらに打ち明けられて、わいも、まさかと思っただよ」

コンパの帰りに教授の毒牙にかかったことがきっかけではあった

が、繰り返し淫蕩な調教を受けているうちに、いつしか、アブノーマルな妖しい世界に染まり、性奴隷として覚醒させられていったのだという。

「ごめんなさい、もう、わたしのことは忘れてくださいと、そういつて走り去っていったんだ」

それが、彼女との最後の会話になったのだった。

「だから、本郷先輩の友人たちが龍門教授にねじ込んで、単位を出してやってくれと交渉にいったときも」

恭介は、自分でうなづく。

「自分で直接頼みに来いという教授の言葉を伝えられても……」

「そうとも。どの面下げて、あんな卑劣なヤツに頭が下げられるというんだよ」

「そうだったんですね」

別に、潔癖主義の硬骨漢で、単位をもらいに行かなかったわけではなかった。

「わいだって、元々は、医者になろうと思って医学部を受験した身だからな。だが、まあ、文芸部に入って詩を書き、自分自身を見つめ直すようになる、医者になりたい気持ちにも疑問を感じるようになったことも事実なんだよな」

複雑な胸中も、正直に吐露した。

「自分は何者なんだろうと何度も自問したし、人生って何だろうとも思った。いまは、その答えを見つけるきっかけにならないかなと、下手な小説を書いてるんだ」

「そうなんです。僕は、先輩の詩集が好きで、いまでも大切に持ってるんです」

「そうか、ありがとう。あれはまあ、わいの青春の日記のようなもんじゃからな。恥ずかしい気もするが、そういつてもらえらうれしいよ」

今日はほかに客もないから、ゆっくり飲み明かそうということ得意気投合した。

久しぶりに楽しい時間を過ごし、恭介は、わざわざ訪ねてきたかいがあったと思っていた。

せっかくだからと連泊し、中国山地の名山、伯耆富士とも呼ばれる大山に、本郷のガイドで登った。

「本当にありがとうございました」

深々と頭を下げ、心の底から晴れ晴れとした表情で帰っていったのであった。

大饗恭介が離婚した。

「おまえ、大丈夫か。思い切ったことをやったな」

総務省の廊下まで来て、前田健作が、心配そうとも羨望とも取れる声をかけた。

「大変だったけどな。結婚するときは勧められるままに笑ってるだけだったから簡単だったけど、別れるとなると、あんなに膨大なエネルギーが必要だとは思わなかったよ」

「そうだろうな」

わかったような顔をしてうなずいている。

「まあ、決めた以上は、もう後は振り返らずに、前を向いて進むことだな」

ポンと殻を叩いて、文科省に戻っていった。

これなら安心だな、という顔をしている。

恭介は、以前にも増して仕事に集中するようになった。彼のまとめる資料は抜かりがなく、かつ使いやすいと評価も上がった。当然の結果として、困難な仕事となると決まって彼が呼ばれるようになっていった。

忙殺される日々が続くようになったが、それなりに誇らしくもあり、充実した波が来たともいえた。

仕事でたまったストレスは、新宿の繁華街を飲み歩くことで解消していた。

「順調そうでよかったよ」

「ああ、いろいろあったが、余計な気遣いの必要がなくなったからな。折れていた翼が治って、大空に飛び立った驚の気分だよ」

「なるほどな。さしずめ俺なんか、豪邸の軒先に作られた鳩舎で暮らす忠実な伝書鳩かな」

自分に向けて、シニカルなセリフを吐いた。

ふたりが飲んでいたのは、新宿のSMバーだった。

どこで飲もうかと、あてもなく彷徨っているとき、たまたま目についた店だった。

初めて入った店の小さなステージで、縛られた富豪と彼の奥様にスポットライトが当てられていた。

手に鞭を持ったピエロ姿の男が登場し、鞭を鳴らしながら富豪の夫人を脅すのである。

夫を守るために、夫人は泣く泣く、ピエロ男の様々な陰湿で容赦のない要求に屈してしまおうという、安っぽいストーリーだ。

客たちはそれを、ニヤニヤ笑いながら酒の肴にして、ウイスキーやブランデーを舐めている。

ストーリーとしては陳腐だが、充分にエロチックな寸劇が終わると、客たちによる王様ゲームが始まった。それがこの店の、特徴的な遊びのシステムのようにであった。

男性客の方が圧倒的に多かったが、女性も七人ほどいた。

マスターが、珈琲豆の入ったボトルに、七本のガラス棒を挿し込むと、

「じゃ、引いてくださいな」

カウンターの端から、女性客限定で一本ずつ抜いていき、三人目の女性が引くと、先が赤い。

「はい、ありがとうございます」

抽選はそこで終わった。

王様ゲームではなかった。むしろ、あえていえばスレイブ・ゲームなのだ。

先が赤い棒を引いた女性は、裾を踏んでしまいそうなほどのロングドレスで、顔には、まん丸のファッション・サングラスをかけていた。

この店は初めてではないようで、隣に座っている同伴の男性に、どうしようというそぶりで甘えかかっている。

マスターが、女性の耳元で何やら耳打ちすると、

「わかりましたわ」

観念したように微笑んで、カウンターの背後にある小さなドアに消えた。客の男たちは、ざわつきながら時折りドアの方に目をやっては、期待を持って待っている。

しばらくすると、女は、首には大型犬用の首輪を装着し、カップレスブラと紐パン姿になって再登場してきた。

顔の鼻から上は、一見してお手製に見える幅広のリボン巻いて隠している。

恭介は、ドキッとした。

その手作りの、特徴あるリボンには見覚えがあったのだ。

本郷先輩が話していた、鈴森小百合が手作りしたというリボンはこれかと思った。

顔の上半分を隠すためのリボン。話には聞いていたが、実物を具体的にイメージするまでには至っていなかった。

だが、いま目の前の女性が身に着けている物なら、同じものを、学生時代に見た記憶がある。

「今宵は、男性全員が王様です。いまから彼女が皆様のお席をまわり、美しくも可憐な唇でご奉仕したいと申しておりますので、どうぞ願いをかなえてやってくださいますように」

マスターの口上を聞きながらも、激しく心臓が脈打っていた。

これから、美女のフェラチオが楽しめるからではない。

「順番にまわらせますので、しばらくお時間を頂戴することになります。それまでどうぞ、ゆっくり飲みながらご歓談のほど、よろしくお願い申し上げますね」

文芸部で、各自が新しい詩を持ち寄って批評会をしたとき、作品を出そうとした立花紗里のバックから、同じものが、こぼれ出たのを目撃していたのだった。

恭介にはそれが一瞬で奇妙なものに思え、これは何だと、強く彼女に尋ねたことがあった。

「最近わたし、寝不足気味なの。お昼の短い時間でも、空いたらちよこちよこつと寝ようと思つて」

そのためのアイマスクを手作りしたのだといつて、恥ずかしそうに微笑んだ。

「下手でしょ、おかしい？」

いや、そんなことはないけどと応じて、場が治まったことがあったのだ。

そのときの光景が、まざまざと蘇つてきた。

色もデザインも、まったく同じだ。

「おい、どうしたんだ。顔が青白いぞ。フェラチオをされることになつて、緊張してるのか」

前田がおどけた口調で声をかけた。

「い、いやっ」

「じゃ、いままでにフェラチオされた経験は？」

「馬鹿、あるわけないじゃないか」

「そんなところだろうと思つたよ。俺はたまに気晴らしにスープに行くから、店によつては定番のサービスだからな。めずらしくもないんだが、こういうシチュエーションでの経験は初めてだから緊張する。奇妙なワクワク感もあるぞ」

どさくさ紛れに、前田の妙な告白も聞かされた。

「おおおっ、あ、あ、いくつ。だ、出すぞ」

最初の客が、限界に達して放出したようだ。

ドクン、ドクンと、男の腰が痙攣のように跳ね、激しく波打つのをしっかりと受け止め、舌の上で徐々に萎えていくのを感じながら、女は、ゆつくりと口から抜いてやつている。

わずかにうつむき、手のひらに置いたおしぼりの上に、白濁した粘液を垂らした。

おしぼりを籠に戻すと、再び男のモノをくわえ直して、戯れの残滓をきれいに舐め取っている。

「お疲れさま」

マスターが、女にビールの入った一口グラスを差し出した。

それで口を洗つて、次の客に進めという合図だ。

「すっ、すげえな」

そんなつぶやきも聞こえた。

「待ってるうちに、どうにかなつてしまひそうだよ」

みんながみんな、どん欲に楽しもうという魂胆丸出しで、どんな時間が過ぎていった。

それでも、やっと恭介の番が来た。

「よろしく、初めての方ね」

「じゃ、はじめますね」

女がカウンター付属の丸椅子の足元にしゃがんだとき、

「あの、あとでお話があるのですけど。今日がダメなら、せめて連絡先だけでも」

夢中で話しかけていた。

「ごめんなさいね。ここは、その日限りの束の間の出会いを楽しむ場所。そういうのは出来ないルールなのよ」

取り付く島もなく、さりとあしらわれた。

「あ、あの、龍門教授のことなんですけど」

その瞬間、女性の表情が一変した。

恭介の足元から、驚愕の顔で見上げている。

女が、ごくりと唾液を飲み込むのを感じた。

しばらく見つめ合っていたが、

「わかった。あなたの電話番号、もらっておくわ」

女の気持ちたちが固まってからは、話が早かった。

淡々と恭介の腰のベルトをゆるめ、膝まで下ろしたのだった。

「口の中に出してくださいね」

静かに微笑んで、唇を寄せてきたのだった。

女性からの連絡は、すぐにきた。

女は開業医をしているからということ、医院が休みになる土曜日を指定してきた。郊外のゴルフ場で、当日はまずラウンドを楽しんで、そのまま宿泊しようという話でまとまった。

彼女は、山本春乃と名乗った。

同伴の男性は、彼女の夜のご主人様、楠木拓司。

コースに出ても、気持ちここにあらず。うわの空で、あつという間にラウンドは終わった。

「大饗さんには参ったわ。ゴルフ、お上手ね」

汗をぬぐいながら、女が悔しそうにたたえた。

「役人をしていると、まあまあ、まわる機会も多くて」

わざわざ練習場にいくほど熱心ではない。それでも、スコアは自然にまとまっていた。

「多分、大饗さんも俺も、ボギー狙いの堅実なゴルフなんだよ。それに対して春乃は、バーディー狙いの挑戦的なゴルフ。誰が一番う

まいかという言い方になると難しいが、むずかしいホールでも攻略できる可能性があるゴルフをするのは、春乃だと思う」

彼女は、勇猛果敢に挑戦するゴルフだから、バーディーも、三人の中では唯一、三ホールで達成しているのだが、手加減しないフルスウィングなので、ミスも出やすく、どこかで大叩きするホールを作ってしまうタイプなのだった。

「そう思いました。春乃さんだけは、楽しもうとしてスウィングしているイメージでした。僕らは、出来るだけ大げがしないように、ともすれば堅実にまとめようとして、まるで仕事をこなしているようなゴルフでしたね」

ホテルのレストランでディナーを楽しみながら、何となく堅苦しさが取れた感じになったタイミングで、

「聞きにくいことを聞きますが、春乃さんは本郷誠一郎先輩の……」

そつと、話を向けると、

「うん。彼とは、短い間だったけど同棲もしていたわ」

話に応じてはくれたが、表情が重い。つらい思い出なのは明らかだった。

「彼には、別れるときにすべてを打ち明けたけど、不幸なことに、彼と別れたことですべてが吹っ切れ、それから、ますます龍門の淫靡で耽美的な世界にのめり込むことになった。どんな彼の色に染まっていたの。欲望をむき出しにして、龍門に夢中になってしまったわ。それが、あの怖い奥様の嫉妬を呼ぶなんて、考えたこともなかった。のんきなものね」

ある日、龍門との待ち合わせ場所として指定されたホテルの部屋に入ると、そこに龍門の姿はなく、待っていたのは、黒いサンングラスをかけた十数人の無頼の男たちだった。

その部屋で、容赦なく凄絶な凌辱の限りを尽くされたあと、もう二度と龍門教授には近づくなよと繰り返し恫喝され、まるでボロ雑巾のように、夜の街に放り出されたのだった。

「何回絶頂に達しても許してもらえず、ヒクヒクと痙攣しながら男たちを受け入れていたの。そのときの男たちの会話が、何年経っても忘れられないわ」

「奥様に報告するんだから、しっかり何枚も写真を撮っておけよ。いまのこのクライマックス、連続アクメシーンは、動画モードで頼むぞ」

朦朧とした意識の中で、そんな話し声を聞いたのだった。

「え、これって、奥様が？　まさか、と思ったわ」

春乃は遠い目をした。

「でも、まだわたしは懲りてなかったの。だって、すぐに龍門から連絡が来て、いそいそと出掛けて行ってしまったんだもの」

密会に指定されたのは、古びた商業ビルの地階にある、広い倉庫のような部屋だった。

「でも、最悪。わたしって、救いようのない馬鹿なの。だってそこは、個人的に飼いならした性奴隷をマニアの間で取引する、闇のオークション会場だったの」

裸になるよう命じられ、大型犬用の首輪を装着された。

カップレスブラと、デルタ部分をギリギリまで矮小化した紐パンだけという姿で、大勢の男たちの前に立たされた。

「それでわたし、ようやく龍門から捨てられたことを悟った」

さびしそうに微笑む。

「捨てられたからといって、いまさら本郷さんに会わせる顔もなかったし。まあ、自業自得よね」

すべてを振り払うように言葉を切って、まぶたを閉じ、しばたかせたあと、視線を天井に送った。

そこから話を引き継いだのは、いまご主人様となっている、楠木拓司だった。

「俺の叔父貴が、彼女を落札したんだ。もちろん人身売買なんかじゃない。彼女のアダルトな女性としての夜を、独占的に支配する権利を買ったというわけ。大人同士の、危ない火遊びだ。ちよつとだけエロチックな、性的な取り決めの恋愛ゲームに過ぎない」

気持ち少しは落ち着いたのか、春乃も口を開いた。

「龍門に代わって、新しい飼い主になったのは弁護士さんで、龍門なんかとは比べ物にならないくらいジェントルマンだったわ。わたし、すぐに夢中になった。強引に時間をやりくりしてでも、彼の命令には喜んで従うようにしていた」

だが、まもなく彼女の存在が、彼の奥様に知られることとなったのだという。

どうしても、家にいない時間が増えるし、夫婦の予定を立てようとする、これまでは簡単に決まっていたことが、つい、ぎくしゃくしてしまう。

バレルのは、時間の問題だったともいえるのだ。

「それで、切羽詰まってしまった叔父貴が、思い付いて、甥の俺に声をかけたのさ」

一応、譲られた形になってはいるが、時には拓司の部屋に春乃の顔を見に来て、勝手に抱いていくのだと笑った。

「幸いなことに、俺は独身主義者なんでね」

自由奔放に生活するのが一番だと、自慢するでもなく、自分の生活スタイルを率直に披歴した。

「汚れ過ぎた最低なわたしを見捨てないで快く拾ってくれて、感謝してるわ。彼はだから、大切なご主人様なの」

「春乃さんはよく、自分について最低という言葉を使われるけど、そんなことはないと思います。誰だって、間違いは犯すもの。しかも、その結果は後になってから付いてくるもので、その瞬間の是非は、神様以外、誰にもわかりませんから」

話をしながら恭介は、山本春乃と出会えたのは幸運だったと感じていた。

「ちよつといいかな」

楠木が、急に照れた顔になった。

「大饗くんの前だけど、今日は実は、春乃の誕生日なんだ」

そういつて、テーブルの上にリボンのかかった箱を置いた。

「これって、わたしに？」

ポツと春乃が頬を染めた。

「そうだよ。開けてみなさい」

「わぁ、何だろう」

うれしそうにリボンをほどき、箱を開けると、出てきたのは、キラキラとまぶしいシルバーのチョーカーだった。

首の正面の、ワンポイント飾りがぶらさがる位置にあるのが、リードを接続できる輪っかになっている。

「性奴隷には不可欠な首輪だが、これならフォーマルなドレスにも合う。大型犬用の首輪の方が圧倒的にワイルドで、征服感や加虐感、は強調されていいんだけど、関係者、当事者同士だけで、隠れてマスターベーションしているだけという、何とも言い難いもの足りなさは残るんだよな」

それが、これだと堂々と街にも出られるし、ホテルでのパーティーであつても、フォーマルなドレスと合わせれば、そのままゴージャスなチョーカーとして通用するのだとほくそ笑むのだった。

「ありがとうございます、ご主人様。春乃、これを着けて、これまでに以上に誠実な性奴隷になるよう努力しますわ」

うつとりと微笑む瞳には、涙も滲んでいる。

「勘違いするんじゃない。基本的には、普段はこれまでどおりに大型犬用の首輪を巻くんだけ。これは、俺が着用を指示した特別なときだけだ。勝手な真似は許さないからな」

「ごめんなさい。はい、ご主人様。これから、厳しく躾けてくださいね」

恭介の目の前で、予期していなかったアダルトな共演が始まつてしまった。

「大饗くんも、どうせ今夜はここに泊まるわけだし、もしよかつたら、あとでこの春乃を提供しますから、遠慮なくご賞味くださつても構いませんけど」

唐突に、楠木が誘つてきた。

「抱き合っていればこそ、龍門とかいう教授のことも、もっと思い出すことがあるかもしれないじゃないですか。なあ、春乃」

女からも誘わせようとしている。

「わたしのこと、お気に召しませんか」

遠慮気味にいつて、そつと顔をうかがってきた。

「あ、いえつ。そういうわけでは、はい、全然。で、でも」

予期せぬ展開に、大饗は、しどろもどろになって、ただ動揺するばかりだった。

「わかりました。抱いてくれもいいし、もし抱くのがためらわれるようなら、オナニーショーをさせて眺めてくださってもいい。大饗くんのご自由にといいことで、とりあえず、春乃を部屋に行かせますから、よろしく」

強引に決めて、ふたりで家族風呂に入るからと席を立った。

立ち去り際に、春乃が、

「大饗さん、あなた、あの特殊なりボンで、わたしが本郷の恋人だったと見抜いたみたいだけど、ということは、つまり、あなたの近辺に、同じリボンを持っている女性がいるということよね」

恭介の胸を、鋭くえぐるようなまなざしで見つめた。

「どうすれば彼女の気持ち、あなたの方に振り向かせることができるかだって、教えてあげられるかもしれないわよ」

「そういう放つと、颯爽と立ち去っていく。」

「あ、まっ、待つて」

とつさに呼び止めようとしたが、

「大丈夫だよ。風呂から上がったら、いずれにしても君の部屋に行かせるんだから」

快活に笑って、

「もつとも、一応は俺が洗っておくが、中にスペルマが残っているも勘弁してやってくれよな」

ささやくようにいつて、いたずらが見つかった悪童のように、笑顔で片目をつぶってみせた。

「好色なマゾ女だが、可愛いところもある。しかも、君にとっては役に立つ女でもあるはずだ」

自信たつぷりに断言した。

それから二時間近くが経過したのち、恭介の部屋のドアがノックされた。

「お待たせしちゃったわね。ごめんなさい。ご主人様に離してもらえなくて」

恥ずかしそうに言い訳をして頭を下げた。

「あ、いえ。僕は別に、そんな」

「照れ屋さんのね。でも、あなたの彼女も龍門の毒牙にかかって

マゾ女として調教されちゃったんでしょ。彼女のことが本当に好きで、結ばれたいと思っっているなら、わたしのアドバイス、聞いておいた方が絶対にいいわよ」

妖しい微笑みを浮かべ、仁王立ちになったのだった。

「気持ちを含めて抱いてくれるなら、マゾっ気のある女に仕立てられた女性の上手な御しかた、手取り足取り教えてあげてもいいけど、どうする？」

「えっ、そ、そういわれても」

「まあいいわ。まず、最初にいつておきたいことは、こんな俺でよかったら付き合っただけいい、なんて、そんな告白の仕方だけはダメということ。マゾ女はね、もっとクールな暴君に、ぐんぐん引張っていつてもらいたいの。強引に奪い去りたいの。マゾ女が、思わずしびれてしまうようなポイントは、他にもたくさんあるわ。どう、わたしを抱いてみてやろうって気分になったかしら」

冗談とも本音ともつかないセリフを吐いて、静かに、妖しく微笑むのだった。

翌朝、恭介は一人で、遅い朝を迎えた。

長く充実した一泊二日が終わった。

「本当に、いろいろと、ありがとうございます」

「いやいや、こちらこそだよ。楽しかったさ」

「わたしもよ。ありがとう、大饗さん」

翌朝早く、さわやかな笑顔に送られ、ゴルフ場が経営しているホテルの玄関で別れたのだった。

事件直後は、なぜ龍門先生が殺されなければならなかったのかと思っていたが、いまでは、彼が殺される可能性は、意外なほど広がったと感じていた。

殺されて当然の男だった、とも思う。

バラバラだった幾つかのピースが、ジグソーパズルの枠の中で、部分的にはあるが、かなりつながってきいてきた。

昼過ぎ、恭介が、寝不足で赤くなっていた目をこすりながら自宅に戻ると、立花紗里から分厚い封書が届いていた。

上野の美術館で、柳葉秋子の作品展を開催するというものだ。

パンフレット類が同封されていて、自分も仕事の都合をつけて上京するつもりだとある。

彼女には、恭介はまだ離婚したことを伝えていない。

離婚を伝えようとすると、まるで気持ちたちが学生時代に戻って、告白する直前のような息苦しさを覚えてしまうのだった。

玄関のインターホンが鳴った。

モニターをチェックすると、立花紗里が立っていた。

「突然どうしたんだ。何も聞いてないぞ」

「ごめん。来ちゃった」

悪びれることなく、笑顔がはじけた。

「はい、これ」

「なんだよ」

「お稲荷さん。途中で何人もの行列が出来てるお店があったから、何だろうと思って覗いたらおいしそうな稲荷寿司の店だったの。一緒に食べようと思って」

その様子は、まるで恋人気分だ。

「お茶を入れるわ。水屋にあるお湯のみ、使っているでしょ」

勝手にガスレンジに立って、ヤカンを火にかけた。

「あ、でも、茶葉がないかもしれない」

当惑する恭介に、

「大丈夫よ。そう思って、ティーバッグも持ってきたから」

お茶を入れて、ふたり、キッチンテーブルに向き合って座った。

正面には、竹皮の包みが開かれた稲荷寿司が置かれている。

「さあ、食べましょう。手づかみでいいわよね」

明るく声をかけたが、恭介は、黙り込んでいた。

「実は僕、妻とは離婚したんだ」

「うん。知ってた」

意外な答えが返ってきた。

「え、知ってたのか」

信じられないという目で見返すと、

「だって、秋子ちゃんの絵を文科省の推薦図書に含めてくださったり、今回は上野の美術館での作品展で助力してくださったりで、前田さんとは、それはもう、いろいろやり取りしてるから」

「そうか、前田から聞いていたのか」

「ごめんなさいね。前田さんがおしゃべりじゃないのよ。わたしが強引に聞き出したの」

急に緊張した表情になった。

「わたしがいつも、用件を話し終わったあとに、大饗くんの様子を聞いてたの。前田さんは普段は、あいつとどこそこ飲みに行ったとか、喧嘩をしたとか話してくださってたのに、いつごろからだったか、急に口ごもるようになって、話しても歯切れが悪くなることが多くなってる」

何があったのか問い詰めた結果、離婚したのだと打ち明けられたのだといった。

「いけなかった？」

「いや、そんなことはないよ。事実だし、別に隠さなければいけな

いことでもない」

そう応じたが、ふたりを取り巻く空気は、にわかに重く、どんよりしたものに變化していた。

紗里は、いま、思い付く言葉が見当たらなかった。

膝の上で、両手の指を絡ませ、視線を落としていた。

「この稲荷、おいしいよ」

恭介が、沈黙を切り裂いた。

「あ、お茶、お代わりしましょうか」

精一杯の気持ちで言葉を返したとき、まぶたにあふれていた涙が限界を超え、たらたらと頬を伝った。

「あ、ごめん」

それを見られまいとして、あわてて立ち上がり、恭介に背を向けるとガスレンジに向かった。

「台所、きれいにしてるのね」

こっそりハンカチを出して、手早く涙をぬぐった。

「そんなことないよ。いろんなところが、行き届いてないのはわかってる。だけど、仕事が優先だから。家事なんかで、余計なストレスをためないようにしてるから」

見えないところで、手抜きをしてるんだと笑った。

「そうなんだ。あ、そういわれたら、ここもそうなのかな」

紗里は話を合わせて、

「そうだ。わたし、こういうの得意だから、きれいにしといてあげる」

「それはまあ、歓迎だが」

「美術展の打ち合わせに、明日は上野に行くけど、それまでは、身体が空いてるんだ。まかせて」

自然に、その日は恭介の官舎に泊まることになった。

「少し遠いけど、おいしいブラジル料理の店を知っているんだ。夕食はそこにしないか」

そこは、前田健作とも訪れたことのある店だった。

「ブラジル料理なんか食べたこともない。わたし、何も知らないから、恭介くんにおまかせするわ」

いつのまにか、大饗くんから、恭介くんに変わっていた。

窓の外で、オレンジ色の雲が流れていた。

電線に泊まっていた小鳥が、キキキッと甲高い声で鳴いて飛び去っていった。

「そうと決まったら、そろそろ出ようか。地下鉄で行くんだ」

「わかった。お供するわ」

うれしそうに、いそいそと立ち上がった。

紗里は、無意識に恭介の斜め後ろを歩いていった。

心が弾んだ。

店について、スタッフに案内されたのは、フロアの中央に設置された小さなステージの真正面の席だった。

「素敵なお店ね」

「しかも、いい席に座れた」

店内には、ボリウムを絞ったサンバのアップテンポなリズムが流されていた。

スタッフが運んできたメニューを一瞥し、恭介は、代表的な肉料理であるシュラスコと、ブラジル産の赤ワインを注文した。

「ここ、よく来るの？」

「いや。そうでもないけど、どうして？」

「注文の仕方が、凄くスマートに見えたから」

「そうか。ま、初めてじゃないからな」

事実を、ありのままに伝えたただけだったが、恭介としては悪い気はしなかった。

「いつもの行きつけの店というのも安心感があるし気が置けなくていいけど、それじゃ、新規の開拓は出来ないよな。新しい世界の扉は開けない」

「そういいながらも、実は自分は、知らない店に飛び込みで入り開拓していくというタイプではない自覚がある。」

「ここも、前田に連れてこられた店だった。」

「素敵な考え方だわ」

「それでもないよ。普通じゃないかな」

紗里に妙に感心されて、恭介は、ついカッコつけている自分を恥じた。耳元が赤くなっている。

そこに、ワインが運ばれてきた。

「乾杯。よく来てくれたね」

「ありがとう、乾杯」

につこりと、心の底から微笑み合い、グラスを重ねた。

ワインが半分ほどになったところで、シュラスコが届いた。

そのとき、サンバのボリウムがアップした。

生のドラムも加わっているようだ。

フロアに拍手が沸き、パネルの奥から、十人ほどのサンバチームが華やかに登場した。

男性が三人で、七人が女性だ。

まずは全員が小さなステージに身を寄せ合って登り、笑顔を振りまきながらお辞儀をしたが、狭いステージでは身動きできない。

ワン・ツー・スリー・フォー！

曲調が代わり、強烈なビートがフロア全体に響き渡った。

サンバチームも、一気に弾けた。

頭や背中に着けた大きな羽根飾りをクジャクさながらに広げ、グラマラスなボディーをダイナミックに揺らしながら、どんどん客席へと降りていく。

まずは正面席の紗里の前で立ち止まり、あたかも誇示するように巨大なバストとヒップを激しく前後に振りながら、フロア全体をサンバカーニバルの色に染めていくのだ。

「びっくりしちゃった」

チーム一行が次の席に移っていったくれたあと、ホッとしたように微笑んだ。

「せっかくだから、楽しもう」

「そうね。でもほんと、驚いたわ。いまやもう、すっかり田舎者でしょ」

恥ずかしそうに首をすくめた。

「立花、おまえ、ステキな女性になったな」

「ほんと？　ほんとうにそう思ってくれてるんだったら、うれしいな」

「心からそう思うよ。お上手でいってるわけじゃない。よかったら、もう一軒付き合ってくれないか」

勇気を奮って誘うと、

「ひとりじや官舎に帰れないわ。ついていく。どこまでも」
甘えるようにいった。

二軒目に向かったのは、昔懐かしいというか、話には聞いたことのある、いわゆるインベーダーゲームが置いてあるバーだった。アーケードゲームで一世を風靡した、スペースインベーダーだ。

当時、アップライト筐体とテーブル筐体の二種類があったのだが、店にあるのは、喫茶店に多かったテーブル筐体のものだった。

ママさんが、その昔、夢中になっていたのだという。

スペースインベーダーが、地球を責めてくるゲームで、最後には必ず地球は征服されてしまうというゲームなのだが、及ばずながら抵抗の限りを尽くし、どこまで長く抵抗できるかで、その間に得た得点を競うというものだった。

爆発的にヒットした人気のゲームだったことから、バージョンにより様々な改良が加えられたが、店に置かれているのは、比較的第一期のオーソドックスなパターンだ。

恭介も前田も、何回かママに挑んでみたことがあったが、ことごとく退けられた。

「いらっしやい。あら、こちらは彼女？」

結構年期のいった薄化粧の女性が、笑顔で迎えてくれた。

「いやっ。あ、つまり、その」

彼女かとストレートに問われ、どぎまぎしていると、

「ごめん、余計なことを聞いちゃって。ひとこと多かったわね」
爽やかに笑って、

「いつものでいいわよね」

軽率なミスを誤魔化すかのように、大饗の答えを待たず、さっさと勝手に水割りのグラスを二個作ってカウンターに置いた。

見るからに知的な女性だった。

「彼女、僕らの先輩なんだ」

恭介が、ママの素性を明かす。

「あら、勝手にバラスんじやないわよ」

口を尖らせて、頬を膨らませた。

「有名国立大学を出て、場末のバーでママをしちやいけないって法律もないでしょ」

あっけらかんというて、白い歯を見せた。

「どう、また勝負する？」

ママは早く話題を切り替えたそうにしていた。

「もう勘弁してよ。僕も前田も、ママには散々打ち負かされたじゃないか」

恭介も、話題に乗った。

「でも、いくら抵抗しても最後にはインベーターに地球が征服されてしまうような、ある意味ではむなしいゲームに、どうしてママたち世代はあんなに熱狂したのかな」

「そうよね、どうしてなんだろう。最後は、必ず滅ぼされるのに」
ママも同調して、

「正義は必ず最後には勝つ、みたいな、そんな嘘臭いストーリーになってないところが、逆に、時代に気に入られたのかしらね」

「なるほど、案外、そんなところだったのかな」

恭介が同調して、そこでまた、会話が途切れた。

飲み干したグラスを前に押し出すと、

「同じでいいのね」

すぐに新しい水割りを作り、マドラーで氷をかき回している。

「ねえママ、先月はどこに行ってたの？」

新しいグラスに口をつけながら、恭介は、今度は何かボリュウムがありそうで、軽い話題を探していた。

「このママはね、時々一カ月くらい店を閉めて、車で放浪の旅に出るんだ」

紗里にそう紹介すると、

「まあ、女性なのに、冒険家なんですね」

興味津々に目を輝かせた。

「そんなんじゃないのよ。ただのストレス解消。こういう仕事をしていると、どうしても溜まるの。溜めたまま暮らしていると身体に

悪いでしょ。だ・か・ら」

「で、どこに行ったんだよ」

「知床よ。車で日本海側を北上して、大間から函館に渡り、道東を走って知床まで。斜里町の道の駅『うとろ・シリエトク』に十日くらいとどまって、そこを拠点にして、周辺を気ままにさまよって来たわ」

「うとろシリエトク、ですか」

紗里がオウム返しに問うと、

「そうよ。シリエトクって、どう考えても、知床となったルーツの地名よね」

ママもやさしく微笑む。

こういう道の駅では、放浪の旅人同士との出会いや触れ合いという思いがけない側面もあるが、それよりなにより、北海道の雄大な自然の中に身を置くと、上質な孤独と真摯に向き合えるのだと微笑んだ。

「知床峠を越えて、森繁久彌たち撮影クルーが、『地の涯に生きるもの』を撮った羅臼町の、これ以上はもう車では行けませんという地点までいったわ。『キケン 道なし！』とか、『この先、行き止まり』とかの看板が立っている相泊橋の手前まで」

歩いてなら、さらに先に進めるのだが、その場合は、山登りの時と同様に、道の脇に入山箱が置かれていて、そこに氏名や住所、諸々の情報を記入したカードを入れておくことになっていたのだという。

「別に、ヒグマに会いたくて行っただけじゃないから、それ以上入り込もうとは思わなかったけど」

しばらく立ち尽くしていたら、バイク二台で寝袋を積んだ若者たちも来た。

バイクにまたがったまま、片脚ついて、彼らもしばし呆然と立ち尽くしていたが、ふと我に返ったふうで、バイクを反転させて走り去っていった。

「そうかあ、まさに地の果てという感じだったんだ」

「そうよ。地の涯の撮影隊も、同じ思いだったでしょうね」

ママは、遙かな昔に思いを馳せた。

「映画を撮り終えて、いろいろと協力してもらった地元の人たちに感謝をささげる別れの夜の宴で、森繁久彌が思いを込めて作り披露したのが、あの『知床旅情』だったの」

「加藤登紀子さんの、あの知床旅情ですか？」

「そうよ。彼女も、森繁さんのこの歌が気に入って、彼の許しを得てレコード化したの。わたしたち世代にとっては、有名な話」

「本家の森繁久彌さんの歌は、いわゆる森繁節で、訥々と、つぶや

くように、気持ちを含めて情緒たっぷりに歌うのが特徴だっただけに、僕らには歌いにくい感じもあったんだよな。とつつきにくい歌だった。それが、加藤登紀子さんによって、音符に忠実な、クセのない爽やかな歌唱に変わり、それでいて、歌詞やメロディーに込められた心情は損なわれることなく伝わって、みんなが大合唱できるようなヒット曲になったんだと思う」

「大饗くん、うまいこというわね。はい、これ」

お土産だとカウンターに置いたのは、エゾ鹿ジャーキーだ。

「もう、これが最後のパック。あげるわ」

「わっ、ありがとう。こんなめずらしいもの、もらっていいの？」

「もうあげるといつちやったわ。武士に二言なし」

そう、ママが大袈裟に見えを切ったとき、男性客がひとり入ってきた。

常連ふうで、カウンターの一番隅っこに黙って腰をおろした。歩き方とか、座り方が、どことなく、なよなよしている。

「尾藤くん、元気ないじゃないの」

「そう見える？ 彼が、部屋からいなくなっちゃったんだ」

ポツリといって、カウンターに突っ伏した。

ママにとって、ストレスのたまる夜になりそうな気配だった。

恭介は、尻がむずむずしてきた。

紗里も、隣から脇腹をつついていてる。

「じゃ、ママ。ありがとう、また来るよ」

「そう？ お迎えは呼ばなくていいのね。ありがとう、お氣をつけて」

外に出たふたりは、ネオンや街灯があふれる舗道を、肩を寄せ合いながら歩いた。

折からの霧雨が頬にかかった。

「雨かな」

「ううん、ちょうどいい」

紗里は恭介の腕をしっかりと抱きしめるようにかかえ、寄り添っている。

もう地下鉄は終電の時刻を過ぎている。

ゆるやかに下っている坂道を、どこまでも歩いていく。

ふたりだけの時間を堪能し、気が済むまで歩き続けたところで、タクシーを拾って官舎に帰っていた。

翌朝、窓のカーテン越しの日差しの中、紗里は全裸で、恭介の腕の中にいた。

恭介も裸で、紗里を抱きしめ、脚を絡ませたままの姿だった。ついに、ふたりは結ばれたのだ。

背景には、山本春乃からの強力なアドバイスがあった。恭介は、彼女に尻を叩かれ、マゾヒスト傾向の女性特有の微妙な心の揺れなどについてもレクチャーを受け、熱心にけしかけられていたのだ。

アドバイスは、言葉だけではなかった。

別れ際に、絶対に役に立つからと、極彩色の小箱もプレゼントされていた。

中には玉子型のローターが入っていた。数パターンの小刻みな振動を繰り返す、電動バイブローターだ。

「最初のうちは、これで、脇腹から胸、首筋や乳首などを、彼女の反応を確かめながら、ゆっくりと時間をかけて這わせるのよ。鋭く反応した箇所は、特に繰り返し往復させて、入念に責めるの。そうしたら、タイミングを見ながら、腰から太ももに移動させる。ここはとても敏感な部分だから、出来るだけやさしく、触れるか触れないか、そんな感じでローターを転がしながら撫でて、最後は、構わないから、中に入れちゃうの」

春乃からの、他では到底得難い、まるで神の声のような貴重なアドバイスだった。

教えられたとおりの手順で太ももの内側を撫で、恐るおそる股間に手を伸ばした。そのままの流れで、モゾモゾと秘唇の位置を確認する。花びらをつまみ、勇気を奮って指で押し割り、内側の肉壁が充分に濡れているのを確認すると、隠し持っていたローターを押し込んだ。

その瞬間、紗里は驚いた様子を見せた。

だがすぐに、相手がもう以前のような、手を握るのもためらうような恭介ではないと悟った。

すべてを委ねようと、全身の緊張をゆるめ、身体を開いたのだった。

恭介は、春乃から教えられたとおりの手順で、ドキドキしながら、いつまでも紗里を責め続けたのだ。

女体が熱を帯び、巨大なタコさながらに蕩けてきたのを確認すると、いよいよコトに及ぼうと、ローターを引き抜いた。

すると、紗里は素早く身体をずらし、恭介の股間に迷わず顔を埋めてきたのだった。花びらのような唇を大きく開き、男をくわえ込むと、いとおしように舌を這わせ、唾液を絡ませながら、丁寧に舐めまわすのであった。

驚きながらも、されるにまかせていたが、こうした経験も浅く、たちまち爆発しそうになった。

ここから先も、まだまだ、多くのことを伝授されていた。

「い、入れるよ」

耳元でささやいた。

「ああつ、う、うん」

恭介は、春乃から教えられた様々なテクニクを、時間をかけて、忠実、的確に体現していった。

紗里の仕込まれた肉体も反応した。恭介の腕の中で激しく燃え、狂おしく咆哮しては、淫蕩な姿をさらけ出し、奔放に悶えた。

恭介としては、初めてアブノーマルな世界を覗き、甘美な快楽を堪能した夜となった。

翌朝、先に目覚めた男は、眠り続ける女の乱れた髪をやさしく撫でながら、そつと顔を寄せ、唇を重ねていった。

警視庁捜査一課の近藤勇一は、文久製薬の青木隼人に照準を定めていた。

贈収賄などの経済事件は他課の仕事で管轄外だが、担当課が、製薬会社の、「捜査には全面的に協力してまいります」というテレビでのコメントとは裏腹の固いガードに苦しめられていたことは知っていた。それにしても、証拠調べが杳として進まない状況だったとはいえ、捜査が異例の速さで打ち切られ、書類送検された後も、早々に罰金刑が確定し事件が幕引きを迎えたことには大きな違和感を抱いていた。

文久製薬といえば大広告主。テレビも新聞も、このニュースを大きく取り上げ報じたところはなかった。

ところが、いまた文久製薬の青木隼人の名は、龍門教授死亡事件の一件でも、容疑者として近藤の手帳に名前が挙がってきていたのだ。

教授の胃に残っていたカプセルについて、贈収賄事件で押収した彼のスマホに、購入履歴が残っていたのだ。

もちろん、それはフランスでは医薬品として普通に流通しているものであり、日本でも、血液をサラサラにする効果が期待できるサプリメント扱い。麻薬でもなければ、違法なハーブでもない。

「確かに購入したが、それがどうした」

そう居直られたら、どうしようもないのだった。

そのカプセルが毒物の容器として使用されたのではないかというのは、単なるひとつの推測でしかないのだ。

捜査の闇を打開するためには、フランスに行くしかないと考えていたが、手持ちの間接的な証拠だけでは弱すぎて、申請したところで認められるはずもなかった。

やむを得ず近藤は、捜査二課の友人である尾北に強引に頼み込んで、溝曾路と文久製薬との贈収賄事件に関する捜査資料を見せてもらっていた。

「もう捜査本部も解散している。おまえのことだから信用しているが、これは、見せるだけだぞ。この資料室から一步出たら、俺が見せてやったことは忘れてくれ」

「わかってはいる。見るだけだ。これらの資料を、俺が証拠に使うことはない。必要と思ったものは、あらためて集め直すから心配は無用だ」

近藤は、ペラペラと手早く資料を調べていたが、小一時間ほど経過したところで、関係資料の入ったダンボール箱の蓋を閉じた。

「ありがとう。成果があつたよ、すまなかつたな」

頭を下げ、二課の資料室を出ようとすると、

「役に立てたのかな」

不安顔の尾北に、

「ああ、少なくとも、手掛かりはつかんだよ」

友人に背中を向けたままサンキューと片手を上げ、夕暮れの街に消えていったのだった。

雑踏の中を歩きながら、近藤には気になることがあつた。十メートルほど後ろの、野球帽の女だ。

尾行は仕事だったが、逆に、つけられたことはない。初めての経験だった。

「俺も焼きがまわつたものだ」

おそらく、捜査二課を出てからずっと、近藤の後をつけてきていたのだろう。

いまのいままで気付かなかつたことが、悔しかった。

巻く前に、もう一度確認しておこうと思った。

コンビニに向かい、ドアに映つた自分の姿のうしろに、やはり、野球帽の女が立っていた。サングラスで顔を隠している。これではまるで、お忍びの人気タレントだ。嫌でも目に付く。

人ごみに紛れターゲットに気付かれずに尾行したければ、ありふれた普通の姿でいることなのだ。

たとえ素顔をさらしていようが、そんなもの、誰も気にしてはいない。気にしすぎて隠そうとすると、結果的に、逆に目立ってしまったのだった。

気が変わったふうを装って、コンビニには入らず、近くのデパートに向かった。

正面入り口から入り、地下の食品売り場に向かった。デパ地下売り場には、地上のバス停に向かうエスカレーターや、裏道に抜ける複数の出口もある。

一番奥まった出口から外に抜けて、別のドアから素早く売り場に戻ると、野球帽が足早に外に向かっているとところだった。

巻いたと思った。

階段を使って一階に戻ろうとしていると、距離をとって、あの野球帽が見えた。

「どうやら、相手はド素人ではなさそうだ。」

尾行に気付いたことも悟られたことになる。

「よし、俺がやられた手を使うとするか」

ゆったりとした足取りで、次に向かったのは地下鉄山手線のホームだった。

一番後ろの箱に乗って、同じ箱に野球帽も乗り込んできたのを確認した。

発車のアナウンスがあった。

近藤は、のんびりつり革をつかんでいた。

発車ベルが鳴って、ドアが閉まりはじめたときだった。

ゆったりと、気のない様子で動くと、一瞬、素早く車外に滑り出たのだった。

ドアが閉まり、動き出した電車には、あの野球帽の女も残ったままだった。

数日後、近藤の姿は「ウサギ小屋」の前にあった。

「こんばんは」

まだ客は誰もいない店内に入ると、

「ごめんなさい。うちは会員制なんですよ」

ママの真利亜が、そっけない対応をした。

「朝比奈真利亜さんですね、警視庁の近藤です」

警察手帳を提示して、

「ちよつと、お話をお伺い出来ますか」

もちろん任意の捜査であったが、相手に断らせない、無言の圧迫感で迫った。

「それは構いませんけど、何でしょうか」

実は、捜査二課の資料の中に、文久製菓から朝比奈真利亜名義の口座への定期的な支払記録が混在していたのである。

女性の個人名義の場合、水商売の店であることが多い。

住所と電話番号を手掛かりに、このバーにたどり着くことが出来たのだった。

文久製菓を問いただせば、営業の社員が接待に使っていたと主張するだろうが、近藤は、龍門のツケを、文久製菓が肩代わりして支払ってやっていた可能性が高いと踏んでいた。

「龍門教授は、どれくらいのパースで来店を？」

その際には、文久製菓社員の同行はあったのかなど、矢継ぎ早の質問に、

「教授とご一緒だったのが、どういう方なのかなんてお聞きしませんし、仮に紹介されたとしても、いちいち覚えているわけじゃない

ですから」

のらりくらりと、ときには口ごもりながら、返事は巧みで、なかなか要領を得ない。

そんなとき、ふと、

「もしかして、おまえ、中山真利亜じゃないのか」

その一言に、女もすかさず反応した。

「やはり、あ、あの、近藤さん」

お互いに、何となく気づいていて、微妙なところに牽制球を投げ合い、探るようにしていたようだ。

「その節は、まるで実の父親以上に可愛がつてくださって」

思い出して、声を詰まらせた。

住むところもなく、仕方なく危険な男性たちの部屋に転がり込んで、寝泊まりする生活を繰り返していた。そんな乱れた暮らしから抜け出させるために、まず、近藤自身がアパートを借りるための保証人になった。真利亜がまた乱れ、投げやりな生活に戻ってしまいそうになると、親身になって、声を荒らげてまで叱ったりもした。

「本当に、あのときには……」

当時を思い出したのか、目を潤ませた。

実家を飛び出してから、ウサギ小屋のオーナーに拾われるまでには、猛獣たちが跋扈する都会の夜で、当然のように、狡猾な男性たちにもてあそばれながら、様々な危険と隣り合わせの生活をしてきたのだ。

「あの頃の近藤さんって、無茶をする警察官だなと思ってた」

話している真利亜の瞳が、心なしか、うるんでいる。

「わたしがバイクを盗んだときも、見逃してくれたばかりか、アドバイスまでしてくれて」

「昔のことなど、とっくに忘れた」

「駅が近くなったら、迷わずバイクを乗り捨てて、走って電車に飛び乗って」

「ああ、あれか」

近藤の頬がゆるむ。

「あれは、おまえを暴行していた連中のバイクだった。巡回警ら中だった俺が助けに飛び込めばよかったんだが、相手が多すぎた。ためらい迷っていたところ、おまえが逃げ出してきたんだ」

そのときは、追いかけようとあわてて出てきた男たちに、どうかしましたか？ などと、とぼけた質問をして、時間稼ぎもしてやったのだった。

「あの頃の俺は、独自の正義感で仕事をしていたような気がする。久しぶりにおまえと会って、思い出させてもらったよ」

懐かしそうに話して、
「何回か仕事で表彰状をもらって、気付かないうちに、平凡なおまわりになっちまっていたのかもな」

あらためて深いため息をつくど、

「意地になって追いかけていたが、考えてみれば、俺は文久製薬に何の恨みもなかった」

自嘲的な笑みを漏らした。

「今日ここで出会えたのも、運命かも知れない。わたし、あのころに近藤さんと巡り合えてなかったらと思うと、いまだに、ゾツとする。当時はわたし、やけっぱちになってたから、あのまま暴走してたら、いずれは誰かに騙されて、売春宿のようところに売られていたと思うわ」

中東の王族や石油シンジケートの親玉に、性奴隷として売られていったという女性の噂も、夜の街では、まことしやかにささやかれていたのである。

「本当に、お世話になりました」

しみじみといって、頭を下げた。

「やめてくれ。俺は大したことは何もしてない。たまたまおまえがしつかり者で、大人の女性として、自分で運命を切り開いたからこそ今日があるんだよ」

懐かしそうに、真利亜の顔を見つめ、

「もう仕事はやめた。いまからは客だ。会員じゃないが、飲ましてくるかな」

ドカッと、カウンター席の中央に腰をおろした。

「ありがとうございます。どうぞごゆっくり」

いそいそとグラスを用意した。

「実は、定年退職が近いんだ。中途半端なままで退職したくないと、ムキになってゴソゴソ動いていたんだが、おまえに会って、もうどうでもよくなつたよ」

冗談とも本気ともとれるような言葉を吐いて、凄味のある顔で微笑んだ。

病院に戻った紗里には、また変わらない日常が待っていた。

患者が途切れたとき、珈琲を飲みながら、ふと、新聞のニュースで見た、龍門教授の胃に残っていたという特異なカプセルのことを考えていた。毒殺に使われた可能性があると報じられていたカプセルだが、元々は、毒物とは無縁のリンプロキナーゼという粉末が封入されているものだ。大学の薬局で調べたところ、龍門が常用している薬のリストにはなかったものだといっていた。

だが、そもそも、大学病院では取り扱いのない薬なのだ。

フランスでは保健薬だが、日本では薬としては認められていないため、血液をサラサラにする効果のあるサプリメントとしての扱いになる。

昼食を取ろうと食堂に行くと、おあつらえ向きに、循環器内科の榎原洋子医師を見つけた。

セルフでBランチのトレーを手にすると、強引に隣の席に腰をおろした。

「榎原先生、ルンブロキナーゼって、どういう薬なんですか」
不躰に問いかけた。

「あら立花先生。ルンブロキナーゼが、どうかしましたか」
上品に微笑み返す。

裕福な家庭に生まれ、いかにも苦労知らずでまっすぐに育った才女といった趣の美人ドクターだ。

「突然ごめんなさい。ちょっとした事情があって、どんな特長がある薬なのかなと思って」

榎原医師の問いかけには答えず、重ねて質問をした。
「そうね。何を聞こうとされているか、はつきりしないけど」

そこで少しだけ言葉を区切って、
「血がドロドロになって、その結果、固まってしまいう血栓ってご存じですよ。血栓が原因で、脳の血管が詰まると脳梗塞、心臓の血管が詰まると心筋梗塞。命に係わる恐ろしい病気ですけど、応急的な処置としては、日本では、血栓を溶かすために、ヒトの尿から作られたウロキナーゼという酵素を静脈から注入するというのが一般的なんです」

梗塞を起こした直後、一定の時間内であれば、大量に静脈注射することによって血栓を溶かし、血流を復活させることができるのだという。

「ルンブロキナーゼというのは、フランスミミズを原料にしているんだけど、ウロキナーゼよりも、血栓の溶解力は強い」

だが、溶解力が強いということは、使い方に注意も必要なのだという。

「血管に分厚くなつてこびりついている血栓を、表面から少しずつ溶かしていつてくれるらしいけど、ものごとは、そう都合よくは運ばないのね」

「先生、どういうことなんですか」

「血管壁から、血栓の固まりごと、ごっそりとはがれることがあるの。それが流れていつて、血管の細くなつていところにつつかると、そこが詰まる」

モノによっては日本でも販売されているし、通販を利用すれば、

知識さえあれば世界中から購入が可能な時代になっているとしながらも、

「そういう、ある意味では逆の、漫然と使うとリスクもあることを理解して、わたしだったら、もし使うなら専門医の指導を受けながら使いなさいって、強く勧めるところだわね」

そこまでいつて、カレーの最後のひと匙を口に放り込んだ。

「もし、どなたかお知り合いに血圧の高い人がおられてルンブロキナーゼの服用を検討されているのだったら、わたしだったら、まずは納豆を進めるわね。ナットウキナーゼって、耳にされたこと、あるんじゃない？」

「納豆、ですか」

「そうよ。ルンブロキナーゼほどじゃないけど、その分、効果も緩やかだから、安心かな」

もつとも、心筋梗塞の薬で、ワーファリンを処方されている場合は、納豆は食べられないのだとも付け加えた。

「じゃ、お先に失礼」

さっそうと立ち去る後姿を眺めながら、龍門教授だって、大学病院では取り扱いがなくても、どこかのルートから定期的に手に入れ、常用していた可能性はあると思っていた。だとすれば、その習慣さえ知っていれば、ひそかにカプセルを手に入れ、中身を差し替えることも、差し替えた毒物入りのカプセルを混入しておくことも、不可能ではないように思えてもくる。

そういうえばいつか、小百合が、龍門は血圧が高いのに猟奇的なセックスを好み、異常に興奮しては喜んでいると、眉をひそめていたことを思い出した。

もし彼が常用していたとしたら、そのことを知っている者による犯行という可能性が高いのではないかと思った。

午後になると、午前中に積み残した外来診療もなく、入院患者のカルテをチェックしながら今後の診療計画を立てているところへ、突然、柳葉静江が訪ねてきた。

「おかげさまで、秋子の画集が順調に部数を伸ばし、重版を重ねているそうで」

もう将来の不安はなくなつたと、満面の笑みだ。

ふと見ると、ドアのそばに松葉杖を一本立て掛けている。

昨夜のステージで舞台の段差につまづいて足首を捻挫したため、今日は、整形外科を受診したのだという。

お昼過ぎに診察が終わり、湿布薬をもらって食堂でお昼をとっていたら、遠くの席に紗里の姿を見つけ、ごあいさつに寄ってみたのだという。

「なーんだ。それだったら、食堂で声をかけてくださったらよかつ

たのに」

「いえ、何だか難しそうな話をされているようで」

そのまま帰ろうかとも思ったが、やはり、ひとことお礼をと思つてきたのだといった。

「静江さん、まだ舞台で踊ってらっしゃるんですね。秋子ちゃんも着実に知名度がアップして、東京の上野で展覧会も予定されているほどになったわけで、もうストリップは引退されたら？」

遠慮気味に、そつと以前からの思いを口にするのと、

「いえ、秋子のお金は秋子のもの。わたしが働いて稼いだものではないですから」

彼女のお金に手は付けられないと、静かに首を左右に振りながらいった。

「でも、静江さんが、これまで親代わりになって育ててこられたわけだし」

「先生、それとこれは、わたしは別だと思つておりますんです」

頑として譲らず、今夜も舞台に立つ前には、足首の湿布も包帯も外すのだという。

「それにしても、秋子が自立できるめどが立って、ずつと心にあつた重荷が、羽が生えたようにふわふわとどこかに飛んでいってくれました。本当に、先生のおかげです」

繰り返して頭を下げて、松葉杖をつきながら帰つていった。

静江が自宅の古民家に戻ると、留守番をしていた秋子の横で、久しぶりに姿を現した猿渡がタバコをふかしていた。

「今夜のステージは休め。いましつかり治さないで無理をすると、癖になるぞ」

「そんなことをいっても、あの小屋にはお世話になっているの。メインのわたしが抜けたら舞台が成立しなくなるわ」

誰か代演を頼むにしても、いまからでは急すぎて間に合わない。

舞台に穴をあけるわけにはいかないのだという。

「秋子が、代わりにフラメンコを踊るといつている」

「余計な世話を焼くようだが、おまえたちはもう家族だ。家族なら、困ったときには助け合うのが当然だろう」

静江は、沈黙して答えない。

無言で席を立ち、ごそごと、台所で珈琲を淹れはじめた。

大恩ある猿渡に背く形になり、そばに居づらいのだ。

あたりにアロマの香りが立ち込めると、無言のまま、カップを猿渡の前に置いた。

「相変わらず頑固な女だ」

意外にも、あっさりと男が折れた。

「そのかわり、踊り方をアレンジしろ。かかと体重になるところは省略するか、誤魔化して体重がかからないようにするんだ。わかったな」

「は、はい」

うれしそうに返事をする、その声が弾けた。

「それにしてもめずらしい姿のカップじゃないか」

持ち手の部分が、蝶々の形になっている。

「待てよ、こういうのは昔に見たことがあるぞ。記憶が確かじゃないが、有名デパートでやったイギリス雑貨のアンティーク展で、同じようなものが並んでいたような気がする。目が飛び出るような価格だったはずだ」

「そうなの？ 知らなかった。わたしが若いころ、よく来てくれた熱心なファンがいて、その方から、わたしの二十歳の誕生日にプレゼントされたの」

高価な品物と聞いてうれしそうに微笑み、当時を懐かしむように遠い目になった。

「熱心に来てくれて。しばらくしてからわかったんだけど、ダムの発電所に来た新入社員のお兄さんだった。来てくれた時には、いつも決まっただけでかぶりつきにいたの。初めて来たころは、サービスでフルオープンしてあげたら恥ずかしそうにうつむいてしまっていたのに、そのうちに、度胸がついてきたのか、わたしがまだ踊っているのに、かまわずに話しかけてくるようになって」

「思い出したぞ。このカップ、俺がデパートの展示会で見たときは、確か、エインズレイとかいって、一客が数十万円という価格だったはずだ」

「まあ、そんなに」

あらためて驚いて、まじまじとカップを見つめた。

「そうともよ。婚約指輪並みの高級品だぞ。さてはおまえ、抱かれたな」

そのとたん、静江がポツと頬を染めた。

凶星だったのだ。

遠くを見る目になって、

「花火の夜に……」

ポツリといった。

「そうか、そうか。誰だって、青春のほろ苦い思い出ってやつは、宝物だからな」

猿渡が水を向けると、

「花火が終わって、みんなが帰ったあと、わたしたちだけは神社に残っていて、ロウソク明かりのほくらの中で」

そこまでいって、そつと瞳を閉じた。

必死でこらえようとしているが、目尻からこぼれた涙が、ツーツと頬を伝った。

「結婚したいといってくれて、両親に話もしてくれたんです。でも、猛反対されて」

もう、涙声になっている。

彼はすぐに遠くに転勤になったという。

「長い手紙が来たわ」

長文の末尾に、『ごめん』とあったのだという。

「馬鹿でしょ。わたし、世の中のことが、何もわかってなかったの。だって、わたし、ストリップパーだから」

ステージでは客たちと一緒にになって散々盛り上がり、拍手喝さいを浴びていたが、一步小屋の外に出ると、自分がどういいう目で見られていたか思い知らされたのだった。

当然のことかもしれないが、彼女は傷つき、荒れた。

「まだ二十歳だったし、混乱し、すっかり投げやりになってしまつて」

悪い男に簡単に騙されて、右も左もわからない東京に連れていかれた。

大都会で、生本番を強要するソープランドに売られ、住み込みで働かされていたところ、仕事で、ソープ嬢にフェラチオのテクニクを指導に来た猿渡と出会ったのだった。

そこが、運命の分かれ目だったといってもいい。

「お店に出ていたとき、お客で来ていた、頭にターバンを巻いた男性に気に入られたみたいで、よく指名してくれるようになって」

「そうだ。中東の大金持ちのバカ息子だ。おまえは、数千万円で売られそうになっていた」

たまたま、そのオーナーには貸しがあった猿渡が、まず強引に静江を助け出しておいて、その後で、有無をいわさず自由にすることを了承させたのだった。

「手順を踏んで普通に交渉を始めると、〃兄弟、悪いな。出来るならそうしてやりたいが、もうホニャララしてしまってるんだ。いまさら、どうにもならないんだよ。すまねえな〃などと、うまいことをいって逃げようとするに決まってるからな」

一応は仲間面して付き合っているが、一皮むけば、腹の中では仲間でも何でもないと思っている。所詮は、ただの仕事上の付き合いでしかないのだ。

蛇の道はヘビだと、冷ややかに笑った。

「それだけじゃなかった」

真顔になって、静江が男を見た。

「猿渡さんには、本当に、何回も助けられたわ。何もお返しが出来

ないのに、甘えてばかりだった」

なよなよと男に寄り添い、身体を委ねた。

「やめろ、秋子が見ているぞ」

あわてて耳元でささやく。

「大丈夫、絵を描いてるわ。はじめると夢中になって、周囲の音も耳に入らなくなるのよ」

没頭していると集中するから、周囲の雑音は遮断されているのだと笑った。

「それに、見られたって、いい」

いとおしそうに、男を抱きしめた。

青木隼人は、父親の勧めるままに、漫然と文久製薬に入社してしまったことを後悔していた。

初めのうちは、文句はなかった。

龍門教授担当になって、教授の研究室に飛び込んだ初日に、リボンで目隠しをした美女を抱かせてもらったのだ。

それが、清濁あわせ吞んで、共にずるがしこくやっていこうという、ある種の契りの儀式だという自覚は充分にあった。

夜の店の支払い、教授から請求書を受け取ると、それをそのまま経理にまわした。

だが、行きつけの店の場合は、あらためて青木自身が訪問し、自分の方に請求書を送るよう交渉した。次からは、直接経理から落としてもらうようにしたのだ。

大学病院で使う薬のシェアを、文久製薬が露骨に広げていくというのは憚られたが、他社の既存の利益を損なわない範囲で、新規の物品調達にあたっては、入札が求められるような高額なものも含めて、優先的に文久製薬が指名されるようになった。

そういう意味では、順調だった。

そのうちに、いかかわしいメーカーの電動バイブレーターや、催淫剤の購入といったものまで依頼されるようになった。

さすがに経理にまわすのはためらわれ、そういうものについては自腹を切った。

例の、カプセルタイプのルンブロキナーゼ粉末をフランスから定期購入するよう頼まれたときも、どういう目的の薬か意味が分からず、もし何かあっても困らないように、あえて経理にはまわさず、自分で払うようにしていたのだった。

相手が溝曾路教授に変わって、接待内容は一変した。

溝曾路は高級料亭やラウンジが好きで、それも大勢で繰り出し、賑やかに楽しむのが好きな男だった。

そうした夜の街での振る舞いは嫌でも目立ち、結果的に捜査の手が入ることになった。

文久製薬側が負担していた様々な支払いが洗い出されていた。関係者にとっては、眠れない夜が続いた。

そんななか、青木が自腹で負担していたものにまで及ぶことはなかった。

だが、それは結果論にすぎない。

青木隼人にとっては、地獄の日々だった。

逮捕された直後は、取調室で連日のように厳しい尋問を受けた。いくら声を荒らげられても、答えられないことに対しては堅く口をつぐんだ。

会社に対して忠実であることが、自分の仕事だと思っていた。連日、取調室で厳しい尋問が続いた。

ストレスに押しつぶされそうになって、もう限界だと思ったときに、なぜか、急に捜査が終了し、捜査本部が解散してくれた。

ホッとはしたが、仕事はこれからも続けねばならない。

そう思うと気が重かった。

「やあ、お疲れさま。大変だったね」

重い足取りで久しぶりに出勤すると、すぐに重役室に呼ばれた。

「今回は、派手にやり過ぎてライバル会社から狙い撃ちされた形だが、君のせいじゃない。しばらくは秘書課付で、特段のミッションは何もない。まあ、ゆっくり精神的な疲れを取ってくれたまえ」

桜沢常務が、笑顔で慰労の言葉をかけた。

「午後五時になったら出掛けよう。付き合ってもらうよ。それまでは、秘書課の調査員室でゆっくりしていただろうい」

思いがけない言葉だった。

「はい、ありがとうございます」

大所帯で、全員がピリピリしながら働いている秘書課とは別に、調査員室というのは、ひっそりとしたたたずまいの小部屋で、まるで資料室のように静かだった。

ドアを入ると、入り口近くに小さなデスクがあり、入社して間もない若手社員の露久保玲子が事務を執っていた。

「どうも、青木です」

「あ、初めまして。露久保玲子と申します。お世話をするようにいわれております。何でもおっしゃってくださいね」

事実上の秘書として、自由に使えるようだと思った。

「よろしく頼むよ」

席に着いて、何気なく窓の外に目をやったとき、

「あ、あの、よろしかったら、珈琲でもお入れしましょうか」
さっそく細やかな気遣いを見せる玲子に、

「そうだな」

遠くのビルに視線を泳がせたまま、ゆったりと椅子の背もたれに体重を預けた。

なんとなく、重役気分だ。

夕方五時近くなったとき、

「あの、桜沢常務から、わたしもお供をするようにいわれているんです。退社の前に着がえとかありますので」

そう断って、早めにデスクを片付け、席を立った。

どうやら自分は慰労されるとわかって複雑な気分になった。桜沢常務だけでなく露久保も同行するとわかって複雑な気分になった。

三人を乗せたタクシーが止まったのは、『貴族の森』という看板の前だった。

「さあ、ここだ。入ろう」

分厚い防音ドアを開けると、まぶしい光が飛び交い、エレキギターの強烈なサウンドが、店の華やかな雰囲気の色を添えていた。

「あれ、露久保さんは」

同行していたはずなのに、姿が消えている。

「彼女はいま、着替えているんだよ。昨年まで、ここでアルバイトをしていたんだ」

意外なことをいう。

「いまにわかる。ここは、常連の間では、着ぐるみ倶楽部といわれているんだよ」

そういわれて気付いた。飲み物を運んでいるホステスたちは、みんな、動物の着ぐるみ姿だ。

「お待ちせしましたあー」

露久保玲子の、再登場だ。

「おいおい、気が早いトナカイだなあ。クリスマスは、まだまだ遙か先だぞ」

桜沢が、オーバーにおどけた。

彼女はダブダブのトナカイの着ぐるみ姿だった。露出度こそ高くないが、これが、なかなかセクシーなのだ。

「青木さん、腰の上に乗ってもいいですか」

昼間とは別人のようにフランクで、なれなれしい。

「いいけど、その、手首に着けてるのは？」

腕時計のようなものを巻いている。

「あ、これですかあ？ 脈拍計測モニター。いまは青ランプですけど、脈が速くなつて一定の数値を超えると、赤ランプに変わるの」

説明しながら、青木の膝に大胆にお尻を乗せて、

「ごめんなさいね、重いでしょ」

申し訳なさそうに詫びて、手のひらで男の太ももを撫でるのだっ

た。

そこで桜沢が話に割り込んできた。

「おさわりして、少しでも早く赤ランプを点灯させる、一種のゲームなんだよ」

にやけ顔で、口元をゆがめた。

「わしの持ちタイムと、どっちが速いか競争してみるかね」

「え、常務、持ちタイムがあるんですか」

驚く青木に、

「わしの記録は十四分二十七秒だ。挑戦してみるかね」

自慢げに胸を張った。

「だって、あんなとこまで触って。常務さん、反則のとこばかり責めるんですもの」

ふくれっ面をして口を尖らせた。

「いいから青木君、露久保君の全身を揉みもみして、興奮させるんだよ。大人のゲームだ。さあ、やってみたまえ」

真顔でけしかけた。

「いいのか、本当に」

ためらいながら、膝の上のセクシーなトナカイに念を押すと、

「だ、だって、常務さんのご命令だし」

甘えたような声でもたれかかってきた。

「青木君、業務命令だ。さんっ、にいつ、いち、スタート！」

その声で、男も反射的に、着ぐるみの上からトナカイの乳房をまさぐっていた。

「痛いっ。乱暴はイヤッ」

「ご、ごめん」

あわてて胸から手を離すと、

「ううんっ」

女に手を握られ、そのまま、再び胸に導かれた。

「そ、そうか、わかったよ」

あらためて乳房をまさぐる。

ブラジャーは着けていなかった。

「下着は？」

「お店の規定で、着ぐるみときは許されてないの」

「そうなんだ」

今度はやさしく、包むようにして揉みはじめた。

そっと撫でるように揉み続けていると、

「ううん」

まどろっこしそうに大胆にうめいて、胸を青木の手のひらにグイグイ押し付けてきた。

気分が乗ってきて、もっと激しく責めて欲しがっているように感

じた。

さっきは、乱暴はイヤだといったばかりなのに、と思いながら、素肌を撫で、豊麗な乳房を荒々しく握り締めた。

ムニユツと、指に力を込めて、肉球に深々と食い込ませる。

「こ、こうか。ほ、ほうら、これなら」

どうだと問うと、激しくのけ反り、身体をよじって背後の青木の唇を吸おうと見悶えている。

「むっ、むうっ」

それと察して唇を重ねると、すかさず舌を絡ませてきた。

ひとしきり舐め合い、ねっとり唾液を吸い合っていたが、そつと唇を離すと、

「か、噛んで。乳首を、噛んで」

うわごとのように訴えた。

「おっ、おう」

トナカイの胸をはだけさせ、乳房にむしゃぶりついていった。手首のモニターは、とつくに赤ランプを点灯させていた。

桜沢は何もいわないで、青木を、なすがままにさせている。実は、彼も若いころ、贈賄罪で警察に引っ張られた経験を持っていた。

当時は、何が贈賄で、何が通常の社交儀礼の範囲内か、判然としないグレーの部分で勝負だと思っていた。

あえて、危ない橋も渡った。

保釈された時点で、精神に大きなダメージも受けていた。

優しい父親のようなまなざしで、心の底から、青木隼人のことを慰労してやりたいと思っているのだった。

「あ、あ、ああ」

トナカイは、股間にもスリットが入っているデザインだった。

「あ、あ、青木さん」

狂おし気にうめいて、男の手をつかむと、その、禁断のスリットへといざなったのだった。

「っ、露久保さんっ」

トナカイの動きに呼応するように、男の暴走が始まった。

着ぐるみごと、あらためて背後から抱き直すと、大胆に開脚させ、自分の両膝をまたがらせた。

豊満な臀部が、自分の股間にぴったりと密着した。

禁断のスリットから手を入れようとすると、作業しやすいように、

トナカイが、スツと腰を浮かせた。

もはや、男にためらいはない。

濡れた秘唇に指を挿入し、妖しい肉褌をまさぐった。

女の手がモゾモゾと青木の腰に伸び、手探りでベルトをゆるめよ

うとしている。

されるにまかせていると、ほどなく下半身を完全に露出させられてしまった。

再び女がダイナミックに反り返り、口づけをねだるそぶりを見せてくる。

「お、おう」

即座に男が応じ、唇をかぶせていった。

「むふっ」

またまた、激しく舌を絡ませ合い、欲望の向こう側にあるただれた快楽をむさぼり合うのだった。

激しく欲情し、燃えるようなベーズを堪能した後のことだった。

トナカイの尻が、何かを探るようにモゾモゾと動き、男もまた、それに合わせて腰の位置をしっかりと定めると、ズズッと下から突き上げた。

「あ、あ、あああっ！」

女が、たまらずうめいた。

手の甲を口に当て、

「ああっ、あ、あはあ、はあ」

男は、すでに無我の境地に入り、ただひたすら、アクセルを踏み続けていた。

見守る桜沢は、証拠として運び出された帳簿類に記載されていること以外は何も語らず、実質的に黙秘を貫いた青木のことを評価していた。

若いころの自分の姿にも重ね合わせていたのだった。

翌朝、青木が調査員室に出勤すると、

「やあ、来たな」

入り口にデスクのある露久保だけでなく、桜沢も窓際に立って待っていた。

「昨夜はどうも、お気遣いいただいて、ありがとうございます」

深々と頭を垂れた。

「いいんだ、気にするな。君にはいずれまた、過酷な戦場で働いてもらうことになる。それまでは、せいぜい気持ちを休めて、英気を養っておいてくれたまえ」

それだけいって、ポンと青木の肩を叩き、

「じゃ、露久保くん、あとは頼んだよ」

そういって、さっさと去っていった。

取り残された感じになった青木が、昨夜の露久保玲子との熱闘を思い出しながらもじもじしていると、

「珈琲、お淹れしましょうか」

昨夜のトナカイ姿など夢だったかのような、白々しい顔で微笑ん

だ。

「喜んでいただけたのならよかったですけど、昨夜のアレ、ビジネスですから。勘違いしないでくださいね」

平然と、爽やかにいつてのけたのだった。

「も、もちろんだ」

とっさに、そう応じていた。

「わかっていたとも」

口ではそういったが、内心、ビククリ仰天だった。

彼女もまた、巨大企業の中にあって、特殊な任務を遂行するため引き抜かれた企業戦士のひとりだったのかと、あらためて思い知らされていた。

紗里の携帯に、ウサギ小屋のママからメールが入った。

龍門教授の一件を捜査していたベテラン刑事が、数日後に定年退職を迎えること。その人はママが若いころにお世話になった大恩人で、退職の日に、店でささやかなお祝いを計画していること。ついては、その日に、ママの友人ということで同席してみないかという内容であった。

その日、ウサギ小屋のカウンター席にいたのは、紗里ではなく大饗恭介と前田健作だった。

病院から離れられない沙里が、恭介に話をした結果、こういう対応に落ち着いたのだった。

「からぶりになつたら、ごめんなさいね」

公務員には守秘義務がある。それは退職してからも変わらない。「大丈夫です。公務員の基本ですから、それだけのベテラン刑事なら、うかつな話はされなと思いますから」

特段の期待はしていない。

「先日、退職が近くなってきた日に、最後に担当した事件の捜査が仕上げられないままに退職を迎えることを悔しがつておられたんですよね。それで、つい、紗里ちゃんにあんなメールを」

「どうぞ、そんなにお気になさらないで。僕ら、どうせどこかに飲みに出てましたから」

穏やかに微笑んで、

「すいません、これ、お代わりを」

手にしたグラスを、わずかに持ち上げた。

「俺たちは、今夜は普通の客でいた方がいいと思うんだが」

ポツリと、前田がつぶやいた。

ママとしては、声をかけた相手は紗里だった。

彼女の場合は、龍門教授とも、妻の鈴森小百合とも親しく密接な

関係だったからだ。

近藤刑事としても、様々な想いを伝えたいという流れになる可能性はなくもなかったと思う。

だが、自分たちは、いつてみれば、龍門教授からしたら知り合いの知り合いでしかないのだ。

「そうだな。僕らは、カウンターの端っこで、ゆきずりの客として飲んでいた方がよさそうだな」

どうだろうという顔で、ママを見た。

「直接、近藤刑事と話をするチャンスがなくなるけど、それでいいなら」

ママもうなずき、男たちは一番奥まった隅の席に移動した。

近藤勇一が店に入ってきたのは、約束の時刻を大幅に過ぎてからだった。

女性に支えられながら、千鳥足で。

「花束をもらって、拍手に送られ警視庁庁舎を出たのが早すぎたよ。花束は、どこかの店に置いてきちまった」

約束の時刻まで、どうやら時間があり過ぎたようだ。

「こちらは？」

入るときに肩を貸していた女性は誰かと問うと、

「さっきの店で盛り上がって、意気投合した人だ」

答えながら、困ったような顔をした。

「あの、わたし、露久保と申します。近藤さんとは、本当に、たまさっきのお店で」

爽やかに笑った。

近藤は、さすがに泥酔しているせいか、この相手が、いつか後をつけられた野球帽の女だとは気づいていない。

「刑事さんだったんですか」

「そうよ。凄い腕利きで、わたしの大恩人」

真利亜ママが、カウンターに置いた近藤の手に、自分の手を、そっと重ねた。

「無能なデカだったよ。最後の最後、フランスに出張させてもらっていけば、無理にでも鍵穴をこじ開けることができていたかもしれないんだが」

悔しそうに言葉を絞り出した。

「フランスなの？」

「ああ。おそらく、な。少なくとも、有力な手掛かりはつかめたはずだと思うと、つい悔しくてな」

こんなに飲み過ぎてしまったのだと冷笑した。

「俺が、もう少し能力があったら、フランス出張を認めさせられるだけの資料を突きつけて、いまごろは、事件の全貌を明らかにする

ことが出来ていたかもしれん」

「いまいましてにづやいて、天を仰いだ。
が、それに続けて、

「というの、実は、半月ほど前までの俺の姿よ。先日、このママと再会して昔話をしていううちに、気持ちが変わった。正義の味方、庶民の味方になろうと、純粋な気持ちで警察に入ったはずだったが、ふと気づいたら、俺は、単なる猟犬でしかなかった」

「穏やかな目で微笑んだ。

「いまとなつては複雑な思いだが、過去は変えられない。これも俺の人生と、受け止めるしかないんだろうな」

「さびしそうにつぶやくと、

「わたしなんか、何もいえない立場だけど、庶民にとっては最高の刑事さんだったと思うわ」

「真利亜が、カウンターの下から細長い箱を取り出した。

「はい、これ。長い間、本当にお疲れさまでした」

「なんだこれ」

「開けてみると、中から出てきたのはネクタイだった。

「それを見て、

「退職後はどうされるんですか」

「ぴったりと寄り添うように座っている怪しい女、露久保玲子がさりげなく尋ねるた。

「しばらくはゆっくりして、来年の春からは交通事故相談員として再就職させてもらうことが決まっている。ありがたいことだよ」

「言葉とは裏腹に、さびしそうにいった。

「じゃあ、事件の捜査は？」

「ああ、もう完全に卒業した」

「その言葉を聞いて、

「長い人生、お疲れさまでした。ママさんのこのネクタイ、さっそく役に立ちそうですね」

「しみみりと、ねぎらいの言葉をかけた。

「ああ、そうだな。ありがとう」

「時間調整のためとはいえ、前の店で相当飲み過ぎていたようだ。

「真利亜、いろいろ気を遣わせてすまなかったな。これからは、ちよくちよく顔を見にくるようにするよ」

「そういうと、来たときと同様に、女に身体を支えられながら立ち上がった。

「ちよつと待って、おともの籠を」

「そういつてタクシーを呼ぼうとしたママに、

「大丈夫だ、表で拾うさ」

「女の肩にもたれかかりながら、ふらふらと出ていった。

一緒に店の外に出て、しばらく見送っていたママが戻ってきて、
「事件の話は、結局何も聞けなかったですわね」

申し訳なさそうな顔をした。

「いえ、そんなことははじめからわかっていました。近藤さんもプロですから、予測の範囲内で」

「そうだな。しかし、フランスというのが、これがなかなか」

「うん。大ヒントだったな」

恭介も目を輝かせた。

「あの、教授の胃に残っていた疑惑のカプセルもフランス製で」

「そうだ。鈴木小百合の作品を一手に扱っている画商の拠点もフランスにある」

恭介は、実は上司から、自分の担当業務ではないが、フランスでの会議に代理出席してくれないかと打診されているのだった。

「もしフランスにいったら、マダム・モルガンに会えるかなあ」

「文科省が文化交流で使っているフランスのエージェントに、ピエールという男がいる。役に立つ男だ。もし渡仏が決まったら、連絡しておいてやってもいいぞ」

話がトントンとまとまっていく。

露久保玲子は、警視庁刑事を退職した近藤勇一を自宅まで送り届けた後、桜沢常務に電話連絡を入れていた。

「証拠として押収された資料以外には、これといった重要情報はつかんでいないようでした。彼はもう退職し捜査から外れましたし、残りのメンバーに、彼のような警戒が必要な、古いタイプの刑事はいませんから」

もう必要以上に心配しなくてもよさそうだと報告した。

「彼はおそらく個人としても、これから先、独自に捜査を続けたりはしないという印象を持ちました。変に気が変わらないように、これからもう、そつとしておく方が賢明ではないかと」

尾行なども控えるべきだと付け加えた。

「そうか、わかった。露久保君、ご苦勞様だったね。これからよろしく頼むぞ」

「お氣遣いなく。これが仕事ですから」

さりとて言い放って、

「それではまた、明日、会社で」

事務的な口調で、報告を終えたのだった。

立花紗里は、フィールドを病院から大学の研究室に移すことを真剣に考え始めていた。

現場で経験を積むにつれ、調べてみたいこと、試してみたいことが、ひとつ、またひとつと増えていったのだった。

自分だけの力では限界も感じていた。世界中の研究者たちと共同

で動けば、可能性だって大きく広がるような気がした。

「いいんじゃないの。立花先生は、案外、その方が向いているように思うわ」

循環器系のドクター、榎原洋子も背中を押してくれた。

「ただ、立つ鳥跡を濁さずよ。義理を欠くような真似だけはご法度ですからね」

きちんと、後継者の手当でだけは責任を持ってしておいて欲しいと釘をさすのを忘れない。

総合病院といっても地方都市の場合、ドクターの確保も容易ではないのだ。

「そうですね。大学に話をして、わたしの後任のこと、よくお願いしておきます」

忘れていたわけではない。

世の中は、自分中心にまわってはいない。

多くの人たちと、支え合いながら成立しているのだ。

正直にいうと面倒だなという気持ちもあったが、義理を欠くようなことはしてはダメだと、榎原女史から念を押され、あらためて心に噛み締めたのだった。

柳葉秋子については、上野で展覧会もやるし、それを機に拠点を東京に移すことも考えてみた。だが、そのことを静江に相談すると、環境を変えない方がいいのではないかと反対された。

「先生の、せっかくのご提案ですが……」

秋子の感受性は、この山里ではぐくまれたもの。生き生きとした動植物や、溪流を取り巻く自然豊かな空気に包まれて暮らしてきたからこそ培われたものと思うと、そう反論されれば、返す言葉もなかった。

「そうか、そうだよね」

自分が大学に戻ると、秋子を近くで見守ってやれなくなるという気持ちだが、無意識に判断をゆがめ、心の目を曇らせていたのかもしれないと反省した。

柳葉秋子には、柳葉秋子の人生があるのだ。

大饗恭介は、出張でフランスにきていた。

エージェントのピエールは、精力的に動いてくれていた。

鈴森小百合の「ドール」を落札したという人物との接触にも成功していた。

直接、買った本人から話を聞きたいというと、恭介との面会もセツトしてくれた。

いざ、会ってみると、作品そのものは大切に保管していると胸を

張ったが、実物を見せてはもらえなかった。入札は従来どおりの手順で行われたものであり、自分が正当な持ち主だという主張は一貫していた。

出品者が誰なのかは明かされていないが、鈴森小百合の画商をしているマダム・モルガンも、このオークションの古くからの常連であることは確認済みだ。

ピエールは、日本への留学経験もあるということで、日本語もわかりやすく、年齢も恭介と近かった。

「画商のブリジット・モルガンと会えないかな」

「ミスター前田からも、会えるように手配をするよう依頼されていたから、何回となくキャッチボールをしたんだが」

いまいましそれに、

「散々汗をかかされたあげくに、いま日本にいつてるから無理だ、という返事がかえってきた。え？　と思ったよ。おかしいよね」

日本にいったというのは、会見を断るための口実っぽいという。

「大饗がどうして彼女に会いたいのか知らないが、彼女の側に会いたくない事情があるというか、警戒して、避けているんじゃないかと思う」

ピエールは、マダム・モルガンは逃げたようだと言った。

「薬については、とりあえず製薬会社に照会中だけど」

顧客情報は、プライバシーの問題もあって、反応はさほど良い感触ではなかったという。

受付経由で、上層部に問い合わせてもらっている関係で、どうしても手間取ってしまうのだという。

「ピエールが、むずかしそうだと思ったら」

恭介が一計を案じた。

「無理なら顧客リストでなくても、ピンポイントで、青木隼人なる人物が定期購入してなかったか。それだけでもわかるとありがたいんだけど」

調査の要点を告げると、

「オーケー。そういうことでいいのなら、もう少しプッシュしてみるよ」

頼もしい返事が返ってきたのだった。

上野の森の祭

上野の森がにぎやかになっていた。

柳葉秋子の秀作展が開催され、全国各地から、発達障害の子供を持つ親たちが訪れるようになっていたのだ。

国内だけではない。フランスで開催された障害を持つ子供たちを対象にした絵画コンクルの応募者たちからも注目を集め、各国のテレビ局も関心を示した。直接取材チームを派遣してきた国もあるほどであった。

中心となって企画した鈴森小百合や、後援に名を連ねた文科省の前田健作による周到な宣伝が功を奏したということもあるが、決してそれだけではない。

現場である会場の壁面では、柳葉秋子の才能が爆発していた。壁面全体からはみ出してしまうような勇壮な作品が、誇らしげに並べられていたのだ。

元々は、秋子は、普通の子供が描くような四つ切サイズの画用紙に水彩画を描いていた。

鈴森小百合に見てもらうために持ち込んだ作品も、まさにその四つ切ばかりだった。

いまでは、本能のおもむくままに、巨大なサイズの絵も数多く描くようになっていた。

画用紙やケント紙の全紙サイズは、七八八×一〇九一ミリ。

いまや全紙では飽き足らず、全紙を何枚も継ぎ足した巨大サイズの力作も少なくないのであった。

雄大な山里の清流を背景に、昆虫や水生動物、鳥や植物たちがダイナミックに躍動していた。

こういうパーソナルな展覧会では、往々にして、作者と交流するイベントがよく企画されるのであるが、秋子の場合、自由なトークタイムというのは難しいこともあり、ファンだという観客たちと触れあうイベントとして、トークに代わって、制作現場を実演して公開することを考えていた。

まず、縦置きにした全紙五枚を横に並べ、同じものをもう一枚作って上下に張り付けた、およそ横が四メートル、縦が二メートルという大作の制作だ。

広い部屋の床にその巨大な紙を置いて、秋子が床に這いつくばり、鬼気迫る表情で無心に絵筆を走らせる姿は、来場者の胸に響くものがあるに違いなかった。

壮大なデモンストレーションだったが、企画を聞きつけ、その前後の様子も含めて、ドキュメンタリー映画として優先的に取材させて欲しいというテレビクルーからのオフアーも来た。

「凄いことになっているようだな」

柳葉静江に手を引かれながら、猿渡竜司も姿を現した。秋子の晴れ姿を見たかったようだ。

周辺の美術館では、ヨーロッパの古典派や印象派の有名画家たちの企画展を開催している。

それら、そうそうたる画家たちの作品に伍して、秋子の展覧会が盛況なのだった。

「秋子の非凡さに目をつけたのは俺だったが、まさか、ここまで大化けするとは思ってもいなかったよ」

ダンスを教えているうちに、我が子のように思え、可愛がっていた娘だった。

「石ころだと思ってたら、ダイヤモンドだったのね」

静江にすれば、感無量の思いだった。

「おまえという石ころ相手でも、共に暮らし、日々揉まれているうちに、ダイヤモンドを磨く役に立ていったのかもな」

「そうだったら、うれしい」

ふたりは、気恥ずかしい思いを抱きながら、晴れやかな会場に入っていた。

半分ほど回ったところで、中央に休憩用のベンチシートのある部屋で腰をおろした。

「いつのまにか、秋子も、もう中学三年生なのよ」

来年は高校生だといった。

「早いものだな」

「そういうことじゃなくて」

進路について、迷っているのだと打ち明けた。

中学までは特別支援学校に通わせていた。

特別支援学校には高等部もある。通い慣れた高等部なら、環境が変わる不安も、健常者にいじめられる心配もなさそうだが、高等部というのは、卒業しても高卒の資格はもらえないのだと、学校側から説明されたのだいう。

しかも授業内容が、就労に関する実践的なことが中心になり、その分、就職率も高いのだが、授業方針も、秋子には向いていないように感じるのだった。

「だからといって、秋子を普通の高校に通わせるのは、敷居が高いんじゃないか。周囲の友達みんなが、理解のある子ばかりという保証だつてないだろう」

猿渡のその言葉こそ、静江の不安を代弁するものであった。

「そうなんだよ。どう考えても、そうなるよね」

重苦しい気分で、静江がベンチシートで首を垂れたとき、

「まあ、こんなところで」

紗里が現れ、ふたりの横に強引に座り込んだ。

「まだ始まったばかりなのに、凄い人たちでしょ。これからニュースなどでも流されて、情報が広がると、まだまだ増えるわ。こうい

う美術展で入場者制限するなんて聞いたことがないけど、あまりに多いと、そういうことまで考える必要があるかとも思ってるんですよ」

興奮気味に声を弾ませた。

「静江、秋子の進路のことは、俺にじゃなくて、この先生に相談した方がいいんじゃないか」

ぼそりといった。

「あら、何のことですか」

ようやく、ふたりが浮かれた気分じゃないことに気付いた。

「静江さん、どうされたんですか。何を悩まれているの」

「先生、実は……」

来年から秋子が高校生の年齢になること。

進路について、支援学校から提供された情報で、迷っていることを伝えたのだった。

「そうかあ。秋子ちゃん、子供だと思っていたら、もう高校生のお姉さんになるのか」

ふーっと、吐息を漏らし、

「そうかあ。そうなんだ」

曲げた指先をあご近くに持っていき、考える顔になった。

いつだったか、猿渡から指摘された、紗里の無意識の癖だ。

「通信制の高校はどうかなあ」

それだと、美術系のコースがある高校だって少くないのだ。

「授業内容も、それが本線だから、秋子ちゃんとどれを選ぶか相談する必要があるだろうけど、同じようなことに興味を持っている友達だって出来る可能性はあるわ。どう？」

そこまで聞いて、静江の顔が、パツと明るくなった。

「それこそ、わたしより文科省の前田さんが専門だから、秋子ちゃんによさそうな高校を何校か選んでもらって、学校案内と受験資料を送ってもらおうようお願いしておくわ」

「そこまでしてもらったら、もう、わたし」

静江の、満面の笑顔がこぼれた。

「さっきまで泣きそうだったヤツが、もうこれだ」

皮肉まじりにいった猿渡も、ホッとした顔になっている。

「じゃ、ゆつくり観てやってくださいね」

そっと静江の肩に手を置いて、紗里が立ち去った後、

「相変わらず、芯が強い女だな」

双眸を細めて、その後姿を見送っている。

「あら、柳葉さん」

少し遅れて声をかけてきたのは、小森郁子だった。

「まあ、看護師さんまで、秋子の絵を見てくださりに。わざわざ東

京まで」

あわてて腰を上げ、ぺこぺこお辞儀をしている。

「こちらは、ダンスの先生でしたわよね」

「え、あ、はい。ねえ」

ひじで、男の脇腹をつついた。

まさか、女性を性奴隷として仕込む調教師だとはいえない。

「病院にお休みをいただいて東京に出る用事があったから、思い出して寄ってみたんです」

凄い人気ですねと、あたりを見まわしている。

「おかげさまで。わたしも驚いているんですよ」

静江も思わず相好を崩した。

「もう、全部ご覧になられたのですか」

「まだ半分ほど。それだけで疲れちゃって」

「そうだったんですね。でもまあ、急いで見てまわることもないですもんね。ご自分のペースで、ゆっくり回られたらと思いますよ」

それではまた、病院でと、小森看護師も去っていった。

そんなときだった。

「こういう展覧会では、可能なら二周するといいんだよ」

高校の制服を着たグループが通り掛かった。

声の主は、引率の教師のようだ。

「最初に見てまわったときには気付かなくて、二周目に、こんなところこんな作品があったのかと、脚が止まって釘付けになることがある。そういう作品の良さについては、一周目では気付かずに通り過ぎてしまうこともあるからね」

ダイナミックでパワフルな作品は、一見ただけで見ている者の心を驚づかみにするが、静かな、森を流れる風のような作品は、うっかりすると、その魅力に気付かないままに通り過ぎてしまうことがあるのだというアドバイスだった。

静江と猿渡も、ベンチシートの上で聞くとともに聞いて、なるほど、そういうものかと納得している。

晴れやかな場が苦手だという静江が、猿渡を伴いひっそりと訪れてから数日後に、秋子による、会場でのデモンストレーションは開始された。

目玉行事である、秋子との交流イベントの日だ。

病院の仕事があるため紗里は来られなかったが、大饗恭介と前田健作は、早朝から美術館事務所に詰めていた。

奇妙な緊張感があつた。

しばらくして、秋子や鈴森小百合のいる控室で、前田が撮影クルーとトラブルになっているという。敏腕ディレクターの一ノ瀬が、グイグイ秋子に接近し、矢継ぎ早に質問を連発していたのだ。

あわてた前田がカメラマンを押しつけ、おびえた秋子を抱くように守ってその場から連れ出した。秋子を小百合に預けると、一ノ瀬に向かつて猛抗議を始めていた。

一ノ瀬も負けてはいない。

取材の邪魔をするなど、後に引く気配はない。

前田も、それならもう取材許可は取り消すぞと、火に油を注ぐ様な言葉の応酬になっていた。

恭介のいる総務省は、放送局に電波を割り振る総元締めだ。自分がどうにかしなければと思ったが、たちまち、この場を収めるよいアイデアが浮かばない。

一ノ瀬は、一旦、秋子たちの控室から離れていたが、問題が解決したわけではない。

恭介は、離れた場所から、己の無力さを痛感しながら、ただ見守っていた。

「直接、秋子ちゃんに対するインタビューはしないという約束だったんだ」

前田は興奮していた。

企画段階での取り決めを、現場が無視して暴走するというのは、ドキュメンタリー番組の取材では聞く話ではあった。

現場を預かる一ノ瀬も、デスクに座っているだけの者に、現場の何がわかる、と思っている。

番組の質を少しでも高め、人々の胸に迫り揺さぶる内容にするためには、事前の取り決めにはあえて目をつむって暴走するのもやむを得ないと考えている。

「前田さん、番組は『スーパードキュメント午前零時』だといってました？」

声をかけたのは小百合だった。

「はい、そうですけど」

「わかった。わたし、約束を守るようにいつてみる」

そういい捨てて、スマホを耳にあてたまま部屋を出ていった。

すると、しばらくして、なんとあの怒り狂っていた一ノ瀬が、控室に、頭を下げて来たのだった。

真っ赤な顔で、悔し気に詫びて、足早に立ち去ろうとした男を、前田はあわてて呼び止めた。

秋子の発達障害の程度や、刺激しすぎると興奮して自分を制御できなくなることを、冷静に説いた。そうやってしまったら、ドキュメンタリー番組が成立しなくなるだけでなく、せっかくの展覧会も汚点を残す結果になってしまうことも。

「これから先、秋子ちゃんには直接話しかけないという約束を守ってくれるなら、すでに単独取材として録画した部分は、放送で使っ

てくれても構わない」

「譲歩のつもりで前田が付け加えると、
「そうもいかないだろう。もし今回、俺たちがインタビュー部分を
テレビで流したら、これから先、他局からの要求も断れなくなるん
じゃないか。強引なタイプは、俺だけじゃないからな」

不敵に微笑んで、
「秋子ちゃんの制作途上の映像に、それを見守る鈴森小百合画伯の
コメントをかぶせるなど、構成を組み立て直して再構築するから大
丈夫だ」

猛々しく吠え合っていた男たちは、腹を割って話し合った後で、
どうやら和解の兆しを見せていた。

ふたりが矛を収めるにあたっては、小百合の人脈の広さがものを
いうことになった。一ノ瀬の上司は、彼女が懇意な人物だったよう
だ。

恭介は、とにかく柳葉秋子の展覧会が、無難に終わってくれたら
いいと、そればかりを祈っていた。

本心としては、そもそも、人前での派手なデモンストレーション
などには反対だった。

だが、絵の専門家である鈴森小百合の強い意向があつた。それだ
けでなく、医師である紗里も、秋子のそのときの様子を見ながら柔
軟に対応すればという条件付きながら、あえて反対しなかったため、
恭介としても認めざるを得なかったのだ。

当日、フロアの床には、事前に構図を取った巨大な紙が敷かれて
いた。

水彩画絵の具によるアウトライン的な下塗りも施されている。

登場してきた柳葉秋子の手には、百色セットのクレパスの箱が握
られていた。

それは鈴森小百合からのアドバイスだった。

展覧会開催中、秋子はずっと、紗里の意向で、ホテルではなく、
小百合のアトリエで世話になっていた。

「自分の部屋だと思って、自由に使っていたいわよ」

やさしく話しかけられ、秋子は弾けていた。

巨大な、戦車のようなイーゼルに触ってみたり、キャンバスをか
ける台に足を乗せ、砲塔のような高い頂点まで手を伸ばそうと背伸
びして、あきらめたり。

もちろん、たくさんの絵も描いた。

アトリエの隅に立ってかけられた多くの作品に刺激を受けたようで、
気がつけば、夢中になって描いていた。

そんなときだった。

アトリエで、水彩絵の具の道具を広げ、自由奔放に絵筆を動かし

ている姿を見て、

「秋子ちゃん、筆で色を作るの、まどろっこしそうね」

ぼつりと、いった。

秋子の頭の中には、表現したい色がくっきりとキラキラしているのだが、その色をパレット上に一発では作れず、イライラしてしまふ瞬間があるのだ。

もちろん、思う色の作り方は頭に入っている。メインの色に、あと、どれとどれとをどのくらいの加減で混ぜればいいのかは、過去の充分な経験を通して、しっかりと身についている。

その色を作ったあとの、その先の構想までが脳の中で忙しくグルグルと渦巻いているから、そうした思考のスピードに、指の動きが追い付かないことがあるのだ。

それが小百合の目には、もどかしそうに映ったのだ。

「ほら、これを使って。指で描いたっていいのよ」

ちよつとしたサジェッションをして、画材屋が見本にと置いてあったクレパスを出してやったのがきっかけだった。

秋子は、飛びついた。

自分で工夫しながら、水彩絵の具とクレパスと、両方の画材を組み合わせて制作することも多くなった。

小百合とともに生活することで、秋子の世界が。また新しいステ―ジへとステップアップしていくように思われた。

建て前としては、秋子のデモンストレーションは、作者と観客との交流イベントであったが、発達障害があるという点を考慮して、参加者は静かに見守るというスタンスで、彼女の様子を見ながらスタートした。

しばらくは、立ち尽くしたまま、下描きの段階まで進んでいる巨大な画面を見つめていた秋子だったが、意を決し、ガバツと床に這った。

そこからは、迷いがなかった。

まるで憑かれたように、猛然とクレパスを走らせ始めた。脳内に浮かんでいる絵を見つめながら、一心不乱に動いている。

百色あっても、微妙に色出しが気に入らないポイントでは、指で画面をこすって、無心に色を混ぜている。

その様子を、周囲で見守る観客たちは、全員が無言だ。

時間が経つにつれ、それまでちぐはぐだった色と色とが、次第にまとまった一つの画面へと、魔法のように変貌していく。

そうして、床に這う少女の動きが、ピタリと正視したとき、バラバラだった多くのパーツが、見事に繋がっていた。

秋子が、ゆつくりと立ち上がった。

いま初めて気づいたように、周囲に群がる観客たちを不思議そう

に見まわし、につこりと笑った。

トコトコと、部屋の隅のテーブルに近づき、休憩用に用意してあるオレンジジュースのグラスをつかむと、ごくごくと飲んだ。

それまでの、異常なほどの緊張感がほぐれ、パラパラと拍手が起る。

すると、全員が我に返ったようだった。拍手は、一気に、爆発的に大きな喝采へと変わっていった。

鈴森小百合が静かに登場し、秋子の背後に立つと、耳元で何やらささやく。

それを受け、秋子が自分を取り巻く観客たちに向かってぺこりとお辞儀して、ふたりで楽しそうに笑い合いながら控室へと消えていった。

「不安もあつたが、やってよかったな」

前田がホツとしたように恭介に声をかけた。

「うん。彼女が似たような緑色を二本、左右の手に持って見比べながら首をかしげたときには、激しくドキドキしたよ。無事に終わってくれてよかった」

「そこまでいって、確かに、いつのまにか僕は、腫れ物に触るようにしすぎていたんだと思う。やってよかったな」

自分にいい聞かせるように、ゆっくりとうなずいた。

「秋子ちゃんは、この後は？」

「せっかくの機会だから、最終日まで鈴森先生のところで過ごさせてもらうらしい。凄くいい刺激をもらっているようだからな」

「そうか。感覚的に、共鳴し合うものがあるのかもしれないな」
前田もうなずく。

柳葉秋子の展覧会が終わった。

途中では、撮影をめぐる男たちとの衝突もあつたが、予想をはるかに超える来場者で、企画としては成功といえるものであった。

「秋子ちゃんに、ご褒美をプレゼントしたいのよね」

最終日に、作品の搬出も終え、がらんとした展示会場には、鈴森小百合のほか、柳葉秋子と叔母の静江、それに秋子の運転手役だという猿渡竜司がいた。

形の上では後援だったが、事実上の主催者の雑用を一手に引き受けた文部科学省の前田健作は、大饗を伴い、事務室に詰めて事後処理で忙しそうにしている。

「ねえ、秋子ちゃんに、北海道の大自然を見せてあげたいの。どうかしら」

それには、静江や猿渡の手助けが必要だといった。

「北海道ですか」

静江は目を丸くしている。

「そうよ。タイミング的にも、年度替わりが近いこの時期が丁度いいと思うの」

ぐいぐい説得にかかっている。

「俺も行くのか」

当惑する男に、

車椅子でも乗車できるキャンピングカーをレンタルするから、運転手になってくださるわよね」

逃がしてなるものかという、圧倒的な迫力だ。

「本人は、秋子はどうなんだ」

それが一番肝心じゃないかと指摘すると、

「一緒にアトリエで絵を描きながら、北海道の話をいっぱいしてたの。ネットで、いろんな写真も見せてあげたわ。でも、本物の大自
然は、写真なんかじゃ切り取れないものね」

どうやら、あらかじめ、本人とは話がまとまっていたようなそぶりだ。

「外堀は、ちゃっかり埋めてから話をしているのか」

男はあきらめ顔で、

「そういうことなら、どうぞ、お気に召すままに」

静江にしても、異論のあらうはずがなかった。

可愛い姪っ子が行きたがっているなら、喜んでついていきたいと思っただ。

「そうと決まったら、どういうルートで北海道に向かうかなんだけ
ど。仙台から、苫小牧行きフェリーが出ているのよね」

さっそく、いそいそと計画の説明を始めた。

「でもこれ、仙台を夕方七時四十分に出て、苫小牧に到着するの
が翌日の昼近くになるの」

大型船ではあるが、波に揺られながら一夜を過ごすのは、秋子の
ことを考えると避けたいと説明した。

「乗船時間が一番短いのが、車で一気に青森まで北上して、津軽海
峡フェリーを利用するルート。これだと大間から函館まで、一時間
半ほどだから、あつという間の乗船で済むわ」

「もう降参だ。わかったよ」

要は、秋子のことか第一。

あとはすべてを小百合に任せるから、その都度指示をしてくれた
らいいと、猿渡が白旗を上げて話は幕を閉じた。

その数日後、一行のキャンピングカーは大間港のフェリー乗り場
にあった。

「若いころに、俺もここから渡ったことがあるが、当時はちよつとした駐車場があつて、その端っこに、ベニヤ板素材のパネルで作つたような、小さな小屋があつただけだったぞ」

そこは主に、ハマナスの加工品など土産物を売っている小屋で、年配のおばさんがひとりで店番をしていた。そこで、片手間にフェリーのチケットも売っていたのだつた。

男が驚いたのも無理はない。

フェリー乗り場は、いまや、壮大なビルに姿を変えていた。

「驚くことじゃないわ。それが時の流れ。それだけあなたも老いたということね」

冷ややかに微笑んだ。

「あんたもな」

「そうよ。お金持ちも貧乏人も、誰もがみんな、公平に時を刻み、老いていくの」

乗船を終え、定刻に船が港を離れた。広々とした船内をみんなで歩いていると、ふと、秋子が足を止めた。

視線の先には、黒革のライダースジャケットに身を包んだ高齢の男性の姿があつた。

テーブルに肩ひじを突き、窓の外を眺めている。

男の前には、黒く光るヘルメットも。

「何か感じるものがあるのかな」

「秋子ちゃん、そんな顔ね」

小百合も否定しない。

函館港で降りてからは、海沿いを時計回りに北上し、宗谷岬をめざそうということになった。

最初に出会った看板には、『神威岬』とあつた。

「行ってみましょう」

「御意」

司令官殿の一声で、猿渡はハンドルを左に切つた。

広大な駐車場があり、半分ほどが埋まっている。

駐車場からゆるやかな坂道を登ると、遙かな海が見渡せる小高い丘に出た。

道をさえぎる大きな木製の鳥居が立ちはだかり、関所のようになっている。古めかしい看板には『女人禁制・神威岬』と大書されてもいた。

「若いころに来たとき、聞いたことがある。この女人禁制というのは、宗教的な話ではないんだ。風が強いと危険なんだ。だから、俺が前回ここに来たときも、強風で門が閉じられていた。来たのは二度目だが、この門に入るのは初めてということになる」

「あら、そうなの」

静江が驚いた顔をした。

秋子は、魅入られたように遥かな絶景に声もない。

神威岬先端までのルートは、どうにか見渡せているのだった。

「わーっ、やっと戻ってこれた。もう死んじゃう。体重が、三キロは減ったわ」

青息吐息で、岬までいって戻ってきた若い女性たちの嬌声が聞こえてくる。

「もう、やだ。ほーんと、見かけ以上に上り下りが激しいのよね。びっくりだわ。道が、梯子やネットになってる場所もあったし」

確かに、容易ではなさそうなルートだ。

「ここから先は道も細いし大変そう。車椅子のわたしは無理ね。残念だけど、ここで待ってる」

向かえと指示した本人だったが、力なく笑った。

「じゃ、わたしもここで。あんなに遠くまでは無理そうだから」
静江も一緒に待っているという。

「好きにすればいいが」

おとなしく待っている秋子の横を、

「わーいっ」

幼稚園児とみられる可愛い女の子が、両手を広げて、岬に向かう坂道を走りくだった。あぶないよーっ

「待ってー、走らないで。あぶないよーっ」

母親らしい花柄ワンピースの女性が、あわてて後を追いかけていく。

「先生、早く秋子も行きたい」

「おう行こう」

猿渡が弾んだ声で応じた。

大海原へとダイナミックに突き出した岬の、突端の高台まで到達すると、海の中まで岩が並んで列を作っているのが見えた。

そんな中、ひとときわ高く象徴的なのが、乙女の化身ともいわれる神威岩だ。

秋子は息を呑み、食い入るように眺めている。

「どうだ」

猿渡が声をかけると、

「うん、凄いね」

感極まったように答えた。

小百合と静江の待つ女人禁制の門まで戻ると、

「小百合せんせー、凄かったよー」

うれしそうに叫んで抱きついてきた。

「うわー、よかったわねえ、先生もうれしいわ」
やさしくうなずいた。

駐車場まで戻ると、あらためて北をめざした、

北海道北端の宗谷岬では、日本最北端の地の碑を眺めながら、公園のように整然と敷き詰められている石畳に車座になって座り、みんなで珈琲を淹れ、談笑していた。

オホーツク海とは反対側の、道路の向こう側にある建物を猿渡が指さした。

「あれはバス停なんだ。本来は、真冬に路線バスを待つ人のためにあるんだが、大晦日には、ここで年越しをしようという人たちが日本中から集まってくる。だが、ここは北の果て。バイク旅の者にとつては、あのバス停が寒さから身を守る最後の砦になる」

思い出すようにいった。

「先生、真冬に來たの？」

「そうとも。しかも、バイクでだ」

猿渡に説明されてよく見たら、確かに、『宗谷岬公園休憩所』という看板があり、その下に、バス待合室と書いてある。

「ふーん、そうなの」

小百合も、驚いたような顔をしていた。

ここは、いまこそ軽装の観光客でにぎわっているが、ここで新年を迎えようという冒険者たちにとっては、試練の地なのだ。

近くには、道の駅さるふつ公園がある。案内によると、キャンプ場も併設されているようだ。

最近、道の駅も雨後の筍で、車中で自炊する人たちに冷淡な道の駅も増えてきたという噂がある。

道の駅の看板を上げていても、その実態は、地域の人たちを相手にした直売所といってはばからない、そんな道の駅もチラホラ。施設の水道で水をペットボトルにくむのもためられるようなご時世だ。

「今夜は、余計な気兼ねをしなくて済むキャンプ場に車を入れて、バーベキューでもするか」

男の提案に、

「全部やってくれるんでしょね」

すかさず小百合が、不敵に微笑む。

「車中泊なの？」

秋子が問うと、

「そうだ。楽しいぞ」

あっけらかんと答えた。

「そうと決まったら、途中で材料をしこたま仕入れていこう」

北海道のコンビニには、本土と異なり、生鮮野菜などもふんだんに置いているのだった。

キャンプ場に入ったところには、先客のキャンピングカーやワンボ

ツクスカーが数台並んでいた。

焚火のまわりで、男たちが交流している。

「ああ、あそこから曲がって本線に出ると、危ないんですよ」

「そうそう。まっすぐな道が多くて、めったに速度表示がない」

隣の青年がうなずいた。

「脇道から出たときは、当然、そこが何キロで走る道かはわからないですから」

「体感で、当然六十キロ制限だと思って走っていたら、ポツンと一軒家があるだけなのに、近くに民家があるとして、五十キロ制限だつたりするんですよ。そういうポイントほど、パトが張ってる」

どうやら、スピード違反で捕まった話らしい。

聞くとともになしに聞いていた猿渡の顔がほころんでいた。

どうやら彼にも、思い当たるふしがあるようだ。

簡易コンロをセットして、周辺に折り畳みの椅子を人数分だけ並べた、

着火剤を使って炭に火をつけた。

炎が落ちついてきたところで、網の中心部に肉をおき、周辺にトウモロコシやジャガイモ、ピーマンやニンジンなどを並べた。

しばらくすると、

「あら、いい匂いがしてきたわね」

上機嫌で小百合が現れ、両手に持っていた缶ビールの片方を、ズイツと、男に差し出した。

「シェフ、飲みながらどうぞ」

「これは、これは、我らがボス、おやさしいことで」

お道化ながら、笑顔で受け取った。

いつのまにか四人は、大自然の中で、ひとかたまりに打ち解けていく。

遠くで、誰かがギターを弾いていた。

しばらくすると、バンジョーの音が混じって、どうやらセッションを始めたようだ。

小百合たち一行が、道東を南下し、旅行が終盤を迎えたときだった。

「ねえ、静江さん。秋子ちゃんのことだけど、一人ぼっちで孤立しているのは良くないと思うの。高校は通信制でしょ。リアルな同級生がいらないわ。でもね、身近に誰か刺激し合える人がいた方がいいと思うのよ。毎日、刺激を受けながら暮らすことは心の成長のためにも必要なんじゃないかな」

小百合が何をいおうとしているのかわからず、当惑していると、
「探せば東京にも案外いろんな場所に自然は残っているわ。それにね、わたしの家はひとりで暮らすには広すぎる。静江さん、もしよ

かったら、秋子ちゃんと一緒に引越して来ませんか？ 時間がかかってもいいから、秋子ちゃんのためにも、考えてみておいてくれませんか」

そういつて、秋子にとって大切な、大きな宿題を持ち出したのであった。

「実は、立花先生からも、東京に出てはどうかといわれたことがあるんです」

静江は、迷うことなく話題に組みした。

「そのときは、わたし、秋子を取り巻く環境を急に変えない方がいいのかなと思って反対したんです。でも今回、先生のアトリエで秋子がのびのびと生活させていただきながら、楽しそうに絵を描いている姿を見ましたから。秋子とも、じっくり話をしてみます。ありがとうございます」

静江は、嬉しそうに何度もお辞儀をし、秋子と相談してみることを約束したのだった。

上野での大きな祭りを終え、秋子にご褒美の北海道旅行もプレゼントした。

新学年からは高校の通信教育課程に進むことにした秋子についても、静江から、鈴森邸で一緒に暮らすことに決め、引越し準備をしているといってきた。

束の間の静けさを取り戻した鈴森小百合のアトリエを訪ねていたのは、大饗恭介だった。

「初めまして。お話があるのですが」

秋子の美術展会場では何回もすれ違ったが、これまで、面と向かって口をきいたことはなかった。

「ついに、ここまで来たのね」

冷ややかに微笑んだ。

「フランスで、マダム・モルガンに会いたがっている日本人がいると聞いたとき、きつとあなただと思った。いつか、こういう日が来るかも、とは覚悟していたわ」

淡々といつて、まっすぐに恭介を見つめた。

「フランスに行ったのは、龍門教授の胃に残っていたというカプセルのことで、確かめたかったというのが一番だったんです。だから、画商のモルガンさんのことまでは、さほど重要には考えていませんでした」

「そうだったの。警戒しすぎて、かえってまずかったのかな」

少し驚いたようだ。

「エージェントのピエールから、マダム・モルガンに露骨に逃げら

れてしまったと聞いて、あなたの存在が、僕の中で急に大きくなりました」

そうになると、小さな疑問がいくつか見えてきたのだという。

「先日のデモンストレーションでも、秋子ちゃんは、どんなに大きな紙でも、それを敷くだけの広さの床さえあれば、縦横無尽に這いつくばって移動し、自在に絵を描くことが出来ました」

そこで小百合を凝視して、

「でも、車椅子のあなたは、そうはいかない。車椅子に座っているあなたは、アトリエにあるこのイーゼルに百号のキャンバスを置くと、上の方までは筆が届かない」

決めつけるようにいった。

「心配ご無用よ」

平然と微笑み、

「アトリエには、ほら、向こうに広いテーブルもあるわ」

「そうですね。でも、こちらには、ちょうどよさそうな踏み台もあります」

「確かに、車椅子生活になる前には使っていたわね。いまは、紗里ちゃんと珈琲を飲むとき、彼女が腰をおろしているわ」

淡々と応じる。

そこで双方がうなずき合い、意味ありげに口元をゆがめた。

「あなたが下半身不随になったのは、フランスでの交通事故が原因だと聞きました。車椅子での帰国となったニュースは衝撃的で、当時は大きな話題にもなりました」

「どこか、不自然なところがあつたかしら？」

「いいえ。ただ……」

わずかに口ごもって、

「ピエールに調べてもらい、念のため、あなたの手術を執刀したドクターにも会いました。彼によると、相当根気のいるリハビリは必要だが、がんばれば歩けるようになる可能性のある事故だったということでした」

恭介は、畳みかけるように続ける。

「フランスでの入院期間中は、あなたはリハビリにも熱心な優秀な患者さんだったとも」

「よく、そこまで調べたわね。読みも鋭い。ほめてあげるわ。けど、それもこれも、すべてあなたの推測でしかないわよね」

小百合は平然としている。

「車椅子では、キャンバスの上段までは筆が届かないはずだといわれたら、イーゼルから降ろしてテーブルの上に置いて描いたと言っているかもしれない。でもその前に、わたしがもし下半身不随を装っていたとしたら、それって、どんな罪になるというのかしら」

平然と言い放ったのだ。

意表を突いた反論に、恭介は絶句した。

追い詰め、論破したつもりが、相手にはまったくダメージを与えられていなかった。

「文久製菓の青山隼人が、龍門教授のカプセルを定期購入していたことも突き止めました」

「まあ、凄いわ。でもそれ、青山くんがやったことですよ」
動じるふうもない。

「龍門が、青山くんに頼んであのカプセルを常用していたことは知っていたわ。でも、肝心のシアン化合物って、素人が簡単に手に入られるようなものじゃないんですよ。仮に、どうにかして手に入れたとしても、見ても気付かれない形でカプセルに混入させることなんて、わたしのような素人には無理よね」

不敵に微笑んだ。

「それが出来そうな人物となると、ただひとり、青山くんということになりそうけど、誰がどう証言しようと、わたしは断固、依頼した覚えはないと言い張る」

そこまでいって、

「証拠はないわ」
自信たっぷりだ。

「わたしはね、聖人君子じゃない。わがままだし、自己中心。激昂すれば、暴走したこともあるわ。ここまで来るためには、自分勝手な汚い手も使った。でもそれらは、自分なりの正義感と人生観に基づいてのことだったつもりよ」

ふーっと、深いため息をついて、

「わたしたち、いつのまにか、継ぎはぎだらけの夫婦になっていたの。龍門の特異な性癖も許し、出来る範囲で協力もしてきた。それなのに、彼は変わった。平気で私を裏切って」

夜叉の顔だ。

「わかったでしょ。わたしはこれから、わたしの正義感で生きていくつもり」

勝ち誇ったように告げる。

「証拠はどこにもないし、犯人なんかいない。それでいいのよ。そういう事件だって、世の中にはいくらでもあるのよ」

それは、小百合の勝利宣言のように聞こえた。

無然たる表情で恭介が鈴森邸の門を出たとき、目の前に立花紗里が立っていた。

複雑で、心配そうな顔だ。

「大学の研究室に勤務することが正式に決まったの。だから、まず恭介くんに報告しなくちゃと思って」

官舎に向かったら、官舎棟の建物の陰から、恭介が思いつめたような怖い顔で姿を現した。

一瞬で、激しい胸騒ぎを覚えた。

もしやと思い、こっそり後をつけてきたのだと打ち明けた。

大饗恭介は、哀しい顔をしていた。

「終わったよ」

そういつてポケットから取り出したのは、小さなボイスレコーダーだった。会議のあと、議事録作成用として、持たされている器具だ。思わぬところで役に立った形だ。

紗里は、その器具を出した意味を察した。

「ダメ！。恭介くん、ダメよ。鈴森先生は、わたしの大神人なの。これからの秋子ちゃんにとっても、なくてはならない大切な人なのよ」

思わず、絶叫していた。

「恩人？ 君は利用されただけじゃないか。そんなこともわからないのか」

「利用されたかもしれないわ。でも、彼女と出会わなかったら、わたしはいま、ここにいなかった」

それだけはまちがいない。

「鈴森画伯は、犯罪者なんだ」

男は冷静だ。

「もしそうだとしても、大饗くん、よく考えて。わたしたちは、神ではないわ」

「すがりようなまなざしで、

「お願い。ねえ、お願いですから見逃して。気付かなかったことにして」

切々と、訴えたのであった。

「きみがそんな女だったとは思わなかったよ」

「大饗くん、冷静になって」

紗里の声のトーンが変わった。

「世の中って、公平には出来ていないわ。この世は法律というルールが支配するジャングルだと思わない？ 強大な権力を持つライオンやトラもいれば、狡猾なキツネもいる。わたしたちのような非力なイヌは、出来ることならオオカミでありたい。それが叶わぬ夢なら、せめて強い絆で群れを作って、群れのルールの中で、助け合って生きていく必要があるんじゃないのかしら」

血を吐くようにいった。

「あなたもわたしも、ライオンやトラに飼われているイヌだけど、本心としては、イヌやヒツジの皮をかぶったオオカミでありたいと思っっているはず。ねえ、そうじゃないかしら」

「僕は生粋のイヌだ。オオカミじゃない」

「そうなの。残念だわ」

立花紗里は、凜とした表情で、恭介を真正面に見据えた。

「わたしはね、もし自分が、ヒツジの皮をかぶったオオカミじゃなくて、中身まで純粋なヒツジだったとしても」

ここで言葉を、少しだけ区切って、

「せめて、オオカミの喉笛に噛みついて死ぬ、そんなヒツジでありたいと思ってるわ」

そういうと、くるりと男に背を向け、毅然として去っていったのであった。

群れのルール

立花紗里に、鈴森小百合から長文のメールが入った。

玄関の外で恭介と紗里が激しい口調で議論している声には、途中からだが気付いていたという。ふたりが話していた会話の内容まではわからなかったが、ただごとではないということは感じていたとも。

表が静かになったので、ドアミラーで玄関の前をうかがった。すると、なんと、まだ大饗恭介はその場に残り、立ち尽くしたままだったのだという。

いつまでも、長くその場にいて動かなかったのだと。

そして、彼が去ったあと、郵便受けにはボイスレコーダーが投げ込まれていたという内容だった。

メールを読んで、紗里は、無性に胸が苦しくなった。

自分のせいで、恭介は、想像を絶する苦悩にまみれ、もがき苦しんだに違いなかった。

自分が、強引に彼を群れに引きずり込んだ。そのことだけは疑いようがなかった。

大饗恭介にとっては、近藤刑事が退職した日以来の、久しぶりのウサギ小屋だった。

恭介が誕生日だというので、ママの真利亜が、ささやかなお祝いの会を企画し提供したいと申し出たのだ。

「大饗くん、お久しぶり。今日は貸し切りよ」

「ありがとうございます。厚かましくも、ちやっかり出てきてしま

いました」

「ううん、そんなことない。遠慮しないで楽しんでね」

恭介の横には、紗里が、小さくなって座っていた。

彼と顔を合わせるのには、鈴森邸の前で激しく議論し、決然と背を向けて去った、あの日以来のことであつた。

気まづかつた。

「せっかくのお休みなのに、悪かつたわね」

「あ、いえ。平日だったら約束していても、その時刻までに身体が空く保証はありませんから」

かえつて休日でよかつたんだと応じた。

ママは、奇妙な沈黙に気づいていた。

だからこそ、気を遣つて、無理に明るく話しかけようとするのだが、そんな軽い話題は、むなしく右から左へと通り過ぎていく。

「文久製菓の青木という男だけど」

ポツリといった。

「フランス支社長に抜擢されたらしい」

異例の昇進人事で、社内でも驚きの声が上がつたという。

「龍門教授の一件は、事実上、捜査本部が解散した。何年か毎に情報提供を求める仕事があるため、ひとりが兼務として名前だけ残している」と聞いた」

恭介が、重い話題を蒸し返してしまふ。

「そうなんだ」

紗里が、静かにうなずいた。

ホツとしているようにも見える。

ぎくしゃくした雰囲気は、変えようがないのか。

どこまで続く泥沼ぞ。

ウサギ小屋の狭い空間が、どんよりと重い空気に包まれていた。

そんなとき、唐突に、真利亜が口を開いた。

「あ、そうそう。紗里ちゃん、頼まれていたワンピースが届いてるの。奥で着替えて、大饗くんにも見てもらつたら？」

これは実は、用意されていた話題だった。

紗里は、内緒で、フォーマルなワンピースのドレスを、ママに頼んで見立ててもらつていたのだ。

「あ、はい」

素直に笑顔がこぼれた。

「じゃ、そういうことだから、大饗くん、飲みながら待つてくださるかしら」

「ああ、そうさせてもらいます」

気まづく応じ、わざとらしく、グラスを口に持つていく。

「じゃ、いきましょ。ノースリーブで、アクセントにシースルー

素材もふんだんに使ったセクシーなデザインなのよ」
「イヤだ、ママ。そんな」

恥ずかしがりながら、紗里も席を立ち、真利亜に続いて奥に消えていった。

しばらくして、シンプルなワンピースで再登場し、
「さあ、大饗くん、どう？」

ママに促され、紗里が、遠慮気味に両手を広げた。

「そんなんじゃないダメ。くるっと回りなさい」

「えっ」

とまどいながら、

「こ、こう？」

ちよちよこと、一回転した。

フォーマルなドレスだが、裾の広がりを抑えた品のあるシックなデザインだ。

その分、胸の部分にはシースルー生地が多用されていて、アダルトなセクシーさを兼ね備えている。

照れくさそうに席に戻ると、また、奇妙な沈黙が戻った。

恭介のグラスが、ほとんど空になっていた。

「あら、作りましょうね、同じものでいい？」

恭介が小さく頭を下げて、空いたグラスをママの前に滑らせる。

ママが新しいグラスを用意し、手に持ったボトルをトクトクと傾けているとき、

「恭介くん、ごめん」

小さくいつて、紗里がペコリと頭を下げた。

「勘違いしないでくれ」

意外にも、男は毅然として応じた。

「迷ったけど、決断したのは僕だ。自分の正義感に照らして決めたこと。立花に頼まれたからじゃない」

「えっ」

そこからまた、長い沈黙に戻ってしまう気配があった。

「紗里ちゃん、お酒がもう温もってるわ。新しいのを作りましょうか」

沈黙をさえぎるように、真利亜が機転を利かし、グラスに手を伸ばしたとき、

「あ、わたしはまだ」

反射的にいつて、グラスの上に自分の手をかざした。

そのときだった。

「飲めよ」

「えっ」

男の声に、女が驚く。

「紗里も新しいのを作ってもらって、もっと飲んだらいいといっているんだ」

彼女のことを立花と呼び捨てにしたことはあったが、ファーストネームで呼んだことはなかった。

「ほら、恭介さんだって勧めてるんだから」

「あ、はい。じゃあ」

新しい酒が出され、

「いただきます」

紗里にしては珍しく、グイグイと、半分近くまで一気に飲んだ。

「全部だ」

「え？」

「全部飲むんだ」

まっすぐに前を見たまま、断固たる命令口調だった。

そんな男をまじまじと見つめて、

「は、はい」

再びグラスに口をつけ、なんとか全部を空にすると、

「ふーっ」

見事に空いたグラスを、コツンと、カウンターに置いた。

真利亜は、黙って見つめている。

すると、恭介が、無言で、カウンターに透明なケースを置いた。

大型犬用の首輪が透けて見える。

紗里は、ドキッとした。

「それから、これも」

その上に重ねて置いたのは、フォーマルでシックな、まぶしいシルバーのチョーカーだった。首輪感はない。

何処から見ても上品なチョーカーだ。ワンピースのドレスと合わ

せても、不自然さはない。

「僕からのプレゼントだよ」

淡々と説明し、

「ママ、紗里のお色直しを手伝ってやってくれませんか」

真利亜も一瞬で男の意図を察し、

「わかった。まかせてちょうだい。さあ、紗里ちゃん、もう一回バツクヤードまで付き合ってもらおうよ」

引き立てるように促し、奥に入っていった。

しばらくして戻ってきた紗里は、気品漂うドレスシーな衣装には

不似合いな、大型犬用のいかつい首輪を装着されていた。

「彼女が、自分で、こっちにしてくださいと選んだの」

真利亜が微笑んだ。

それだけではなかった。

紗里の着ているドレスには、性奴隷バージョンの大胆なアレンジ

が施されていたのだ。

乳房の上下には厳しく胸縄が食い込んでいて、ドレス生地が乱暴に左右にずらされ、乳房が透けて見えている。

そればかりではない。

股間にも、ドレスの上から荒々しく股縄が食い込んでいた。

縦縄が、ドレスの裾を太ももの付け根まで持ち上げる形になり、なまめかしい下半身がむき出しになっている。まぶしく白い太ももが、容赦ない照明の元、赤裸々にさらされていた。

紗里の顔は、真っ赤だ。

「紗里ちゃん、あなたが、こうしてくださって頼んだのよ。何をそんなに恥ずかしがっているの」

真利亜が、楽屋でのやり取りまでバラシってしまった。

紗里は、ただ無言でうつむいている。

「でも、思ってた以上によく似合ってる。安心したわ」

メイク役を無事に終え、ホッとしたような表情でいった。

「さあ、行きなさい」

ママが背中を押した。

「あ、はい」

紗里は、両腕を胸の前で交差させ、ゆっくりと、恭介の待つカウンター席に向かった。

「お化粧もばっちりでしょ。可愛く仕上げたつもりだけど、どうかな」

「ママ、最高だよ、きれいだ。ありがとう」

「そう？　よかった。紗里ちゃん、可愛く出来てるって」

そんな真利亜の言葉を背中で聞きながら、いそいそと男の足元にひざまずいた。

「ふつつかですが……」

床に両手をつけて、服従のあいさつをした。

おずおずと、恭介のズボンのベルトに手をかけると、下着と一緒に、ゆっくりと膝までずり下ろした。

「お待たせいたしました、ご主人様。これからどうぞ、厳しく躰けてくださいませ」

まぶしそうに恭介を見上げ、ポツと頬を染めたのであった。